



5294
明
治
文
藝

東京文事堂
發行
八
葉

明治

明治 俠客傳序

自世を憤り鬱を筆頭に洩らす業にて虚中おのづから
 の初世より菅のや主人水滸百八の鳥合を取らず明治開明
 の初世よりしとる俠客劍者の類未を綴り文武相双び智勇
 相競ふ二十年前の今日も異なる人情を示し開智進歩の後
 鑑とす昔日の豪傑目下の英雄と其趣を異にすれ共世を
 憤り義にはやりて痴の如く狂の如きは俠者の自任する
 所編者能く此意を則りて此編成れり看客の佳興如何
 にある歟熟讀して文意を味へ





傳客俠治明

愛し説出す話といふは近來日本の劍客中にて關東の大劍客と音に響き名に聞えし千葉桃井
 神原と並び立ちて優劣なく一時英名を轟かしたる彼豊前國中津の藩士閃跳傳真影流の達人
 吉田半介が傳記として記事安政の始めに起り明治元年のすゝめ丁れる随分おもしろき話柄
 なりて先づの發端を尋ぬるに「維新前江戸沙留に於て（今の蓬萊社の處なり）宏大なる屋
 敷の御前して忠直なる人物なりしが其一子半介（たけのり）と云るは性質猛く腕力強く劍道は
 獨り強し非凡の聞は高かりしが惜ひ哉事に臨みて一度斯と思ふ時は飽までも執拗して彼
 強情を張振舞ひたり然れば爾親ども之れを愛ひ時として折檻し時としては諭せど彼れ遂
 ひも改心せず折をり血氣の所業に及びて後悔するを度くならずと斯て一日の事なりしが
 與平殿傳人を召れて機嫌よろしく打笑たまひ奈も華人共方が一子の半介と稱する者は尙房住
 の若年ながら天晴なる武藝ありて殊に力量凡ならずと近習どもが申すを聞じ我今日は何
 暇も去て甚は徒然と堪さるゆゑ其半介を召出し武藝のほど、力量とを試みんと思ふ故に
 其方立歸りて俱に來れよと仰せあるに吉田半介人頼首して誠有がたき御意にい
 仰せの如く半介儀は生れ得て少々ばかり力量を備へ居り且武藝も好める道にて太刀扱ばか
 りは心得居れどナニが扱て若年者ゆゑ恐れ多くも御直々の御覽に入る杯とすを然る見繼る

のいへき此義の平に御免を蒙り何か別段相催はして今日の御徒然を感さめ奉まつらん
辭退するを與平殿許したまはず然れば無益の謙遜なり若年者を養成するには予が折を直覽
して武藝の程を試験こそ者共が勵まに成り道の成就を促かを理われれば立地召連來れトある
再應の君命に準人も今は因辭かねけん然らば御意は隨がはんとて退席したるが
て一子半介を召連來り親子君前へ膝行して暫時拜伏して居たりしと云

第二回

吉田準人君命は依て我子半介を召連參り君前途かに拜伏するを與平殿近習をして之を問近
く召寄たまひ先半介の骨柄いかよと呼起して見たまふは彼は當年十五と雖ども丈合恰大さ
くして色白く目元清しく童顔最ども愛嬌あり且筋骨達まし氣に相貌凛々しき少年なるにぞ
與平殿も社とて御褒ちかく召寄給ひ「半介能ぞ參りたるな我孫々開及びしに其方は力量
ありて且劍道を能そよし未憑もしく思ふ程は尙此上にも勉勵して益々武藝出精あるべ
し然るは古人の言葉も百聞は一見に如すとせば我今日其方が武藝を試験みんと思ぞや
奈も近習と庭前に於て一勝負いたす可かと懇切に問せたまふを父準人承まはりて詳慎で答
ふるやう再應の御沙汰ながら半介こと若年と申し殊に粗暴の氣性あるゆゑ此事甚だ氣遣
しく且古今來君前に於て武藝の試合つかまつるもの多くは是より退恨を含み決闘等いた
す者その先例少なからず最ども右等は心得なき嗚呼の白痴が所爲なれども壯年血氣の輩徒
には往々ある習慣にいなれば始め御興わらせられても後御不興の起らんと恐れ多き次第
なるゆゑ何卒此義は御免ありて只彼が力量だけを御笑覽在せられたく偏に願ひ奉つるト云

第三回

ふ父が苦心の言上に與平殿點頭たまひ奈にも初的情より云思ふは最もなり、今日は豫定の
儀式にあらず只荷旦の座敷にて思ひ起せし事なれば其方が申すを容て武藝の試合は後日
の事とし然らば腕力を試べし者共用意いたせトあるよぞ迎習の面々心を得て懸き石重
き石、或ひは基盤抱銃など居側へ推並べしかば半介は長まりて君前を退ぞきつ、座したる
儘に件の器物を輕々と搔把わへず或ひは投げ或ひは受とめ果は四斗儀の端を掴みて片手に
突と持揚ながら身を捻ひて傍らの出入の柱へ二たび三たび腕力に任せて突當たるよ其響
き最凄まじく床は備へし置物花瓶も響き退出し倒る、實に未曾有の怪力に並居近習我
を忘れて是はとばかり驚き呆れ感歎の聲を斷ざるよぞ況て之を熟覽ありたる與平殿は手よ
持たまひし扇子を颯と推開かれて「ヤア半助天晴く最早腕力を止めいへ我最初より心中
に斯ばかりとは思はざりしが意外の大力感心せり卒近き進いへ近ふくト召たまふよぞ半
介の容儀を正して御前へ前み拜伏せしかば大膽殿打笑たまひて只管之を歎賞あり且今日の
賞美として何なりとも其方が所望の物を遣はすべし遠慮なくやせと有にぞ半介は拜承して
然らば仰る相從が御前か毎に帶たまふ其宗近の御佩刀を拜領仕まつり度いト懼りもなく
申し上るに元來件の名劍は當家相傳の重寶なるよぞ是はいかにと呆れたまひし大膽思はず
傍の華人と面を見合せ言句を詰られ暫時黙して居たまひしとぞ

時に與平公沈黙されて胸中に思ひたまふやう我半介が怪力を感賞の餘り口を二らし賞譽所
望に任せんと云たれども彼は尙子供の事ゆゑ有難に宗近を所望せんとは千萬思ひ掛ざりし

明治俠客傳

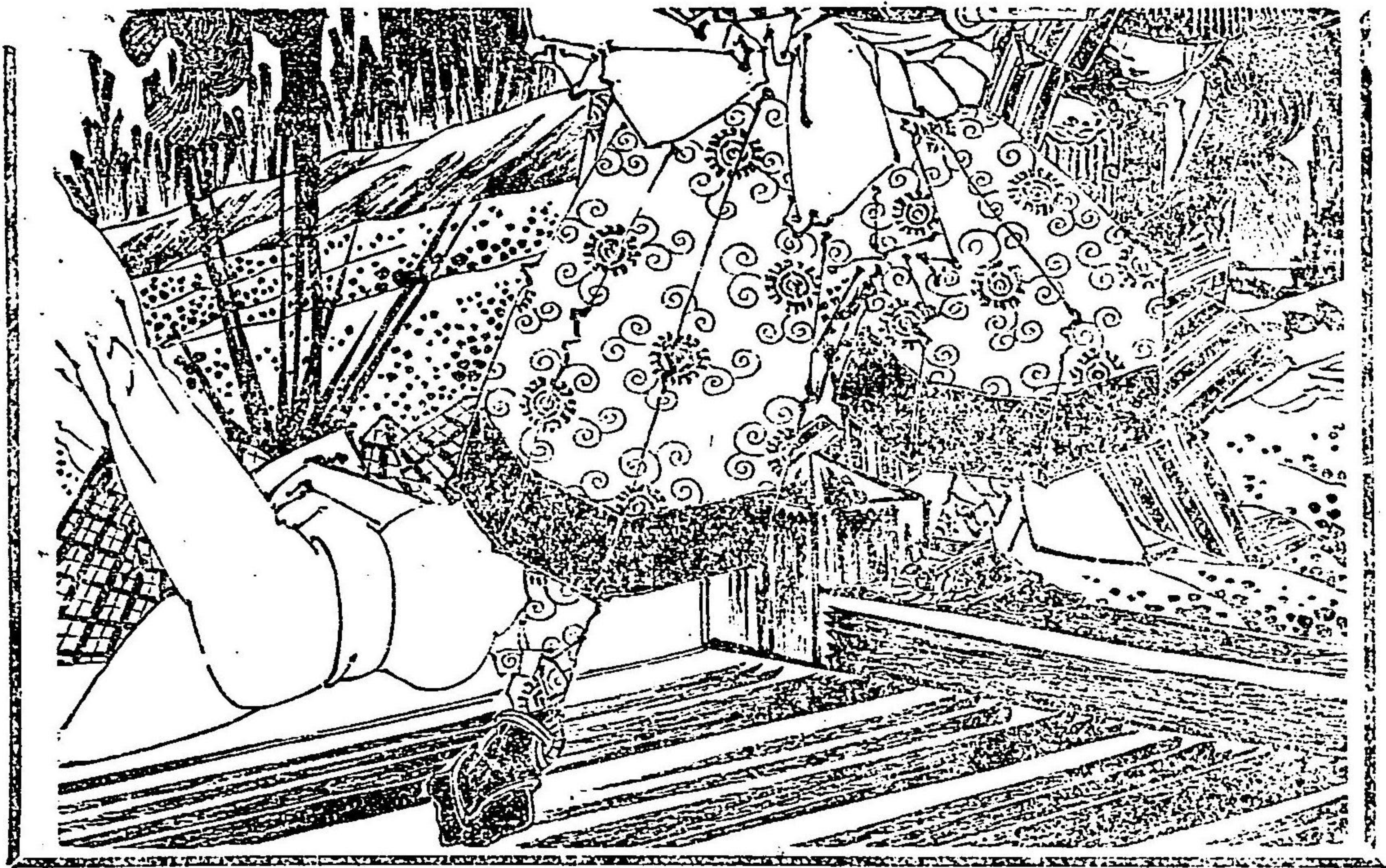
が意外の請願書送したり然りとて今と成り食言せんこと宜しからず實に宗近の一口が我手
に得たる物ならば之を與ふこと易けれど右は常家累代の重寶にして大切なる物なれば之を
手放すこと祖先へ對して相濟ざる次第なりハテ奈にせんも屈托あるを吉田集人推察して半
介を破たど疾視一汝若年の分際として僅かの腕力を誇り顔に勿体なくも御家の寶劍宗近を
請申す杯を言語同斷失敬至極、モモ大胆なる白痴かな卒速かにね暇申して退出いたせ
叱り退るを與平殿制したまひ「集人暫時扣居よ是は半介が惡きに非ず我只今彼に向つて
其儘力を感ずる餘り褒美は所望に任せんと言たり是此一言聊も及ばず今は何をか惜むべき
唯半介所望に任せて宗近を與す可し然れども此刀劍は其方も常々知りつらんが是ぞ常家の
重寶なれば我とて我私しよ手放さんこと祖先へ濟す就ては與へず與ふる程に餘は其方宜
ま致せ且集人よ、我尙別は用事あるゆゑ今夜は彼を宿直させて其方等は退ぞくべし大儀で
有し心得たるかど徐々云とてたまひ聽て與へぞ入せられける仔細あり氣な御言葉に集人
はハット畏れまされとも思ひ難つ、疑惑して再び我子を疾視まはし「奈なる御用か辨まへ難
れと今夜其方を止め置て宿直せしめよとの御沙汰なれば呉々も體憤し、粗忽なきやう相勤
めよ決して例の強情なる我慢の心を懐べからず熱々憤しみ肝要なるを熱心得よくト再た
び三度誠しめつ、聽て衆多の近習と共に心遣しつ打連て徐々退ぞき歸行けり、良ありて半
介は人なき廣間の中央へ大の字なりに踐反かへり「やれ、究屈至極で在た何は免もあれ
我君が彼宗近の一刀を與す與人と云れたは是盜どの謎々だ有難し添けなし平常親父の話よ
聞て欲ひくと思つて居たが今夜圖らず頂戴するとはハテ嬉しくやト我を忘れて夏虫の

明治俠客傳

獨りホク／＼悦び居たる折から日も暮暮はてつ聽て茶坊主の案内に隨がひ、宿直房へ入
たれども心よ斯と思ひ居けん睡りつ覺つ無も還らで今か／＼と俟あかすに思はずも時を過
して漏刻の音遙か聞ゆ夜に最五更と成たるよう半介急ぎ臥床を立出で御寮所へ密び入し
に常には君が枕邊に備へ置る、宗近を遙隔て、轉ばしありたり扱社律たんと換取し其下請
へ一封の金さへ懸ありたるよぞ有繫の半介感激して主の寮所を再非し金を納め太刀を横依
離足雄足殿中を密び出つ、堀を越ぬ屋敷の戸外へ出ると其ま、沙留橋まで走り來つホッ
一思つきなから後ろの方を見顧る折から黎明の天明渡りて東の方より白み初けり、僅
敗の元年三月はじめなりしと云ふ

重説吉田半介は彼宗近の劍を強取て忽地屋敷を出奔したるが途中中心中と思ふやう「我圖も
すも力量を顯はし就て主君の賦許に依り此名劍を得たれども所業盜賊に均しければ假令主
君は許そども御家法と親父とは決して許す可まらず然ればこそ主君にも此寶劍を強盜た
なら疾く逃ると云はぬ斗りよ金さへ添て下されたは是ぞ路用に爲るどの事か返す／＼も有
がたき御厚恩感激したり、嗚呼親父にも阿母も只一口の刀の爲に別れて行はば不孝よし
て申し譯なき事ながら我物情が生てより六十餘州を經廻りて武者修業を爲ものど晝夜意中
一懸て居たよと良佩刀も路用も無れば今日まで猶豫して居たが何れ一度は五六年別れる所
存ありしなれば今ぞ眞の時節到來是より諸國を巡歴するなり然れば此寶劍も劍道修業成就
して目出たく歸り來る日に奉還いたすと了簡なれば暫時拜借する迄なり斯れば不孝も不思議

第四回



も暫時の間と思ふもの、物堅き親父殿が我此心中を知らずして怨も爲ん怒も爲ん然れば一
通認ためて親父へ仔細を明して行へし卒々ト獨言しつ暫時四下を見廻す折から浴もよし我
屋敷へ常出入する酒屋の小僧の三吉と云ふが來りしかば半介得たりと呼止て其腰に爲し
矢達を借りし銀紙を引延して件んの所存を一五一十さらりと書罷ため之を我家へ届けしと云
よと折文よして渡しなから銀一握を與ふるに三吉は異儀なく受取り纏て準人へ届けしと云
ふ一半介は爰に至つて心安しと打悦び急がはし氣立去しが何處ぞと當もなければ先は
北越を打廻らんと下板橋を必當に年古郷を後よしつ勇み悦び若駒の足元から走り去け
り切半介が事は暫時措て、爰に飛騨國高山の城下に種油米穀物の諸色の相場を打を家
と爲つる外木山衛門と云ふ家商あり妻は疾く亡なりて娘只一個ありつ名をお七と
稱たるが容色頗る美はしく且性質やさしきに由衛門は天にも地にも負なき者と愛育み
て之を樂しみに暮しけるが期て或日の事なりしと由衛門親子は要用ありて加賀の藩原
て行たる途中飛騨街道唐澤より蟻寺へと渡る處ろに例の香渡しの難所あるが此邊の人は事
どもせずして由衛門と七とは纏て定例の賃錢を拂ひ先供人を前に渡して後に親子二ツの
香へ推並んで打乗つ、數十丈の谷の上を真中程まで來れる折から忽地兩岸騒がしく此邊
つての大悪黨飛騨の金太と云る奴が衆多の手下を引率へて突然と現はれ出で東西脅しく打
て廻りて先番番と由衛門が供人を追はらひつ金太長柄の斧を把て岸の岩角に立起り斧與願
に張懸して山衛門が打乗たる香繩目掛て切落さんと勢ひ猛く身掃へたりとぞ

元來奈なる仔細ありて彼愚漢飛騨の金太が外木山衛門へ抗敵しと云ふに抑も金太と云る
奴は心奸けし性質にて一年三百六十日推借強求博奔亂暴總て惡業を以て世を凌ぐ虎狼に齒
しき曲者なるよぞ近郷近在到處ろ人皆怖れて尊敬したるが獨り外木山衛門は少しも彼を
意と爲こなく是まで幾度強求に來たれと總一文も貸與へず手酷しく擯却し故金太これを
還恨し思ひて時もあらば彼を殺し熱腸冷を爲んものと眼狙ひ居たりし處ろ今日圍らすも由
衛門父子が香渡しに掛ると聞て天と悦び地に歡び同類衆多集め來り之を渡しの兩岸よ
伏おき我は長柄の斧を把て自から此隊の大將と成り今由衛門が香に乘りて谷の中程まで到り
しとき双方突然起り立て事の爰及びしなりとぞ、是此騒ぎの來歴なり當下外木山衛門は
後を喰と振かへりて打驚ろさつ、聲を扇まじこれく金太暫時まで全体何の遺恨が有て非
道な事を働らくと是マア待よ仔細を聞ふ若金づくで濟事なら己が家の身代を認らす與て遺
ほとよ命だけは免して呉る死して呉るト聲高く呼はる言葉も聞も果す金太から打笑ひ
「姿と見る態親父今殺される因縁は開すと汝に覺か有らん勿体なくも已様が是まで度々
御出馬あつて僅かの錢を強求てもツイ一文半片ら費ねへ斗か傲慢て生粹な小言を云した
其熱腸冷に今日の今汝を千尋の谷底へ切落して往生させ其か七女は勢一杯荒淫でから實積
りだ愚願ノ云歩に死ばれハ宜姿だト斧を立て腹を抱て打笑ふを由衛門開了り天を
仰ひで歎息「然じやア金太何しても己を殺す可簡か、エ、残念なお七女か可愛ばかりで
今の様に特と言葉を低くして一ト通り罷たもの、情のなの字も知らぬ奴、何せ死さふ苦は
ないコンお七、何事も約束づくじや己が死んだらお主さげ彼奴等が云に隨がつて兎も角も

生有らへよト云かけるを打消て七の落然涙を流し「否じや」目の前はお前が死ぬのを
見過して何として存へませうぞ彼金太奴が意地わるく私の脊を落さぬなら直飛込で死ぬ
ばかりかお前を殺すが私や術なひア、何ぞして助けたひモシ金太さん拜みませう腹が立なら
私しを殺して願を親父を助けて下さいモシ此通りト掌を合せ泣つ口説つ打託しを馬平な聞
ぬ虎狼の金太「遮莫汝も死ぬ氣なら親父と一緒にならぬ折から此時速く彼時速く後立岩際より
と云もあへず復振騰す斧の刃に脊細切んとする折から此時速く彼時速く後立岩際より
汝れと云さま飛出たる一個の壯士が此体みるより跳り跳つて振返りたる金太が左手
を、水も溜らす切落し復打んとする白刃の下を金太逃て、飛退機會に足を外しつ千尋の谷
底ふかく斗筋うつて奥逆さまに陥入しもパツと沖たる谷箱に押包まれてうたかたのあはや
と見る間に見へずなりけり

第六回
當下件んの壯士は飛彈の金太を切落したる血刀ひらりと振舞して驚ろき騒ぎ且怒り打て落
れる金太が手下を前後左右に斬倒し切拂ひつ、追まくるに手下もば當り難けん替つ振ひ
つ笹蟹の蜘蛛の糸を散らすが如く皆八方へ逃ゆく休を向ふの岸へ見渡し居たる手下共も怖れ
騒ぎて同じく先を争うひつ、是も忽地北亡しかば壯士は打笑ひて丹を拭ひ袖に納め手疾く
番繩の端を把り由衛門とれ七の脊を徐々よ手繰寄るが否や親子共下立て走り寄つ、壯士
の左右の手を抑り押戴だき暫時感涙も惹たりしが真あつて由衛門地上へ顔を抱きて「ヤレ
有難い添けない何方様か存じませぬが私も事は由衛門と申し當國高山へ任まするもの又悲

なるは一個娘名ヲ七と申し升もの又只今貴公様が此谷底へ切落したば飛彈の金太と稱れる
悪魔此事の起り申すは右金太奴が先頃より私の方へ推て参り錢を貸の金と度々
強求升たれど一度貸たら未々まで崇を遣と奴と存じ参る度びは跳つて断はつて遣ました
を彼奴が遺恨と思ひ升て斯いふ騒ぎに成ました若貴公様の助なくば親子一緒に此谷へ切
落されて彼奴等の爲に非業よ最期を遂まそ處ろ思へば「有かたいお情に寄交して二個が
命を助かり升たヤレ難有い」ト云ふ語を繼でお七も指寄只今親父が申す通り悪漢金太よ
二人とも殺されようぞ爲ませた處ろを貴公様の人情で不思議な命を助かり升た有難存じ
ます就交しては貴公様は何處のれ方か名前何と仰せられ升かお聞せ成されて下され升
ト思ひ入て尋ねるを壯士は熱々聞き名告も大層至極なれと拙者は豊洲中津の藩まで吉田半
介と云ものなり、拙者も此處を渡らんとて先刻通り参りし處ろ岸の岩に立たる下郎が其方
達と問答して此番細を切んと爲を嚴の蔭より見附し右の下郎が悪漢なるを疾く承知いたし
たゆゑ惡を斃し善を助る世に武士の本分を聊か盡せし迄の事にて深く謝するも及ばぬ事な
り、然らば告別申すぞよ復悪漢が來らぬうち疾く高山へ歸りいへ拙者も亦用心よ道を變て
参るべし卒々ト云捨て既足疾く行んと爲を親小遣て、取細り成程うれは然でもらふ然し
私し親子の爲は命の親の貴公様切て今宵のれ宿を致し尙徐々ど御禮を申上ねば心が済ぬ
先暫時ト引袖を此方は拂つて打笑ひ「武者修業が道中にて人の難儀を相助け其者の宅へ連
られ此か七とやら云る如き處女など、通じ合ひ浮名を流す白痴者い草双紙杯よ能ある奴に
て拙者は斯る瓜田の内へ靴を容べき者ならず惡止されては迷惑なり縁も有らば復あはふ然

ハト云もあへず右左より推止る親子の手先を振舞ひ推戻しつ、西街道の音に聞かぬ長
坂千本杉の並木を指て飛が如くに走り去を親子は今更追かねて感激すること大方ならず其
よ大地へ平伏しつ去ゆく人の後影を見へず成まで伏拜み伏拜みつ、見送りたりとぞ

第七回

朔間三吉田半介は彼日屋敷を出奔して北越を志さし下板橋より踏出せしが元より急がぬ旅
なれば夜も宿り日歩行て初め松平右京殿の城下上州高崎に於て一ト修業し其より木曾の
街道を辿り、板倉伊豫殿が安中城内藤野後殿が岩村田、上田小諸松本など行つ戻りつ城
下へ宿を投り藩士と試合或いは勝負は負して又飛騨の高山へ到り夫より能州加州を
指て打廻る途中国らずも、前回も説たる由衛門親子を蟹寺の参渡しにて救ひ取たるものな
り云ふ、是は話しの筋條にて強がら記を可き程の廉は有らぬ、凡ろ小説を綴るもの
其人物の言葉に托し或いは形形の助に依りて其筋條を省くものは是粗漏の書方にして今の
人多く之に依れど右は説處ろ不足なるゆゑ多小看官の想像を費さしめねば、話しの段取わ
からずして頗る不深切の書方なる故假令うるさしと云ふ人あるとも可候は之に隨がはず
簡短に其筋條を記せり尙此末の書方も重復に似たる處ろあれど右の主意なり了解ありたし
去る程半介は日を積み月を重ねつ、北越を廻り盡して是より西へ志し京大坂より中國
筋を長州下の關まで到り尙九州の内裡へ渡り本國中津を遙か立寄らずして小倉へ
出で筑前筑後を打廻り薩摩を指て進み行し是は此鹿兒島ころ音も聞えし強國なれば半介
武藝を鍛鍊するに屈強の土地なりと思ひ彼地へ進み行るものにて又た本國豊前の中津へ立

寄らすして過たるは是宗近の一條に依り遠慮したるもの成べし斯りし程に半介は日を経て
鹿兒島へ到着せしにぞ同藩勇士の聞へ高き彼有村治左衛門が門を叩き、姓名を名告來意を
告て教導を頼じかば治左衛門感心して之を我家へ滞留させ先長途の勞を休ませ同藩刺客の
甲乙へ傳てて日毎に半介を道場へ伴なひ半年ばかり勉強させるに元より臨む處ろなれば半
介は愛を詮度と思ふ限り勉勵せしかば劍道大ひに上達して天晴達人と成しと云ふ斯て一日
のこと治左衛門は半介を呼寄て明日は常藩の大御客大石伊佐美と試合せんが彼は非凡の剛
力にて太やかなる竹刀の中へ鐵の丸棒を仕込れくゆる術ある者も其竹刀を打挫がれ後を取
こは是迄も屢々あり因て足下も心して立合ハへの指示を開き半介は心を得て其日市中を
奔走しつ直徑一尺餘りもある大鎧を製し來り之を竹刀へ箆て引摺ぎ道場へ出たししかば見
るもの何も驚ろき呆れ這は何故と打見やるに況て相手の大石伊佐美は且呆れ且腹立ち、斯
る白痴た竹刀立て立合んとは卑怯なり今日は某がし断はるトて其儘退ぞき出んと爲しにぞ
半助逃て、引止め卑怯とい足下が事なり先々暫らく待たまへ云ふ事ありト立塞がりて只管
これ止めたるにぞ伊佐美も我を卑怯と云ふ共一言の仔細を聞んと雖も元の座へ復り入た
り、扱是より兩勇士が口論試合の勝負等は尙引續て次回に説べし且申す有村は安政の初め
江戸に居て此頃鹿兒島に居ざりしと云者あれども是も参渡しの話と共暫らく聞得たる儘話
し候

心たけく力つよく敢爲勇進の氣性に富むも生來淡泊剛直なると薩摩武士の常なるが故に大

第八回

石伊佐美も半介が卑怯なりと呼はつたる其一言を聞容めてツカノと語り入に半介は打
笑ひ「拙者只今御邊へ對して卑怯此二字を蒙むらしたは是御邊が遣ふ處ろの竹刀の中よは
鐵棒ありて其鐵棒の重量を憑に人に勝を得たまふよし聞及びては右等は器械の作用を借
て暴を遂るの外なす是拙者が御邊を指て卑怯なりと申せし譯なり若御邊今日より其器械
を打捨られ眞の竹刀木劍にて眞の試合を爲たまふならば拙者感服して立合申さん若又右
の器械も依らずは試合無用とあるならば拙者も亦此大鑄の竹刀を以て之を防ぎ一勝負致
すべし然し乍ら是此双方器械の打合のみにて眞の武術を試にあらねば物不足し面白か
らす奈に何れを取たまふを御所存聞ふと聞かせる色なく思ひ込で演るを聞き、伊佐美大いに
打笑ひ「成程これ云れたり「此竹刀卑怯で有つた然らば是なる木劍二口把て場の中央へ又合
べし幸仕度召れよと云つ、後の羽目に懸ねたる、赤檜の木劍二口把て場の中央へ又合
せしかば半介も對手の心の餘蘊なるに感心して然らばト手襪を絞どり衆多の武士の連なり
し見座の方へ目禮して纏て木劍の柄より手を掛け片手に之を把揚ながら双方齊しく熟視合つ
、徐々ど立起りて問を量り足場を揃り伊佐美は上段此方下段と各々得意の身構しつ呼
を測れる初太刀の進退、互に隙を得ざり去が暫時は猶豫したるが氣敏き伊佐美堪じ呼
大喝一聲木劍を頭の上まで廻しながら勢ひ猛く打て來れる、敵の太刀ころ小手なれと思へ
ば半介心得て太刀を右手の表的に開き打外させつ眞額臨みて車がへしに打返を伊佐美流
れの太刀を揚て飛退去さす打拂ひしが是より双方寄ては返し、返しては復ち奇つ必死の
勢ひ龍虎の奮闘、太刀音掛聲すさまじく或は進み或は退き閉つ開きつ打合餘り果は亂刀の

第九回

刻刀と成りて見目危うく闘ひたるが互ひに素面素小手なるゆゑ若一度受損せば筋骨碎くる
恐れおれども兩勇士は事ども爲すして、劣らず優らず跋扈飛退彌々益々激闘して遂に太刀
を捨て無手と組しに半介素より怪力あり伊佐美も力量尋常なりねは此組打も亦凄まじく時
移るまで揉合たりしが何果べしとも見へずして勢ひ決死の体あるよ今今は既是までなりと
有村始め見座の面々皆走來りて之を引分け頼て左右へ推据つ、物別れに別れさせて水を興
へて駒りしかば互々氣力相復して進み近き手を把合、失禮したりと挨拶せしとぞ、然れば
最前より見物したる衆多の観客こゝに至つて口を極め手を拍し只管双方の武術を譽立感歎
の聲を立たりしが有村は二人を始め居合劍士を引纏めて之を我家へ伴なひ來りつ家を屠し
酒を爛ため一大盛宴を打開きて十分よ饗應かば各々暫時益々を飛せ尙試合の事を彼の是の
日と相語り相興じて談笑夜半の頃に至り皆歡びを相盡して宿所へ立歸りしかば辛やく當
日の事は果しと

軍人の薩摩武士にて當時刺客の聞へ高き大石伊佐美と立合て遂に互角の勝負を得たる彼吉
田半介は始め東都を出奔してより今日に至るまで既に一年餘り及びしかば當年(安政
三年を云)は端かけ十七と成りぬ因て有村が頼るに隨が以前髪を剃り元服したるが此頃大
下騒々しく勤王の黨佐幕の輩徒四方八方に蜂起して全國殺氣に推國まが六十餘州の大小名
にも或ひは幕府を佐るあり或ひは帝室を補佐するありて上下の人心騒々かならず右兩黨相
闘して到る處の安堵の念なく諸侯國勝手と相權し僅かの家臣を江戸へ還しつ餘は主従本國

一、脚り執刀制敵の準備するなど危や大亂の萌微現はれしかば半介つらく思案するに我約年より武術を好み武者修業を思ひ過し今日斯て在ると云ふも是乃ち斯る時社若父を佐補て身命を投擲、千軍万馬の間立て勇を奮ひ偉功を立て以て君父の面を起し名を顯さんと思ふに在のみ因て一旦東都へ歸り此寶劍を主君へ還して志を申立て偏に忠節を顯し臣下の本分を盡さんこと正し此時なるべきに然らば其の備軍を爲んとて忽地決心したりしかば先有村へも所存を打ち歸京したしと相談を聞き、有村切りに感激しつ之を一室へ招きいれて何事やらん其暫時不易の大事を密告以て後來の事を頼む様子に半介は喜悅に堪はず、我未だ若年なるに有村が斯ばかり世に大切なる企望を語りて時の應援を頼みしこと面を約せしかば有村も悦びて其翌日朝はやく一席の酒宴を開き先の連中を相集めて送別の盃を擲るより半介は其誠の懇切なるを歎ひ謝して暫時謔言を戯れし處で旅仕度を整へつ、一八〇〇に別れを告げて安政四年四月某の日東方を指て立出たりと此時有村が吉田へ語り密談の一條は是後年櫻田見附に大老刺殺の一件なりしが慙て吉田が依頼を受たる其事の趣きは尚後々の回に至つて説明す處ろあるべし然れば吉田半介が如き井伊侯が爲の庶無難なるのみ扱此處無難これより以向、時に奈なる手段を施し時に奈なる工風を施らし以て大老を刺んと爲たるか其邊の話柄は次號より説るめ以て西洋東洋とも虚無黨を稱する者が隠現不思議の舉動を爲すこと同一なりしを説明すべし」去程に吉田半介は只管途を急ぎつゝ七八日にして九州を離れ便船に乗り大坂へ歸り進んで簡京都より東海道へ差掛し

が途お圖らず我屋敷の急飛脚に出遇しかば君父の安否を訪ねし處る父人は去年の暮より大病お罹りて昨今危うく主家も今度の大亂に據り混雜一方おらずと云ふも半介大いに仰天して先は飛脚を謝し別れつ、ヨシ然れば此時より百里に餘れど此街道を晝夜兼行飛行きて父の臨終に再會し前君家の大事お預かり忠孝を全ふすべしハハ何したら一足飛に江戸へ歸れることもがト四方を見廻す後の方より雲助が馬を曳つ、悠々として來たりしかば天の賜物これ届強實に我爲の赤菟馬ありとて遺過さま雲助を三問ばかり蹴飛ばしながら馬の閃りと打乗つゝ手疾取出す小粒銀を一兩三り投棄置つ路傍の篠竹手折て鞭お代拍を入れ勢ひ込で射矢の如く又疾風の渡れる如く宙を飛せつ一散東の方へと走り去けり

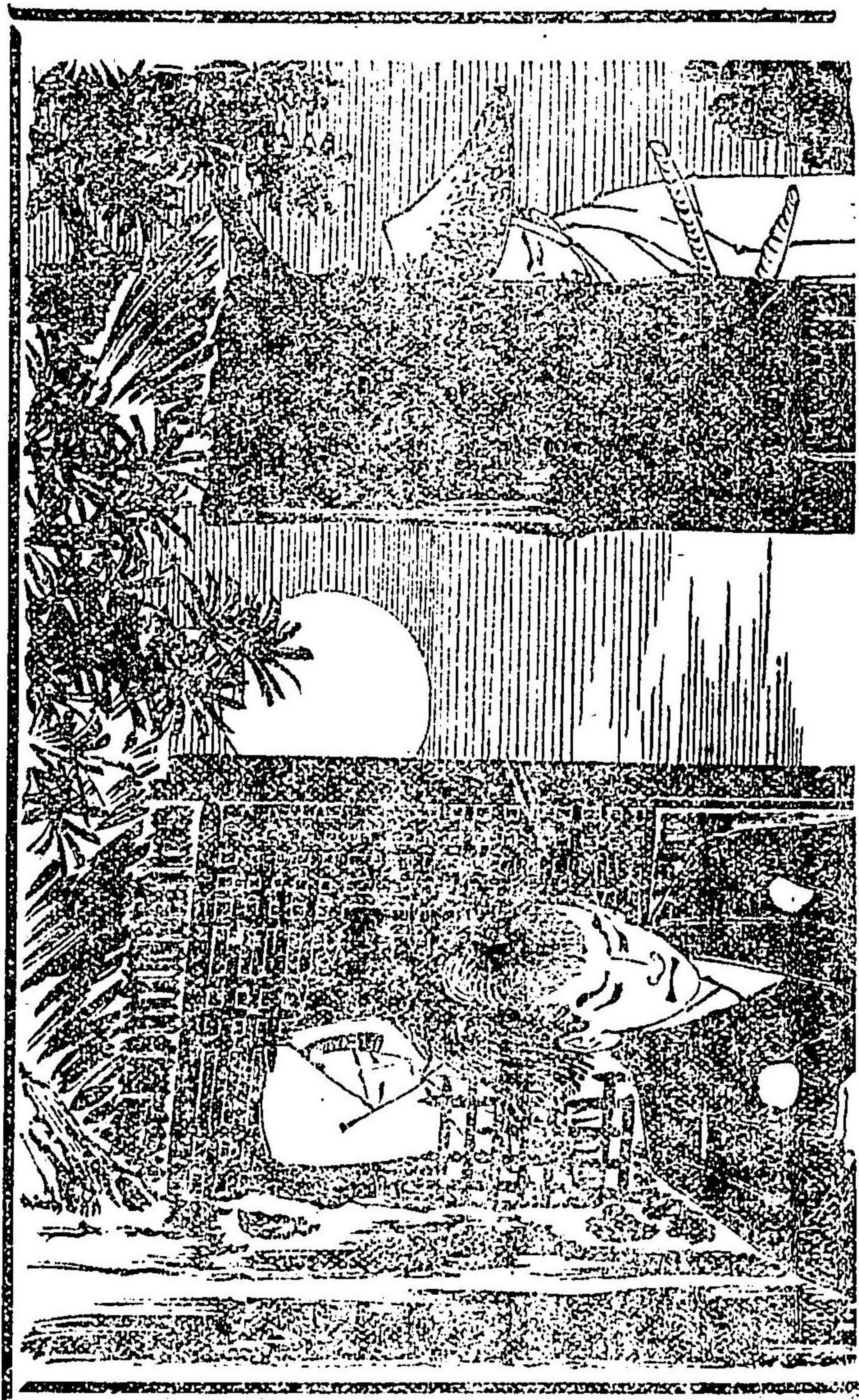
第十回

馬は赤菟馬の逸物おあらねと途に五關の難なければ半介容易く相進んで小荷駄から尻の嫌いなく馬を代へ鞭を揚げ晝夜疾風の如く飛せしかば百里に餘る東海道を只四日おして江戸へ着たり因て朋友向某へ宛て先取おへず手紙を遣て君父の様子を尋ねたるお悲しひかな父隼人は今より凡そ十日以前お疾病お因て亡なりつ母は又薄命を歎き我を尋ねんどの心なりし歎或夜屋敷を出奔して其行方更に分らぬ又主君おも御家法おるゆゑ半介が歸りたりとて歸參叶ふ可らずと先頃達したまひしに依り迎も屋敷へ入たまふこと宜しからんと存するなり尙委細は拜辭せんと返答にて有しかば有弊の半介爰に至つて殊のほか落膽し、太息ついで海ふたれせと斯て在るべきに非ざれば三川魚籃下の菩提院へ到り住寺の僧向某へ對面して亡父の爲おと布施を納め聽て墓所へ參詣するに世を去て問もなければ斯る亂世の折され

ば母が心を引ひしものか既新しき石塔ありて戒名俗名あきらかに父の墳墓の築きあるにぞ
半介は忍び難て潸然と涙を流し懸て充分の香花を手向ふに墓前へ打向ひつ、折三年前手
紙を以て云々として上たる如く半介武者修行を望める餘り遂に尊靈が許しも待て屋敷を出て
諸國を廻り彼鹿兒島へ立越て簡練の修業を積しが昨今時勢に感ずる有て歸東いたさん
と思ひ起し東海道を参りし處ろ丁度屋敷の飛脚に出會ひ君父の容子を承たまはり歸心絶
地矢の如く云々として途を急ぎ立歸りいと悲しや尊靈地下に歸られ母上にも亦た御行
方分らず且屋敷へは入られず今更ほとんと進退よしなく慚愧後悔極まり無れど願はくは尊
靈觀察あつて此意を悟らせたまひなば拙者が不埒を宥免あり御怒を和せられて菩提を得ら
れいへよ極樂往生あらせ給へと生たる人に物いふ如く右の意志を探返し探返しつ、幾度か
懇切に所存を演て再び涙に惹たりしか哀あつて氣を取直し嗚呼我ながら愚痴であつた今
更ら女子の腐つた如く述懐三昧なんに成べき夫大忠と大孝とは父がなす君がなすに
はれざる道理あらんや却々に今と成ては身も軽くして進退易し只案じられるは母なれど
とて何か尋ね出さん扱く長途の乗切で疲れたりと御言しつ懸て父の墓を枕と代て草
の上には足踏伸しつ大の字なりに悠々として天うち仰ぎ野の聲の高らかに最心地よく睡し
暫時前後も辨まへなく死せるが如く打伏たるが是より先、目を泣脱せし一人の娘の年は十
九か廿才と見ゆる品よき女子が下女を連て是も同じく墓参しつ新佛の壘士一水を注ぎ花を
手向て何事やらん泣つ口説つ時移るまで回向したるが下女は宜去く諫め慰さるややく之を
引立つ、今歸らんと爲る爪先と半介が立掛置たる塚の跡の踏を踏つけてカウくど倒す程

半介は此物音を聞き均しく勃然と起て二人の女子を疾視しが怒り哮ると思ひのほか再び
石を枕と爲て復た安閑と愉快氣に萬事不覺と熟睡して生牀なくぞ見へたりしと
第十一回
世に過誤とは云ながら武士の刀劔を土足と掛たる娘は更なり下女までがハツと驚ろき且婦
れて惣身に汗を流しサモ面目なく詫んと爲たるに半介の之を意とせず再び熟睡したる儘
にて容易と進もわがらざるよぞ下女は娘の袖を引「モンお民さん此間に早くおれなさい升
よ切れるト不宜せんよモンおれ早くト氣を揉ども娘は騒す歎息し「百々何して其縁な失禮な
事が出来ものかね今にも此方のれ目が痛たら篤りとお謝を申して参らねば濟ぬ譯だよお前
も其氣で俟が宜ト云ひ放しつ、佇立て徐かに半介が居るを俟に今半介は醒ると見せて實は
客子を窺がひ居けん今此二人が云ふ處ろを聞留して娘の心中の尋常な多めに感心し懸て後
々起の民と云ふ者ですが情ない仔細が有て親父徳兵衛と申を者が人手と掛て切殺され今日
其初七日故此お寺まで参まして只今歸らんと存じ乍ら墓路を通りかけて有ふ事か不有こと
かッ貴公様のお刀を爪先に掛ましたか全く以て粗忽の事ゆゑ願を御免くださひ升れられ
入ましてムい升ト土手と突き町噺に詫る言葉を下女も執なし私しは又奉公人のお大とサ
す者ですが實は兄今お民さんかお直し申し上た通り全く粗忽で致した事ゆゑ願を御勘辨く
ださぬまし相濟ませんと手を拜て切りに詫る二人が言葉半介は聞流し過誤とあらば苦し
からず然し後來氣を注られよ、時に尋ねるも異事だが其徳兵衛殿とやらは奈なる筋で死な

明 治 俠 客 傳



第十 二 回

れたか一ツの寺で同日に落ち合すも不思議な縁なり障りが無ければ開せられよと問ねられて二
 人とも既廻り來て拭ひ(兩人)サア其事とすしすは話いたすも何とやらお恥かしふ
 は存じ升が折角のれ問ねゆる申し上ませふト云かけて復推拭涙の間に主従聲を感らせつ演
 る處を聞取右は本所馬場町に住たる土問屋徳兵衛と云ふ者ありて頗る俠氣つよき者ゆ
 る當時市中を徘徊したる彼偽佐幕の悪浪士等が金ある家に推入て幕府補佐の軍用金と稱へ
 夥多の金を強り取若抗敵る者ある時は之を殺せと戯れの如く乱暴狼藉に及びけるを見つ
 開つ、深く疾みて右等の暴徒が町内へ入るときは常に衆多の子分を引連れ其家より走り向いて
 之を打拂ひ人を救ふを愉快の事に思ひ居たるが暴徒の中に中國浪士の團市平と云ふものあり
 て徳兵衛が所業を聞き疾み憤ると一方ならず或夜手下の悪者と共し徳兵衛が宿所へ亂入
 して遂に之を切殺し日來の遺恨を晴せしと云ふ然れば民は父を撃れて悔しと云ん方なけ
 れと女子の甲斐なき仇敵も撃得ず母の先年身罷れば自ら萬事を取捨し其亡骸を此寺へ葬
 ひり年來實に奉公しつる下女のお大を供に連て今日は徳兵衛の初七日なるゆゑ涙ながら墓
 參しつ過つて半介が刀の鞘を蹴つけたるより事の爰に及びしと云ふ一伍一什を物置りて主
 従二人目を推拭ひ頻り嗟歎したりしとぞ

土屋の民主従が其過ちを匿さずして明々地に云立たると又その父徳兵衛が非業な最後の
 一伍一什を黙然として開居たりし半介は心の中に歎息すること大方ならず雖て二人を見か
 へりつゝお民とやらが素直なる其過失を取繕うはす明々地に詫られたり感心の至りなり又

徳兵衛が非業の最後は氣の毒至極に思ふなり然りとて今更詮方なし、古今亂世の常として斯い人時は悪黨どもが兎角諸方を徘徊し悪事を働らく事あるゆゑ、折角用心ありたき事なりサ、懸念なく歸りしへ拙者も退散いたすべしト云捨て塵うち拂ひ刀を帯き行んと爲つるをわ民は遠て引止め「アモ御深切な其お言葉あり難く存じます失禮ながら貴公様は何れにお住ひ爲ひ升か又お名前は何と云しやる承たまはりたう存じ升ト問れて半介思はず打るみ「ナニさ拙者も浪人者で一所不住の無宿上然し乍其方が親父の徳兵衛を殺したる彼悪浪士の党ではないぞよ但し姓名は仔細あつて只今名告かぬるなり縁あらば復遇べし暇申すト云もあへず袖を拂ひて足ばやに、慕道傳ひの寺門を走いで右か左か山雲の行方も知らず走り去けり「理り惜さに見送りたるわ民は切りに歎息し「嗚れ大や今の何方の何者で有たらふか名前を云しやら無から更ばり當途が着ないが實に溫和お方じやないかト云れて此方も呻吟し眞に然でふい升ね奈お名を云しやら無か男妾なら氣立なら揃ひも揃つたお武家様だト云どお民は心づきけん今半介が回向したる、作人の振目も注て前後左右を見廻しなから石塔の後部刻たる文字を讀で肩を認め「安政三年四月建立吉田半介父半介之墓なり吉田半介とは何だか覺の有る名前、オ、夫を然だつた私しやア大變したよ（大）オ、大變とは何しました（民）何し升た處ろかね、彼そら飛脚の伯父さんから日外のこと一五一十を委しく手紙で知らせて来た、ソレ番渡しの厄難を救い取て下すつた其時の武者修業は御平様の御蔭中で吉田半介と云しやるお方は辛やく十五六モシ右の半介様が江戸お屋敷へお歸り有たられ請ねししてお前から熱れ禮をど阿父さんへ願んで参つた事が有た

第十三回

は、因て阿父さんは汐留のね屋敷へ（與平家を云ふ）参上して吉田様へ上つた處ろ半介とどは不埒が有て當家を堪當した若故此方は知らぬと、心強く跳着られて阿父さんが悄然歸つた事が有たが思へば、今のわ民の年恰合器動から此お墓へお参り成された彼是の御容子と云ひ其吉田半介様に相違ない、オ、オ、オ、夫と知つたなら此を、お別れしや勿つた實に悔しひ事を爲したの思ひ掛なき言葉を開てお大も吃驚是摺し（大）夫はオ、大變動不圖もない事し、たね然し貴娘に住寺様へ向よく聞なさい升な若萬一間違つては（民）オ、悠長な今と成て然な事より尙其邊にお居なさい分らぬゆゑサア退屈やうお前も急ぎな（大）成ほど然でふい升ね然なら早くサア、ト水の手桶も蹴返すばかり周章狼狽主従が覺策なけれと半介の跡を慕ひて一散に寺門を出つ心當の芝濱の方へと走り行し、最不思議なる奇遇なりけり

法程に民は半介の跡を慕ひつ、寺を出て途を急ぎ彼方此方と見廻せども是かと思ふ人にも逢て行とも知らず來とも覺せず既芝口まで來りしかば、今はしも詮方なし一旦家へ立歸りて復るれ是の手筈を定め尋ねて見んどのわ民が言葉にわ民も途方不明たる餘り遂に其まゝ引れ、心遣して本所の宿所を指て歸り行しが殘急に翌日より神に祈り佛に頼み或ひは卜占神籤などを心の限り手を盡して只管彼が所在を探せと毛筋ばかりの便も得ず果はお大が打笑ひてモ、戀の字では有ませぬかと嘲られるまで立騒ぎしが其甲斐もなく今日と暮れ昨日と過つ斯ばかり尋ねる人には遇もせで俟ぬ日敷い何か通ぎ當年も早く亡人の魂

祭する七月の既中旬よぞ成しと云ふ、嗚呼人間の奇遇ほど世に測れぬ物はなし、尋ねるよ
心民が父の徳兵衛と云る者は是ぞ吉田半介が彼飛弾の奮波にて其厄難を救ひたる外木山衛
門が弟なるよし此男壯年の頃獨り東都へ出来り種々の艱難辛苦を経て今の土間屋と成す
年來手紙遣取して由衛門は七のこの徳兵衛は民の事々と互ひに知らせ合なぞじつ疎
選なく暮し居たるが斯て或時由衛門より右番波の一條を委細書翰に書認ためて遙々知らせ
越たるにぞ徳兵衛親子感歎して汐留の中津屋敷へ右の謝禮に行なとしつ常に半介を慕ひ居
たりと然れば前回に演たる如くお民が惚て半介の來歴を知り居たりしも斯の如きの手續き
なりしと扱話柄二條に分れて、爰に又、吉田半介が母と云ふは名を阿國と稱る、者にて今
年（安政三年）は四十を過たれども生來ての美女なるよぞ他見は未だ三十四五か七八には
過じと見るが家の難と先頃より夫は死なれ子と別れて心氣鬱亂したりけん或日屋敷を出奔
し風姿服飾も取寄せしまゝ、盡ける班女が狂亂も斯ありしかと思ふばかり裾を曳き跳の儘に
て東西南北都鄙遠近どくろひ廻りつ走巡つ半介は何も居る我子を何も置したぞ是半介や
くト或ひは泣或ひは口説又打笑ひ腹立て諸所方々と徘徊つ、今日は早稻田の里ちかき
見橋の邊まで浮羅理くと來掛をりから夏の夕の空くせとて忽地一天かき曇り襟を束ねて
投るが如き大雨烈しく降來りて雷鳴霹靂まじく而を向へき由もなきにぞ有聲狂氣のお國
さへ思厭ことに思ひけん彼方此方と見廻せども雨宿りもる儘もなきゆゑ橋の袂を岐と見て
河岸より橋間へ下立つ、岸より行立や、暫らく雨の時間を俟顔に水を眺めてニヤ／＼と獨打
笑む後の方に爰を我家と定め居る一人の乞食これを見て何か心に點頭ながらお國を楚かと

搔抱き「コウ御新造か興様か何ちに爲ても美人だ氣狂雨で困だらふ而が直きに暗です
から少しの間だお俟なせへ俺ちやア早稻田の吉と云ふ乞食ではムへやすが外見に依らねへ
眞實男サオモッ晴るまで退屈だらふ樂しむ爲から斯しなせへト云も丁らす弱腰を抱屈むれ
ど狂氣の悲しき人事を知らねば強がちに挑み争さふ氣色はなきお國は呆れ顔色にて男の
顔を打目成り何よも不云ッラ／＼と打笑ひつ、從居たるは最無殘にも最危うく淺ましげよ
ぞ見へたりける

第十四回

重説半介が世に國は家の艱難に狂人となり何事も辨別なれば彼の乞食早稻田の吉が挑む
隨意く身を任せて絶て争さふ氣色なきにぞ吉も最初は此女を狂人なりとは知らざりしか
怪しき迄に素首なる其舉動よ心づきて熟々みるに淺ましや氣狂よて有しかば彌々慨こび
益々抱しめ慾火盛んよ挑み掛りて無殘の所業に及ばんと爲たり、然るに此時雷雨はげしく
且通行の人さへ無ゆる誰か此体を知者有べき又古今の小説めきたる斯る時とて不思議にも
落雷に因て悪と覺し善を助くる杯と云ふ詭らへがましき異變も無よぞ憫れむ可し狂人お國
今此吉が強姦に因て身を汚されんと爲たりも處ろ豈思はんや勃然と起たるお國の怒地形相
變りて吉が利腕把より疾く傍と投退つ、匿し持たる懷中の短刀しちりと抜放して身掃
しなから礮たど疾視「汝れ乞食の分際として能まア人を手込にし不埒な事を爲掛居つたな
俺は心中に所存あるゆゑ此日來形貌を察して偽氣遣と成て居たよ然どは知らず下郎奴が殘
忍至極な今の舉動用捨は成ぬ覺悟しや其處動くなト呼はつて短刀逆手よ突か、れる思ひ掛

明治 俠客 傳

なを爲すに此方は吃驚仰天したれを元より不敵な曲者なれば飛退なから冷笑ひ「とつこ
ひ危ねへ徐々に爲なせへ已も初手から氣違ちやア興が薄いと居たがハア氣違は偽物
で眞人間との其聲詞其奴は尙さら有がてへ、コウ女刀物ぐれへに怖れる様な早稲田の吉
やア無んだよ、ツイ鳥尾と云ふ通り自由な成りやヤ格別だが抗敵するど踏倒し手返も爲も
存分交て退ねへで置ものか(國)アモア小癪な其雜言ならば手返に爲て見せや(吉)
爲ねへで汝れ何するかレ斯してト云もあへず傍に在たる焚さしの手頃な粗朶を把より疾
く復突か、るお國の白刀を打拂ひさま打て焚れど此方は武士の妻なり母なり、些しも騒が
ず受ながし切拂ひつ、其時格闘ながら双方が思はず橋間を跳り出で追つ透れつ仕す
去らず天地を因めく火花と電光敵の疲れを窺ひたるお國は手元へ尾入りて刻みに打こむ
亂刀はげしく打れながらに切込て透つる敵の前後より面部手足の思ひなく切つけ勢さく太
刀風は吉は惣身血液の紅色、既苦しさに陰限よろめき逃んと爲つ、尻餅ついて敵がれし
を振絞り(吉)エ、苦まひ残念しひヤアひ誰か来てくれねへか人殺し、助けて呉る助
けてト狂ひ呼はり悲鳴を揚れし尙降しるる雨の音と霹靂く雷の轟く聲に打消れたる絶体絶
命すでよ危く見へたる折から下町へ稼行たる、仲間の乞食兩三人が歸り来りて此体みる
より譯は知らねど驚き騒ぎ「それ大勢だ吉を殺すな助ける焚れト呼はりつ、竹杖木の枝手
當り次第振舞ひさま三方より一人のお國を推取圍みて打て焚れる勢ひに格闘疲れし折なる
にぞれ國も今は防禦かねけん愁じ彼等が手も死より生昏せんと思ひ決め暫時隙を求めん
ものをも且格闘且走りて護國寺の方へ逃来りしが身心すでに疲れ果てつ石に厥づき敵を倒

明治 俠客 傳

れ刃を捨て氣絶せしま、前後生体なきばかり死活も知ず打伏たりとぞ
第 十五 回
衆寡敵せず格闘疲れし吉田の國は暮然に音羽の方へと逃來れど護國寺の邊まで身既に縮
の如く陰限く、と逆歩機會は忽地小石へ厥づきて伏倒れつ、氣絶しけん其儘立ち起らざり
しが懸る處ろへ最前の乞食もが追來りて「それ女が倒れたを吉の仇敵を逃すな殺せト呼
はり、進み寄て竹杖を振舞ひ既に打んど爲どころへ雨の小止を幸はひに番場土徳一と郎
したる傘を掲げ足を疾めて此方を臨み走來りし十八九、なる一人の男が此爲体くを屹と見
て敏く心に懸頭けん掲げ傘を閉りもあへず汝乞食奴がト罵言て其身を盾に立懸がり持た
る傘の骨さへ柄さへ砕くるばかりに打倒し打倒して建立しかば、敵手は乞食昨日も今日も
求食かねたる飢腹ゆゑ今此一人の剛敵に打立られて倒らざるを得ず「不敵逃ろト引外し皆敵々
に伍を亂して元來の方へと走り去けり、時又護國寺の鐘まぢかく響きて王莽が時となり渡
り七月中旬の月代は連ね立たる瓦屋の唐草を出で敵々たるまぞ壯俊は逃る乞食を程よき處
ろに追捨て歸り來りつ倒れしお國を抱起して月影に其面を打見やり打眺めつ、哀じばらく
切りに物を思ひ居たるが幸やく思ひ當りけん是はとばかり仰天して俄然、事の起りし如く
「やアモシ吉田の御新造様コソ興味お氣を儘かよエ、まア是は何した物かモシ興味御新造
様騎吉でムい升モシ御新造様、ト大音あげて呼活ながら種々勸はる介抱にお國は幸やく
息吹して見れば見知らぬ一人の男が我を抱きの手を尽し介抱しつる爲体に驚ろいて身を
仰越し「是は何方か存じませんが大層な世話に成た容子尙お年若と見へ升に御深切なれ志

明治俠客傳

念あり難く存じまするト云を打消し頭を掻き、何方様の二つたのど勿体ねへお言葉ですモ
シ奥様お忘れですか俵ちやア以前番場河岸の彼の土問屋徳兵衛方へ年期野郎も成て居た駒
吉と云ふ小僧子で當時は羽根田に住で居ますか今思へば去年の多ごろ祝方(徳兵衛を云)の
阿兄とか飛弾國の由兵衛さんがお前様の息子(半介を云)さんに助けられた事が有て親方
が其れ禮に俺ちを供に連まして彼沙留のお屋敷の貴公様のお宅様へ参上り升た事が有たが、
其時貴公が可愛奴だと俺へ菓子だの鼻紙だのお下な被た事が有たを有がてへ奥様だと思つ
た故か今日日までお顔を覚えて居ました驛サ扱大概は如斯ことだが當腐るはと話しも有り
又右の徳兵衛が一人娘のお民と云ふのが當時は親父の跡を繼り番場河岸に居ますから一
な爲て休息なせへれ屋敷へお連申すも俺の家へ行ますにも二里や三里は有ますから一番近
へ番場河岸へお連申すと致しませふ大分お怪我も有る様子れ顔の色も大變悪ひサア、
立なせへまじしと最甲斐しく慰むる人の情と思ひしは奇遇なれ國は只管感心して且又思
ふ仔細も有けん深く厚意を悦び謝して其云ふ處ろも隨かひしかば駒吉も悦こんで辻道を履
來り之より打乗せ足を増し夜更ぬ間もど悪夫を急がせ、本所の番場を指て走らせ行たり

第十六回

重説前回は現はしたる彼駒吉が素性を聞には是は元來羽根田村の或漁夫の獅子なるが幼少の
とき雨親を亡なひ便邊なき孤子と成しをお民の父徳兵衛が人の話しよ拾ひ取りて不便に思
ひ養有たるが駒吉は生れ得て實義な性質あるのみならず弱を助け強を挫く俠氣自づと備は
りて且腕力さへ凡ならねバ徳兵衛いよ、之を愛した民が行末の力にならんと或時姉弟の

明治俠客傳

義を結ばせ二心なく養育せしかば彼も其恩に感服して始終質やか一團らき居たりと然るも
徳兵衛が歿れし時は彼れ要用して下總の關宿へと行たるにぞ發父の最後遺言に遵ざりしゆ
東のうへ之を聞て且驚ろき且歎き又憤るること一方ならず何卒右の仇敵を撃ち遺恨を晴
さんと思へども其事咄嗟の間も起りて又咄嗟の間も了り民さへも仇敵の面体を見識いと
まの無りし程ゆゑ之を尋ぬる山なけれど奈にもして其手掛を探り山さんと思ひたるにぞ
民にも所存を語りて或時は羽根田に居り或時は番場に居て出沒自在に進退し毎日市中遠近
を廻り只管仇敵を尋ね居たるが尙手掛を得ざりし處ろ昨日は又音羽邊を彼地此地と徘徊し
圖らずも途中に於てれ國が難義に出遇しかば例の俠氣見過し難て之を救ひ取しと云けり、
是此男が小傳なりとぞ去程に駒吉の弱り果たるれ國を勵はり之を辻道へ打乗て只管途を急
ぎつ、其夜西の刻頃(今の七時)番場河岸へ歸り來りお民も大にも右の仔細の顛末
を委しく語り聞せしかばお民は更なりお大さへ殊のほか打驚ろき奥の一間へ臥床を設け
て負傷者を之より伏せしかばお民は更なりお大さへ殊のほか打驚ろき奥の一間へ臥床を設け
ばかりよししてれ國は辛やく疲勞を忘れて氣力平生の如くなり言請進退自在を得たりと
てお民よりは三年前伯父由衛門が飛弾よ於て半介に助けられたる其途の事を始めとして
次は日外慕參のときは是々の事にて圖らずも半介かと思ふ武士と對面したる時の趣も又
兵衛が非業の最後駒吉が素性所存の屋まで餘さずお民も語り出て扱又何故貴公様に成り
怪しき装束を成され且一昨夜は奈な事にて乞食共と喧嘩を爲れしか何れも不審な事有り
とて其來歴を尋ぬるにぞお國も屢々歎息し我は又云々にて夫も子にも相別れ屋敷を去て

明治俠客傳

第十七回

子を尋ね諸々方々徘徊うち特風体を取棄して偽氣狂と成濟せしが是を評判を高くして我
子に疾く知らせたく二ツは又盛りば過ても有繋女の悲しさに奈なる奴が挑むも知れずと
右を思ひ左を思ひ狂乱の体は化居たるに其甲斐もなく早稲田の吉よ最手強く挑まれしかば
之を防がんと思ふ餘り懐刃にて相格闘幸やく彼を切倒せしが加勢の奴等を防ぎ難て音羽ま
で逃來りつ圖らずも駒吉よ助けられたる始終の件りを包み匿さず物語り又お民が菩提所
て相見しと云ふ其男は我子半介は相違ない彼今いづくに居やらん必らず我身を尋ねて居や
らう賢い儘ならぬは人間の離合得失なりけりと只管に打敷さしかば民駒吉れ大等も殊の
やか打敷さ然らば今日より此家より居りて徐々に親子再會の時節來るを俟たまへ必らず迷ひ
出たまひ予と言葉を盡して諫むる程は益々感心して遂にお民等が言葉に隨がひ乃
ち常家を足留りとして暫時こゝに止まりつゝ是よりは暇ある毎に折々市中を打巡りつゝ偏
に半介を尋ねしかども少しばかりの便も得ずして云々の中に本年も過つ明れば安政四年と
成り世の中ますます騒がしく幕府の制法相みだれて悪黨暴客人を殺し財を奪ふこと夥た
しく最淺ましき時節と成たり

明治俠客傳

及ひに仕事を仕舞ひ人足を引奉れ本所へ歸り來りて右の者等へ貸錢を興へ亦明日の朝參る
探にと約束して返し遣しが後て來る一人の夫は尙だ貸錢を興へざるよし是も一歩の違
金を一刺わたりして聲を和らげ(駒)「レ」今日御苦勞だつた時に斯云ちやア氣の毒だ
がお前は今日の日雇より立見坊より珍しく能く働いて呉たから是から始終使つて遣せ
ンががれ前惡癖にやア何ぞと云と庭を脱出て御殿の傍に行たが、至体人足風情
の者が御大老の屋敷へ行て庭先へ遣入さへ勿体ねへ事だの御殿へ近寄なんぞとい相濟
ねへ事さから熱氣を注て仕事を爲ねへよ彼屋敷は他と違つて怖ねへ屋敷だからよト吩咐ら
れて人足は何か心中で恥たりけん苦笑ひして腰を屈め(人足)「兎角ハヤ慣せんで御心配
を懸ました左様ならバ又明日ト言葉少なに返答し賃を取り會釋しながら歸り去んと爲とこ
ろへ湯歸りのお民れ國が此方を指て來か、りながら行違ひさま不圖みて驚ろくれ民等いふ
かる人足お國は疾く其人の袖を捕へて聲を標いせ(國)「これ、お前は半介かマア何と
て此妾ト云ふにれ民もハッとはかり顔さし覗けば思ひきや是ぞ此頃尋ね盡せし彼半介にて
在しかば且驚ろき且悦こび懐かしさも亦彌増て(民)「モシ貴公私くしは日外魚籃の菩提寺で
れ目に觸つたお民で御座いまア珍らしひサア、此方へ私しの家は直さ此處です先マア
お寄くださいませ(國)「ねへ半介何から云ふか積る話柄や相談も又聞たいこと云たいこと
も、些どや少との事じやなしサア此方へ參つて呉れよ是やマア夢じや無からうかト云かけ
て既や涙ぐみ引戻さる、袖袂を拂ひ難たる壯士も思はず臉を風た、き(半)半介餘儀なき仔
細あつて斯る姿と成り果しが聞らずも母上と且お民どのにさへ、面會したるは慚愧に堪ず

明治俠客傳

面目もなき次第なり然ればとて今更なほしや御意も随がつて主人(お民を指す)が宅にて
事を盡さん扱も意外な事なりしと云れて二人も夢の如く先に立つ、案内したるが御吉も件
の男を半介なりと聞どりて手の舞ひ足の踏途さへ知らぬばかりは打悦こび存せぬ事とて今
が今まで人足呼ばり失禮なりしと手を捨て詫言ながら歸るよお大も始めて心附
て皆悦こびと大方ならす然ながら半介が今日何故立見坊の人足とまで零落せしかと之を疑
がひ思ひ杯してお民は急ぎ奥の間の小室を掃除させ此處ろに請ひ入れて五人程よく居並び
つ、或ひは初対面の口上を演べ或ひは再會の悦びを演べ挨拶云々一巡するうち既騎吉が詠
へにて勝手口の口上仕出屋の御膳籠の音聞ゆるが手が不足ゆる筆を捨て作者も手傳酒肴を
先次の間迄運び入たり

第十八回

離合寔は時ある哉一別以來四年を経て今月今日親と子が圓らすも再會せし半助の先づ
くど母の無事なる姿を見て不勝の歡び目を展たさ(半)思へば丁度四ヶ年以前半介平素
の志願を遂げんと彼小僧三吉へ托せし書翰の上に演たる如く日本六十餘州を廻り武者修業
いたさんどて御承知にも有つらんが拜領宗近の一刀と同じく路銀を腰に着け君父に背戻
て屋敷を立出で扱云々の處ろを廻り簡様くな事な遇ひ途中は於て外木親子を助けたる事
もあり又鹿兒島へ立越て是々の事有しなぞト先は有村がこど大石がこど彼日の試合退の
こと尙時勢の變動に依て師東の事の急がる、より云々の奮發し汗馬を糺うち四日として此
地へ常着したる事より朋友へ書を送りて君父の摸樣を訪ねたるに父上は物故され母上は癡狂

明治俠客傳

されて當時行方知れずと聞き利さへ君公も御勘當を蒙むりしかば、止ことを得ず芝濱を
去り菩提所へと行たる處ろ圓らすも當家の主人お民主従に遇たる事など物とお國が知らぬ
件りを詳らかに演了り再び言葉を変えて斯て後れ民等に別れ奈にもして母上に巡り過
たてまつらんと以て來手を代り品と替て種々苦慮奔走したれを遂に今日まで尋ね遇す然る
も此頃或人(有村を云)と約束したる事に依り所存あつて斯の如く特と人夫の群に入り斯る
身しき所業を働らさして爲て有んと欲し今日まで斯ていひしが時運來らず時運來りて
の企望は遂ねども母と再會の企望を遂しは幸福何事か之に如ん最悦こびしくト別後の始
終つまびらかに次第を添さす物語るを熟々と開果たるお國は切りに歎息し私を以て又云々に
て屋敷に出で子に逢んと月日を重ね思ひを焦し東西南北徘徊するうち去年の秋圓らすも早
稲田の吉と挑まれて簡様くの難義に逢ひ遂に彼を切倒せしが又云々の事な依り既に殺さ
れんと爲たりし處ろ爰に連なる駒吉の仇が俠氣に因て助けられ尙れ民の主従が實義の介
保今日まで無事月日を重ね來り折市中各處を廻りて方其を尋ね暮したりしは亦半介
が知らぬ始末を添さす語り聞せて尙お民等も眞實なる扱かひの程を演たりしかば半介切
りに感激してお民駒吉れ大等が恩を謝し義を賞し只管悦こびを演る程にれ民駒吉之も當ら
ず兩人言葉を打揃へて我々は又貴公様と飛驒の親子が救はれたる昔の恩義を報ゆる爲と
且は又別と思ふ仔細も有ゆゑ聊さか母御の世話を爲たれを絶て恩に報ゆる道理なしとの諒通
したる挨拶も半介益々感心して聽てれ民駒吉等が献酒杯を取揚つ、是より一席の酒宴を開
き主客ども愉快を盡し時移るまで、酒盛したるが暫時ありて勝手元より仕出屋の壯丁

明 治 俠 客 傳

が徐々ど這入來り私し只今お盛處にて半介様のお話しをツイ斯々と聞ましてお懐しむま地
へかね失禮とハ存じながらお目に懸りに出ましたト云れて半介お國さへハテ不審なト其男
の面を熟々打見やるよ是ぞ只今半介が言葉の中に云出たる先年屋敷を出奔せしと親に手
紙を托せしと云ふ、(此事本傳一の上在り)酒屋の小僧三吉なるに親子ははと驚ろきて
其恙なきを打悦びれ民等へも引合せしかば皆々今日の不可思議なる奇遇の程も感歎して是
より話柄を改ためつ、世の雑談に笑ひつ飲つ三吉は又酒屋を止て當時向ふ河岸の八百榮
(是は其頃駒形に在し料理店なり)方々奉公して暮し居よし右等の話しも打混て最賑やかに
酒盛酌し、真夜中頃まで飲深しつ辛やく其日の事果たりとぞ

第十九回

重説吉田半介親子は不思議に再會の企望を遂て四年以來の積る話談に夜の深るをも知らぬ
まで思ふ限りを語り盡し深更に及びて打臥たるが翌日は民を始め駒吉お大ね國さへ共に
言葉を打揃へて身の有着を求むるまで今日より當家へ寄寓すべしト只管止めて已ざるに半
半介も其意に任せ當分爰を宿所と定め厄介に成べしとて其日の夕方戸外へ出しが何處へか
置し置けん彼宗近の一刀と衣服大小貯蓄金の餘手廻りの物までも悉とく持歸りて國が
爲め我身が爲よ幾干の金を包みて食料と差出せしが民は之を手も觸らず、別に頼みた
き仔細も有るゆゑ此義は決して無用なりとて絶て承引氣色なきよぞ半介も争うひ難て其金
を受納め白米四五俵買來りて之を臺處ろへ積入させ先當分は此家に親子諸共寄寓したりと
其後お國は人なき折に半介を打招きて、右の貯金を持ながら向には何ゆゑ斯までに零落を



極めたるぞと密ひやかに問ひたれども半介は苦笑ひして假令此義は親子なりとも話ること能はずとて其趣旨を告ざりしとぞ斯りまのちは半介親子も何か土屋の家業に慣て物の云様立舉動まで總て町家の風儀と成り店のこと與の事なを彼是と手傳ふ程にれ民等は氣の毒と思ひ種々これを止むれをも開す因て果の共意に任せ知らず不識手傳せ身内の者の如く成しが斯て云々の中に三月と成り爰よりは程ちかき隅田川の櫻花ども八重一重濃海さ今を盛りと咲出せしかば一日のこと民は獨り半介を留守居させて駒吉れ大ろの餘の者等と右花見よとて出行たるが其日黄昏とも思ふ頃及ひ民は獨り歸り來りて奥の一室に茶を煮ながら休憩居たる半介の邊り近く動乎座るに半介は不審て(半)ヤアれ歸りか疲勞たらふ、母親や駒吉は何しまたか尋ねれども此方は何とも云ずして暫時く男の顔を目成め(民)斯して一人で歸つて來のは仇や愚かな事ではなし幸との思ひで彼人達を脱して來た譯さ、些はお察し成さい升なト、云れて此方は彌々訝し(半)とは又た何を察するのだハ、ア分つた途中で以て小用が弁く成たのか(民)エ、馬鹿な事をお云なされるな(半)然なら何ゆゑ走て來たのだ若喧嘩でも爲はせぬか急病でも起つたのか(民)イ、エさ然な事でも無よト云掛て兩手の指を組合せつ、反せながら雪より白き襟頭を男の方へ差向て(民)アノ半さん其指を話し爲うと思ひ升がねお前さん怒つちや思だよ(半)何いふ情だか知らないが何を無法に怒る者か(民)然らば駒達か歸らぬ中に云升がね、ア半介さんお願ひですから是に成て下さい升なト云つ、細き指頭よて男の膝に書文字を讀取る此方は何氣なく(半)いろよ成て呉るとか(民)アレマア何です大きな聲でト云かけしが今更に恥かはしきの彌掛けんハ

ツと救らむ花顔を双の袂に打掩ひ俯伏たるま、其暫時く思を凝して居たりしとぞ、夫半介は豪氣の武士なり今は飯も身も落して當家には奇遇それども斯る女子も挑まれて白痴事など爲べきよむらす然はわれ我母の命を助けられ其他已れも厄介と成り充分恩義を被られたるお民が所望容易よらねば遂に勇士の胆を落して其企望に隨がふか何れよしとも最苦しき此場の結局いかよぞや

第二十回

百騎千騎の強敵も怯れを抱かぬ半介なれを親と云ひ我身と云ひ世も淺からぬ恩義を受たるお民が爲に口説れては有難否とも云ひ難けん將と途方に暮たりけるが真むて胸中思案を決して容儀を取ため(半)恭じけな御所望ながら見らる、如く親子とも流流の身の上にて斯して前前の實情に依り食客と成て居ながら未だ二人が有着さへ求め難たる意氣地なるゆゑ始めよりして淫奔がましき不埒な所業いたさんこと宜しからずと思ふ程其邊を熟々考へられて思ひ止まり申されよ男女に限らず情慾の旺んに斯と思ふ時前後思慮なき不義を遂げ世に浮名を流すものなり熟々思案したまへト氣真面色に成り説諭ををれ民は聞つゝ打黙頭(民)御深切ナ其言葉一々承知いたし升た、シツが私しの此念が空か實義か未始終遂る遂ぬの争そひは只今いか程申したとて割て見せずは斯々と分らぬ胸の中なれば尙お疑がひ成さるなら貴公のお手に掛られて殺すとも活すとも何とも勝手に遊ばされお試み成すつて下さひまし、是ほど思ふ一念が届かないとは情ないモ貴公開かせぬ私しが平

明治 俠客 傳

常の行状を御覽に成ても浮て居るか浮氣で無かは分りませう。無情人の氣強さよ。膝に就
着き身を慄はせ密び音ながら泣沈始末に半介しは。歎息し(半)然らば先頃俺へ對し頼み
たい筋が有と度々申して我等親子を引拘て置れた。此戀情を遂るとての下念にて在たるか
然と知ら母を連て疾く當家を立去たまハテ脱つた事をした。ト云のも俺に於て決して
前を嫌ふじや無が恩ある人よ不義の名を負せるのが術ないからよト云れて此方は岐と成り
(民)成はと私しが此通り執念くすしたゆゑ然思し召もれ道理ですが某お頼みの筋と云のは
決して戀情の事ではなく外に願ひの在るとにて右は全体無理。よも貴君と夫婦に成てなら
お話を致しませふと存じて居ました。今のお言葉餘義ない事ゆゑ然は只今すませふ
が實は日外菩提寺で貴君よお目に懸つたせつ。お話を申上た通り私しの親父徳兵衛は人手に
掛つて果ましたが私シヤ女子の墓なさ共仇敵さへ撃つことならず只駒吉が朝に晩に心に懸
て仇敵奴を尋ねて暮て居まよゆゑ假令其奴の面体は知らぬにも爲ろ何か一度探して出で呉や
うかと右を懇みよ今日日まて悔しひ月日を送つて居うち不思議な御縁で貴公方と斯した結
親に成ましたは是を親父が草葉の影から、お引合せ申したかと思へば嬉しき有がたさに願
ぞ貴公のお手を借り右仇敵奴を撃たいと存じて着は致した。奈に貴公がお強くて勝負は
時の運とや命かけの事です。此大體な御懇意では不容易御承知だ。被まいと存じた故
よ何卒して無理にも夫婦の縁を結び右の企望を叶へたくと存じての此願ひ左もなくば私
し風情が、假令死ぬほど戀れても何して斯い厚かましひ失禮至極な思ひの丈を何ぞ口
出されませんぞお察し成されて下さいませと始めて明せし所存の始終を語り終して復更

明治 俠客 傳

男の膝へ縋り着き絶ぬばかりよ泣沈みしは是戀情も亦止がたき心中と見へて惘れにも最苦
々しき終末なりけり

第廿一回

重説お民が戀慕の仔細を熟々聞居たりし半介忽地聲を揚て堪ぬばかりに打笑ひ(半)よし
右で心底みへた、然らば前前の企望に任せ人の見ぬ間に此場にてツイ交はりを結ぶこ
と固辭べきにあらぬも然しては世の中よ在ふれた野合と成り不義の汚名は脱れぬ事ゆゑ
如斯く心中を苦しめて時代らしく口説に及ばず只公然に双方が其向をり人に話と表面相談
して明々地に夫婦に成のが懸念がなくて宜しからふ、又俺の性來は頗る氣が有る質ゆ
ゑ假令お前に頼まれ無でも徳兵衛どの、仇敵を撃ち恩返しを爲やうと思ひ心中に憑て居
るといれ前の心底が只管に右復讐の事はかりで戀は只これ着たりなら強がち夫婦に成らすと
も其復讐の存念は必らず遂させず程に其邊を熟々考へて戀の一儀は止よといふ、最
なる言葉を聞きお民の彌く措きて(民)眞と嬉しひ其お言葉親の仇敵を撃たいは勿論で
い升が元々其事ばかりなら斯した絶語は申しませぬ、願ぞ不便と思し召アノ片方の願ひの
方も慥へて遣て下さひ升ト云かけて復伏俯折から何か二人が話談の容子を、立聞して居た
りけん次の間の隙子押あけて入來るお國と駒吉とが微笑顔して佇立む姿よお民は更なり半
介さへハット驚ろき赤面して後談さよ差俯ふき黙然として言葉なきをお國は漸々打見やり
て(國)コレお民さん何事も此母親が承知だから安心なさひナサ駒吉さん(駒)然ともく目
出度く實に先刻此二人が途中に於て姉御に失れ心配しひく歸つて見ると何か與での處

明治 俠客 傳

をばなし、ア心得ぬに内外より引別れて立開すれば姉御が孝心半介様か石より堅い御挨拶何れも感心いたし升た、母上も私し奴も御座存はムりませぬサアれ二人とも居直つて三々九度の祝儀だく(國)駒さんが云れる通り私しも願う處ろだから親の許した夫婦の祝儀サ、早ふ仕度しやト云れては民も半介も辛やく胸を撫下し頭を擧て双方が、トみれば奈に駒吉は衣紋竹を背に入れて肩を張しは上下の形状も似たる物なるか手に携さへしは長柄の火仲これを銚子より形り異形の有形ろれのみならでかくは又駒吉の汲物膳へ折鶴を打乗ながら捧けたるは是島臺の心なるべし、見れば思へば二人が早速の打掛意外の仕方よ二人の驚ろき且果れ且おかしさに堪り難けん果は四人が聲を合せて吐き失笑を笑ひ聲に何れも忽地調和して鼻じろみしも打忘れ是より駒吉が例の氣轉に瞬たく間もなく誠の銚子祝儀を携さへ出て推据られお民は今更ら恥かしく又嬉しさも彌増て尋く胸を鎖めもへず身姿キリく揺蕩ろひ程よき處ろ居並ぶに半介も今と成り不の字を云べき由もなく馳て献る、祝儀を取揚て汲儀式の献酬既や事果るに至りしかば駒吉は幾干宛か包に爲たる祝儀の金を家内の男女へ興へ杯し婚姻の事を披露せしかば何れも事の急なりし打驚ろきて祝詞を演べ急ぎ酒肴を調理しつ陽氣一途の酒宴を開き皆萬歳と祝したりまど、寔は意外の祝言成しが是偏に駒吉お國が物に慣たる扱ひと且戯むれは事よせて物堅き半介が心を和て斯ばかり最速やかに事を整のへ以てお民が企望を愜はせ愛に目出度納とぞ

第二十二回

事慣れ物に慣たる駒吉とお國が氣轉の働らきにて有樂に猛き半介も胸に巻れて瞬く間に

明治 俠客 傳

お民と婚姻の事了り此土問屋の主人と成しが半介生來寡慾にして些々たる利益を將ことなく其行跡遠なるよご家の内に浪風立す目出度月を送り居たるが昨日まで花は恨む夕風も何か待てる、夏は來て當年も六月中旬と成つ是より先お民よりして父徳兵衛が横死の事と半介親子と縁を結び今は云々成事なと總て本編三の上より昨今に至れるまでの始終の事の來歴明細に認ためて之を一通の手紙とし飛脚を仕立飛脚へ遣はし外木由衛門へ通信したるよ由衛門大ひ驚き先は徳兵衛が悔みを演べ次に我は又先頃中相場を罷り失敗して大損毛を致したゆゑ國元にも居居れば近日江戸へ進ゆきて何か一兩法相興し再び旗を揚んと思ふま且は親子が命の恩人半介殿へも再會して先年のお禮を演たければ傍々不目に出向いの節は宜しくトの返書にて有しかばお民は之を夫に示し且駒吉も由を告て専儀ら外木の來るを待しと然るよ當時天下の形勢いよ、益々亂れ來りて強盜白晝に徘徊し四民安き心もなく戦々恐々の中に暮しけるが半介は奈にもして彼徳兵衛を殺せしと云ふ悲涙士を撃んと思へば其手掛を求めたさに遠近親疎の隔てなく若右の強盜押入り難儀に遇もの有を聞けば其家々よ走行て賊を捕ぎ人を助け能恩恵を施こしたるよぞ人皆これを感服して尊敬すること大方ならず向か番場の親分と稱し又俠客士半と稱し小兒の慈母に懐くが如く衆人日毎に訪來りし門前市を爲に至り全盛を極めしかば此時よりして半介が豪名遠近に聞えなく天晴俠客の名を博したりと然るよ先月中かして母親お國が中暑の氣味にて荷且に打風たるま、日敷を經れども枕わがらず此故に民姉弟大等も心配して晝夜看病に手を盡し醫療等閑ならされども病人は益々あしく昨日今日は衆多の醫師も既まじを投たるよぞ半

明治俠客傳

介は限りなく歎き悲しみ十四五日は徹夜も爲す看病したるが斯て或日の事なりしとぞ半介は病人の儘かに睡りし間を見て店先へ出来り兩袖を脱ぎ汗を入れて一息はつと呼たる處ろへ但みれば手足面体まで切疵の跡おびたいしき一人の乞食が十四五八の同類とも見ゆる奴等をツロく引連れて會釋も爲すして入來りしかば半介は目を怒らせ(半)エ、うるせへ乞食ども取込がある出ないト叱り云れど平氣な面よて右切疵の奴あざわらひ(乞食)の手元は御面倒でもお取込が有ましても此方の知つた事じやねへモシおや方、俺ちやアお前のれ袋に些とばかり用が有て遠方わざく來したのサ願を會せてお呉なせへ早稲田の吉が來ましたと取次で貰へてト云つ、メツと上り登り店巾せましと大胡座かき落したる身の中の虱虫を捻りて動かさるに半介さてはと思へども今危き母の耳は何事も入じと思へば切迫當惑の胸を痛め怒を忍びて奥の間の出入の口に居座りつ、敵の容子の善悪いかにと暫時疾視居たりしとぞ

第二十三回

當下惡黨早稲田の吉は四下きよろ／＼見廻しながら一欠して身を反せ(吉)コ、親方ヤ半介お前にやア用はねへ阿母さん會せて呉れる是サ怖かねへ其顔色縁釣人形見た様眉毛を釣たり下したり然る意氣張る尻が出せ、エ、面倒臭へコレ阿母れ前の情夫の吉が來たヤイ阿母くト奥へ向つて大聲張あげ呼立られて半介は汝れ惡黨一掴みと思ひにけれも今が今、臨終近き母をよの冥土の妨げ起させまじと思へば最と朽惜き胸を鎧めて言語を和らげ(半)實の處ろ阿母の昨今病氣で治療の甲斐なく今死し垂つて居ところを少々靜かに爲て

明治俠客傳

吳ろ余体貴様は何用あつて阿母へ而てへのだ巨細の事は知らねへが己が代りに聞て置ん遠慮なしと話しなせへコレ頼むから靜かにして呉、些との間だト云ふ言辭は此方に益々限入て(吉)ろりやア近頃氣の毒だ、シヤが老婆の死亡と死亡ねへとは其方の勝手已らの知つた事じやアねへト云つても臨終際じやア話した處ろが分るめへナ、然じやアれ前を對手に爲て談判するから儘かに聞よ打談判じやア話した處ろが分るめへナ、然じやアれ前を對手に爲のか然な事なら器々いはすと早サト云つて呉れば宜いと思へども無こと幾等侍しひ(吉)アイさ四百兩かして呉ね(半)ナニ何だど四百兩(吉)何だ胆が潰れたか(半)何の四百や五百兩ねつから胆は潰れねへ然し吉公なに故あつて(吉)何故も何にもねへ是みや面から手足まで切れた疵が二十ヶ所此一ヶ所の療治代安く乗つて甘雨之を乗れば二ヶが四乞食の身には一枚な四百兩の膏藥代も仲間の奴等が骨折で借て今日まで療治した其借金を取來たのだ(半)ハテ然いふ譯柄か、シヤ又なんぞ阿母に其借金を拂へと云のた(吉)ヘンと不けて貰うめへコレ半公此疵は誰か附たと思つて居のた(半)誰か附たか知るものか(吉)どつこひ然は脱さねへ、今更云の爲益だが去年早稲田で阿母に些とばかりの物云から切て／＼切られた疵あど其証人は爰に居る黨の奴が十五人卒名をよ其時の容子を委く云せ様か何と是でも脱る氣か不知を切も法圖がある返答せうだ確かり爲なせ(半)馬鹿を云て貰うめへ汝達の仲間の者が十四五人は思かなくて飯令百人千人が口を揃へて証據立証の筋筋のど云しても此方が見れば仲間の相すり出處へ出て白黒の勝負を決りやア何でもなし、如斯手ぬるい強敵ではピクとも爲ねへ半介だ對手が違ウ一昨日來さつし馬鹿な面なト云ぬけるを此方は聞か

何だ半公返事を爲すの飽まで不敵な悪漢が強談か、りし言葉の端々、半介篤と聞取て遺恨の顔色すさまじく目眦さかづり相手の面を暫時疾視詰たるが時、時どて情なく奥の方に

ばかりの難題も親には代るものなしと思ひ決めて打黙頭(半)よし、其も承知した少し待よト傍らの掛視箱を引よせて証書一通メラ、認ため契印押して投出し(半)サア是で云ひ

ばかりの難題も親には代るものなしと思ひ決めて打黙頭(半)よし、其も承知した少し待よト傍らの掛視箱を引よせて証書一通メラ、認ため契印押して投出し(半)サア是で云ひ

す(半)チ、其々よく來さつしつたサア、早く上りなされト云ふに、民駒吉は、大ら遠く、
いしく振かへり共、面を合せれども、叔姪從弟同士のながら、尙初對面の事なれば、驚ろき悦び
出迎へて一人、一名告つ答へつ、先は二人の足を洗はせ、繼いで奥へ誘ひ入し、が此事後事
一時に起りて、且れ國さへ危き、よ々家内の混雜一方ならず、最強が去く、見へたりける

第二十五回

お國の疾病は危篤に迫り、悪党吉は、悪談を働らき、外木親子が尋ね來しなを、彼と云ひ是と云ひ
事皆一時集りて、歡悲交々分よしなきに、ぞれ民駒吉は、大等は、彼方此方と氣を揉て居座る間
もなきばかり立働らきて居たりしが、暫時して辛やく座に着き、外木親子を、櫻應ながら先は徳
兵衛が狂死を始め、其より以來の、一十一又今日の云々まで、語りつ聞つ二時三時或ひは、
或ひの、既こび思はずも時を移す、幸はひれ國は持返りけん、暫時苦痛を忘れたりとて、右の
之の轉末を聞とは無に聞とりて、悪党吉が云々を知り憤怒りに堪ざるに、ぞ思はず重き枕を
けて密か、物と思ひ居たる、よ半介疾く之を察し、彌々憂ひに沈めども、然り氣なき体に見せ先
改ためて、由兵衛親子が遙々どの來江を、勞ひ且圖らず云々に、て當家の入婿と成たる事など、
切に物語りて、以來の親縁を、結びしかば、由兵衛親子は、又、席を隔て、平伏しつ、先年飛弾の番
波にて、大恩を受たる事など、彼最委かに云出つ、且其恩義を感謝して、感涙を止め難たりしか
バ半介これに、制止め斯親類と成たる以上は、他人がまじき禮には、及ばず先、充分くつら
きて、休息たまへと思さむるに、ぞ親子の益、感涙して、尙お國が疾病をいたみ種々の話、
果しなれば、駒吉ひそかに、焦燈で半介の袂を、引き次の間に、呼出しつ、吉が事を云出て、(駒)先

程彼奴が參つたとき、俺ち直も飛出て打つて遣ふと思つたが、阿母さんが驚ろくだらうと、
辛抱して居た残念、然は爾と阿兄の心じや、跡を向する積り、さか案じられて、堪らねト云に
半介太息つき(半)己とても同じこと、若阿母が病氣でなければ、彼奴を撮んで、戸外へ釣出し
淺草川へと思つたが、事の當惑、爲方なきに、臍の緒切て、初めての辛さ、悔しさ、残念さを、
へて返した、が只不審な、アノ唐傘と、ふして、彼奴が手に在た、か前覺へはなかつた、かト問れ
て、駒吉小膝を前め、(駒)彼唐傘は、泊外も、お前さん、よ話した通り、俺ちが、言羽の、護國寺前で、阿母
さん、を救つたとき、乞食をも、打つた傘、だ、其時、忘れて、落して、來たのを、彼奴等が、拾ひ取り、
か猫かの血を着て、持て來たに、違ひないト云ふに、半介、黙頭て、(半)それ、で、判然事が、分つた元、
り、去年の事と云ひ、殊には、傘の、油紙が、其夜の、雨の、烈しき、中で、血を、吸て、居た、道理も、よく、且、彼、傘
を取れて、居た、とて、論じ、破れば、破れる、事、だ、が、昨今、幕府の、政道も、亂れ、果たる、乱世、なれば、若、彼、奴
等が、出訴に、依り、公事を、起すに、到つたら、黒日、疾く、掃あ、かす、萬一、も、病人、まで、白洲へ、撥き、出
された、日には、彼、容体の、苦しさ、加減、多分、半時、保まいし、飯、さなく、共、已、成は、入、牢、される、に、違ひ、な
し、然、え、た、日、よ、は、阿母、が、苦に、爲て、死んで、終を、う、かど、右を、思ひ、左を、惟ひ、先、阿母、が、死亡、なる、まで
惡ひ、耳を、聞せ、まいと、當座の、分別、餘儀、なき、當は、無れど、大金を、ツ、明日の、朝、まで、と、約束、を、爲
て、返した、が、既に、三百、四百と、云は、一方、なら、な、ひ、金、高、ゆゑ、有、繋の、已も、當、藏した、何、しる、急、場、の、事
だ、から、ト、云、かけて、歎息、する、に、予、共に、齒を、切、む、駒吉、も、實にも、と、ばかり、思へ、ども、是れ、と、て、別、よ
詮、方、なき、に、屈、托、極、まり、太息、つき、奈は、爲、んと、打、案、じ、たる、折、から、後、の、殺、戸を、推、わ、け、替、は、だ、卒、事
千萬、ながら、共、四百、兩は、私、しが、湖、邊、いた、して、差、上、ませ、ふと、云、ふ、聲、聞、つけ、此、方、の、兩、人、ハ、ツ、と、驚

成ふと氣を利せ作者も早速筆を擡ぎて次號の座敷へ退ぞき入たり

第二十六回

時に由衛門四下を見ながら右と左に手を組んで屈托したる半介と駒吉とを打ちやり(由)實は只今お民より今日も迫つた御難儀の一伍一什を聞きしに失禮ながら半介のには其吉と云ふ惡漢の所望の金の四百兩に差支ぬの趣ひさなるがナニさ金銭は廻り持ゆゑ、お察事なざるに及ばぬこと御心配なさひ升な幸はひ私に下谷邊に金の出來的が有からツイ一走り参り升て朝達して参じませふ暫時くお待なされ升ト云掛て立起るを半介急よ推止め(半)折角の御深切添けなくは存じ升が半介胸中所存あつて此難題を打破る計策を工風したゆゑ決して御心配御無用なり其より其許は長途の疲れ無かしならん先午睡でもなされ升て徐々休息いたされよ病人もあり取込はありお變應も心よ任す暫時御用拾ありたしと思ひ入て挨拶したる其顔シロと由衛門打見やりつ、何事か忽地心に熱頭けし阿々と打ち笑ひ(由)イヤ、其邊は御掛念あるな差あつたのね困りと存じ、右様に申しましたが外は御所存ある事なら復た御相談申させぬ然し成るたけ穩當に事を濟そが肝心の熱々御心配なされ升ト云ひすて立て次の間の後戸を開ければ娘のれ七も、同じ心に立聞しけん愛ひを合し顔色にて作立て居たりしかば由衛門は目ぞ知らせ之れを伴なひ二間ばかり隔たりし奥へ行くに民は始終お國の傍へ着切よ爲て勵はり居たる看病疲れに思はずも、ウト、居眠り居たるにぞ然らばとて由衛門、お七を誘なひ密びやかに戸外へ立ち出で橋を渡り觀音の方

へと走り去つ、或小料理屋へ打登りて娘を引よせ聲を密め(由)扱はや不思議な災難で大恩受た半介殿の母御の上に昨日今日降か、つた大變事始終の仔細はお民が大方開たて有ふれど斯いふ時こそ心配して何と一ツ工風を廻らし先年受た大恩に報ひにやならぬ事なれを何しる明日の朝までと急場に迫つた騷動ゆゑ疾く爲なけりや半介殿も阿母さんも番場へ捕られ不圖事に成らふも知れず何と其方が考へて甘ひ工風は有まいかと尋ねられて此方は熱頭(七)實は私にも先刻よから半介様と駒吉さんの内緒話しが氣よ成ゆゑお民さんが眠つた間に被戸の隙に匿れて居て話しの様子を聞かぬ奈にも切迫話つた鹽梅ハテ困つた事でも、心配は爲ましたもの、別に爲方が無からしてト云かけて歎息つき「お前は怒るか知らないが今ぞ昔日の恩返し何ぞへ私しの身を賣て幾等でもお金を拵らへ其吉とか云ふ惡漢と渡して遣たら濟ふかど考へは着たもの、又お前の心も有から云すに居たが喃父さん、私しや何なに苦勞しても半介様のれ爲なら些ども願ひは爲ませんよ全体去年春渡で死んだと思へば何でもないかお前は何と思ひなされるト云つ、ハツと報らひ百元よ涙を浮て俯伏たるよぞ我子ながらも殊勝な心中を由衛門感心して漣なす涙をハラ、落し(由)チ、お七や能く云た能マア云て呉たナア實は已も然と思つたで、最前半介様に向ひ金の事を云出たら中々承知されなんだが其時の顔色はアノ吉とかをバツさり切て呉へ物に盡を爲る所存で有と洞察た程に是や大變と思つたけれど怒じ其場で異見を爲より實に昔日の恩返し其方が身を賣てなりと爰は一番氣張れば恩を知らない道理だから其相談を爲やうと思ひお主を爰まで連出たのだ何で俺が怒らふぞへ然なら願ぞ然して呉れる其中石よ監着ても已ヤ其だけの

明治俠客傳

金を調のへ受出に行ほどと些との間だと諦らめて願を辛抱して呉れや但し此事はッかりは
飯合何いふ場合があつても名聞がましく聞ゆるから半介様に知らしちや成ぬだ極内々で爲
て呉ろト云も涙のオロ／＼聲も尽しもあへず徹と伏し娘が背中に折重なりつ、聲を立じと
手拭を嚙切ばり嘸しめつ前後生体なく伏たるは道理せめてぞ惘然なりける

第二十七回

其ありて由衛門は娘の背中を擦りながら涙片手は聲を絶らせ(由)然ならぬ七思返しに身を
賣て半介様の難儀を救つて上る氣か扱々出来た感心した、とは云もの、遠方を遙々當地
へ来たばかりで芝居一幕みせなひうち女郎は爲とは何たる事だ己や術ないぞト云かけて切
り胸を打叩き打叩きつ泣沈む覺悟は爲てもお七とて山家ろだちの處女なり豫て聞つ
る川竹の愛飾しげき遊女が勤めする夜の苦しさは奈ばかりぞと思ふさへ、胸に針さすばかり
なれど是は覺悟の上なれば元より辭む可にあらねど此身が居すば明日より誰を便りに老父
が毎日毎夜を送るかと思ひ想へば堪り難て絶入ばかり泣入りたるが折しもあれ元は老父
とて告わたる辨天山の鐘の音に流石永かる夏の日も既入相となりたるよぞ二人は訖
容を改め(七)ナア父さん其歎きは私しとて同なした泣たからとて爲方がないモウ日が若
る急なさひ疾く爲やうト急立られて由衛門は氣を取直し(由)眞に然ふだ過くなるサア
疾く出掛やうツイ見苦しふない様に仕度爲やト云ながら涙かくして勘定も粗忽く濟せ
過たいしく茶屋の戶外へ立出しが由衛門は若き時より京大坂長崎はじめ民等が生れぬ頃
には江戸にも来りし事あるよぞ斯る筋さへ心得居りしか急ぎ吉原の廓内へ行て慈雲ひに人

明治俠客傳

を頼まず何か由の有とみへ佐野橋へと進み入りて主人辰之助に面會しつ休よく始終を繕ろ
ひて身賣の一儀を相談し且四百兩は出せまいが或云々の難儀が起り義理と思とに絆まれて
餘計なき次第ある譯ゆる無理で有ふが右金高を是非とも借たき頼むきなど委やかみ刺みし
かば辰之助も憐れに思ひ殊は七の面を見るに色白く目下すしく豊下なる色顔まで愛
敬こぼる、容貌なるゆゑ女郎などには念合なれば即座に承知の旨を答へて且懇切に親子を
養應し証書其他の約束まで残る方なへ整のへ了り懸て四百兩渡せしかばお七の慨こび大方
ならず由衛門も勇み立て然らば疾く此金を持歸つて用立んと別を告れど主人は引どめ左も
あらずがモウ一盃とて献る、酒盃いなみかね且はお七が今さら離れ難たる親の袖を引れ
て此方も離れがたく不圖取交す酒盃の数そひ來れば自から哀別離苦も忘る、ばかり既十二
分熱酔せしかば夏の夜疾く深たりけん大引つぐる柏子本に由衛門驚ろきて立歸らんを爲る
ほどに主人は再び推止め大金を所持しなから老人の夜道は危うし枉て今夜は一泊され明朝
早やく歸れと云を容易に聞ぬ老人堅氣れ七が剛へ立たる間、何分頼むと云もあへず心利し
て適たしく戶外の方へと走り出しが忽地廓内を出離れつ、足に任せて一散に今山町を
後にしつ馬道さして急々折から向を遠て、來りけん頬被りせし一人の男が走違ひさ由衛
門へ勢はひ込で突當りしかば由衛門暫時も堪らず後へ覆たり倒れたるを伴んの男は見向も
爲すして一層烈しく走出つ、北へ向つて走ると見る間、忽然として見へずなりたり

第二十八回

昔日荷渡しの厄難に親子諸共死をへかりしを人の情に救はれたる恩義は今ぞ仇となり我子

明治俠客傳

を賣て身の代の四百兩を懐中に夜を深しつ、吉原より本所まで走り來り行違ひさ突當りしかば、然なきだに、足元弱き老人の不意を撲れて堪るべき忽地をつさり仰むけに尻餅搦て倒れたるが幸ふして起あがり既行過し男の影を見後りながら舌打ならし(由)思まじひ野郎だなア、人を倒して何とも云すにモ一走脱て行たさうなヤレ、衣服も泥だらけ腰も大分痛めたわい馬鹿くしひ目一遇た事よト云かけて裾に着たる座を拂ひ腰を擦り亂れし衣紋を繕ろひながら不齒心づき懐中の金を探るに悲しむ哉財布の紐の散切たるが儘かに襟に遺りしのみ金のかの字もなき爲体くに、由衛門手足かた、息吹計り仰天して「サア、大變、大變、扱は今の野郎奴は盗て遣れたか是りや何だ、尙其邊に居やうも知れぬ追かけ然ふだト一生懸命血走る眼を配り、元來し方へど一散ばしり見れども仇の影さへなし「然りやア後かト引返し、右かト走り「左りかト、行つ戻りつチロく血涙に曇る目を見張あしを飛して四衢八街走れりては走れり狂氣の如く尋ねれども何れへ行しか曲者の影も形跡もなかりけるよぞ由衛門アツトばかり氣力も腰も脱はて、落胆したる無量の失望「エ、是りやまア何ぞやい大事とも大切とも云云れぬ彼金を、然じやア彼奴は攫奴て有たか不注意事と爲て退た奈に何でも娘よさへ云れぬ不覺こりや何せよ是りや何せよト我を忘れ大地へ倒れ大聲わげ泣つ口脱つ點々なる齒を切しばかりて夏暫時く消入るばかりに飲きたるが再び信と氣を取直し「ア、我ながら愚痴で有た知れぬとて分らぬとて此儘に爲て居るべき假令千草の根を分ても今の攫奴を探し出しアノ四百兩取返さずは生て居られぬ今夜の

明治俠客傳

難題かなはぬ迄もモウ一度さがして見やうと身を起し復走出す千鳥あしに喘ぎくして心の聖天町の邊を指て歸東なげにも追行たりしは實淺ましくも苦々しく憫れ慕なき始末なりける、此時淺草の鐘間近く聞えて夜は寅の時と成にけるが、折しもあれ程ちかき吾妻橋の傍はらより現はれ出たる早稲田の吉が四下さよろ／＼見廻しながら眉を皺めて首を傾ふけ「昨日半介の野郎奴が明日の朝まで四百兩拵へて遣と云したか何だか迂參に思つたから仲間の奴を密ばせて驚くり容子を聞いた處ろ思ひ懸ねへ加役が這入彼野郎の親類とかで飛弾から出て來た老爺奴が右の一義に口を入れ纏て娘を連出たは義理とか恩とか云ふ事で、アツキリ彼を賣こかし四百兩拵へるわへど附た狙は外れるか當るか一番こゝに居て右の老爺を捕てめめ、試して見やうと宵から今まで、待て／＼待明したか何しやがつたか未だま歸らず大分腹が空て來た夜鷹うばでも食べいかト飽まで不真の胸中を獨り言して油断なく仲つ屈みつ／＼進み出たる後より復來掛りし一人の男が行過んと爲て振返り不圖見合す互ひの面体、暗にはあれと件の男は疾くも然と行途を遮ぎり「わりや昨日來た早稲田の吉だな(吉)オ、お前は半介(半)ハテ宜處ろで出くわした(吉)ナニが何だぞ氣色はみ双方疾く見搦して疾視合つ、ヨリ／＼と暫時呼吸を揃りたるは事あり氣にぞ見へたりける

第二十九回

當下吉田半介は敵を遮ぎり大手を廣げて憤怒の音聲凄まじく(半)汝れ惡黨吉野郎よい處で出遇たナ昨日くれ／＼約束した金を渡すぞ慎しんで頂戴しろと云せも果す此方も懐中搦探りて取出したる合口の短刀スラリと抜放し逆手に把て冷笑ひ(吉)汝が渡すと云ふ金は大方

腰の死金たらん其金ならば此方から渡して遣ふト馬しり返り走り越つて突んと爲す半介... 八重九重の雲の内は隠れ密んで居くさるゝも是非尋ねて復讐の志を遂んと思ふ... 幸は今朝約束なれば家で待より此邊でも迎ひに出来た流車に向ひ斧を振ふも... 滅を招く今日只今は然し乍ら自業自得だ、イザ其首を根引よして思ひ知らさん... 云も了らず大手を開き手捕ませんと飛越るゝ此方も疾く飛退て(吉)生粋ねかすな一文野郎... 把直し無二無三に突て掛れど此方は柄に手も掛ず烈しく突出す白刃の下を掻潜りては引外... し引外しては遺跡はせ閉つ開きつ平生の爰は本事を現はしたるよぞ、兇暴無比悪黨も... らはれて夢中の如く身体疲れ呼吸せはしく既敵はじと思ひしかば隙を窺り足を飛して颯風... の如く逃出を半介は借と見て「汝れト云さま飛鳥の勢ひ我も逃ひて十歩を百歩、切迫烈... しく追かけるに吉は今さら突迫しけん吾妻橋を打渡りて向島へと逃行つ、復讐を轉じて土... 手の上より河へ飛入んとする處ろを半介疾く追迫り跳り越つて襟頭を無手と掴み引戻し(半... 半)サア蛆虫奴これ迄だイダ往生させて呉る観念しろト罵しりながら敵の短刀攫りて左手... 取直して細首ツツと切落せしが尙憤怒り堪ざりけん其面の皮を引剥て血液淋たる生首を... 櫻の枝に鼻首つ、「ハテ宜妻なト打嗤ひ懸て死骸の懐中より昨日與へ去我証書を探出し

引割すて足を飛して河中へ軀をザンツリ蹴落しなから手足の血斑を推拭ひ袖打拂つて悠... 々々浴場の方へ歸り行しは心地快氣にぞ見へたりける(吉)後談此下(無)切此處より例に... 依り暫時筆を上へ復して土屋一家が難儀に陥たる其事柄の起因を始め前段吾妻橋に於て早... 稲田の吉と半介とが圖らずも出遇たる始終の事實を記さんと吉こと先年早稲田に於て半介... が母を國を挑み却て其身縦横に切れたるが、悪逆強き曲者なりけん斯て後負傷の爲は破傷... 風きて煩たれども同類の補助に依て九死の内は一生存得、苦惱をること半年ばかり遂に全... 身の疵いれ果しかば、彼悦ぶ事大方ならず卒然ばお國を尋ね右の遺恨を報ひんと云よ(次... 回へ讀つてく)

第三十回

幸ひに彼時護國寺前にて駒吉と格闘したる奴等が、朽借さよ引返して小蔭に隠れ容子を聞... くに伴んの女はこれ國なること又今かれを介保して輿に乗連行たるは番場の土屋駒吉なるこ... と並びに彼等が素生の事まで物取取のみなならず其折駒吉が忘れたる例の証據の番傘さ... へ拾ひ取て携へ歸り事の始終を告開せしかば音孫の外打悦こび手下を番場へ遣はして土屋... が家内の爲体くを大小となく探らせたるに半介が勢ひ烈しく容易に手出されしと云ふ注進... にて有しかば無念ながらも月日を過ぎ空しく斯て暮せし處ろ一時手下が走り歸りて土屋の... お國大病は依り家内の混雑云々なりと息も呼あへぬ注進を聞き吉さらば此時なりとて乃は... ち前回に説たる如く手下を引卒れ土屋へ推かけ其弱り目に附込で厳しく強談かけたるのち... 遂に半介が証書を取り一晝夜の猶豫を與へ暫時土屋を立去たれど狐疑ふかき曲者なれば密

明治 俠客 傳

かゝる狗兒を遺して以後の容子を探らせたるは、圖らずも外木親子が尋ね來りて恩義に迫り、身買の一條斯々なりとの趣きを聞て復悦こび然らば、右の由衛門が吉原より歸るを待うけ、其金を横取して先前祝ひの酒を飲み、刺さへ半介より約定通り強求て二重に取んと計謀つ、吾妻橋の袂に匿れて由衛門を待受たるに、然甘くは問屋で御さず悪運爰も尽たりけん、發明ちかき頃又すて待人は來らずして思ひ掛なき半介も遇ひ逢ふ前回の始末に及びしなりとぞ是本傳七の上より事爰に到りし迄の始終の段取なりと云ふ(吉が素性は詳らかならず)然れば又吉田半介は、早稲田の吉に迫られて殊のほか當惑したるが、其夕母のお國は遂に言切れ果たるにぞ半介無量の悲しみ爲たれど、又一層の憤怒を起し是と云も惡黨吉奴が由なき事を云霧りて病人の氣を痛めさせ死を急がせたる次第なれば、彼奴疾ても尙餘りあり若明日の朝來りしとぞ爰に在て待受ては何かの始末あるければ途中に埋伏打て棄て一ツは母の爲と報ひ一ツは家の災害を除き此熱傷を冷すべしと腹の内に分別せしかば、駒吉を小陰に招きて右の所存を耳語つげ且母を納棺の事と其餘の始末を頼み置て彼宗近の一刀を横佩人に知らせず密ひやかに裏口より走出つ、仇の來れる順路なればと吾妻橋の袂に潜みて今かくと待處ろへ圖らずも一人の男が四下の家の路次口より何かゴト／＼呻やきながら立出たる姿を見て若やと思ひ進み寄り見れば幸はひ吉なるもぞ半介は海母の骨か盲龜の浮木を得たるが如く悦こび勇み且憤りて乃はち前回述べたる如く遂に彼を取掛き且餘類をも知らざると思ひ其首を切り面を削りて以て向島の土手へ身し辛やく無念を晴せしなりとぞ是半介が吉を擧たる始終の來歴なりと云ふ(由衛門の金を奪ひし櫻奴の事は尙後の回りに説べし)是より

明治 俠客 傳

先き駒吉は甲斐／＼しく立働らきてお民お大等と力を協せられた國の亡骸を柩に納めて葬式の仕度を整へ、専ら半介が歸るを待しに、真明近く成し頃を以半介は歸り來りて駒吉に由を告げ且始めて民も右の始終を語り聞すにお民の流石女氣の若後難ても有はせぬかと半介は怖れ中分は悦こび手疾く浴衣を取來りて其血染の衣服と更させ惣ての用心脱目なく彼の是の世話を爲て只管今夜の始末を治め辛やく一息つく折から烏の聲と諸どもに夜餘波なく明たりける

第三十一回

時よ半介歎息して徐々母の柩に向ひ吉を擧たる始終の回を涙と共に演述して念佛の時を移したるが暫時して駒吉も向ひ(半)モシ惡黨の餘類どもが吉の殺されたるを知て押掛來たらば、面倒ゆゑ煩らひの無うち母の死骸を一時も疾く埋葬して後を安くし且昨日より見へず成たる由衛門殿親子をも急ぎ葬索とべしと云にぞ駒吉お民も然るべしとて遂に當日の朝未明に儀式高座質素にして用心の爲め駒吉は遠り半介獨り柩を附従ひ香花院へと野むりたるが何か近邊の者これを知りて彼駒形の三吉はじめ日來難義を救はれたる衆方の人々會葬して思はず賑はひたりしと云ふ去程半介は葬儀を果し諸人を勞らひ癒て番場へ歸り來りつ扱是より一室に於て駒吉と民其餘の者等と由衛門親子の事を彼是と云出し種々思案を廻らせども彼等何れへ行たるか露ほども手掛りなきゆへ怪しき事の限りなりとて只管談考するもの、思ひ得る事なかりしが、良ありて民は考(民)私しが思ふ處ろではモシ伯父さんが心配して昨夜の難義を救はふと思ひ、萬一ツもお七をば、芳原へでも賣にゆき右や左

やの相談で歸らない譯では無か是より外は二人、共に見えなくなる云ふ道理はな
いと思ひ升がト云ふ半介横手を拍(半)成ほど其違ひなからふ然らば廊内を一巡して探し
て来やうト云ふあへず立んを爲し吉原に急ぎ行し彼由衛門と七とは始めよりして名問を懸
手疾く仕度を整へつ、吉原に急ぎ行し彼由衛門と七とは始めよりして名問を懸
ひ身賣の一議を半介等へ知らさると約束し且樓主辰之助へも右の情實を言せれば
各樓と打巡りて尋ねたれども遠よ之を探り得ずして徒づらに歸り來り尋ね得がたき由を
話す半介民大等も之を聞いて大ひよ愛ひ切は品川新宿邊かど復向宿へ人を走らせ種々
に手を盡して久し成まで懸索したるが遂に尋ね得ざりしかば各自心痛大方ならねど餘儀
なくも其儘さし掛き月日を過し居たりと云ふ(衆より詰問元復る)爰に又、外木由衛門の
金を奪ひて忽地影を匿したる彼曲者を尋ねるは是乃ち別人ならず例の飛弾の金太なるが
金太先年春渡にて外木親子を殺さんと爲しとさ、聞らずも半介が爲に、千尋の谷へ切落
されしが之も亦た吉の如く悪運強き曲者なりけん落たる時に鰐河の水のうへに受られたる
よぞ、暫時の中こそ沈みたれ幸はひにして身を傷らねば懸て下流より道よりしが右の脚を
亡ないたるゆゑ其苦痛堪がたく可たび仇する氣力なしして同類の家にはれ鬼も角も養生
するうち腕の疵は癒たりけるが斯て後いかなる事より奈なる筋にて出來りしか其間だの事
層詳びらかならねど、彼いつか江戸へ來り暫時惡徒の群に入りて櫻の奇術を學たるが彼不思
議も片腕にて其術に長じたること古今例少なきまで天晴櫻の達者と成り毎日毎夜に市
中を廻り多分の物を攫來りて騙者淫樂志ま、に其日々を送り居り斯て彼夜聞らずも淺

第三十二回

草の馬道にて山衛門とは知らざりしが懷中重き老人を突倒し財布を奪ひ忽地影を匿せし處
る財布の目方尋常ならねば心密かに驚き悦び今戸橋まで逃來りて爰に暫時息を休め後ろを
遙かに見渡せども追來るもの無ししかば、財布の金を取出し之を橋の欄干へ並て一ツく
に算え居たるに折から近所の飼狗が怪しき奴と思ひけん何か後よ密に寄て一聲高く突然に
吠か、られて吃驚仰天ハツと、思ひつ思はずも今積立たる金包を九ツ七ツばらりと河の
中へ落し込み意外の周章これはとばかり打呆れつ、立たる儘に茫然として河面を暫時なが
め居たりと云ふ

悪銭元來身に着す得失畢竟因縁あり焉んぞ不良の兇徒が斯る切なる寶錢を盗み暫時こそ我
物顔に悦びもすれ樂しみもすれ始終これに據て利を得の道理あるべき淺きしひ哉飛彈の
金太は其身年來の惡業も因て不具癡人の身と成ながら尙天罰を思ふ事なく實由衛門親子が
爲よは血汗出る如き難義な金を無造作に奪ひ來り之を今戸橋の欄干へ打のせ且算え且悦こ
びし、樂しみ未だ半ならず忽地犬の一聲よ驚ろかされて思はずも積立たる金包を河の中
へ取落してハツと思へど餘方なきよ尙吠か、る犬を透退け儘かよ遣りし金を納めて尻を高
々と端折ながら右の河原に下立つ、玲暗き水の内を其邊か此邊かと探れども一包をも得
ことなきよぞ此河元より淺くして且引汐の折なるに奈よ爲つると思ひかねて只管あせり求
むる折から忽地後より人ありて「其金は是であらふ欲くば來れト云ふ聲き、金太驚ろき振顧
り眼睫に定めて河霧の間なき彼方を打みやれば四五間も有らんと覺しき蓬船の内に武士わ

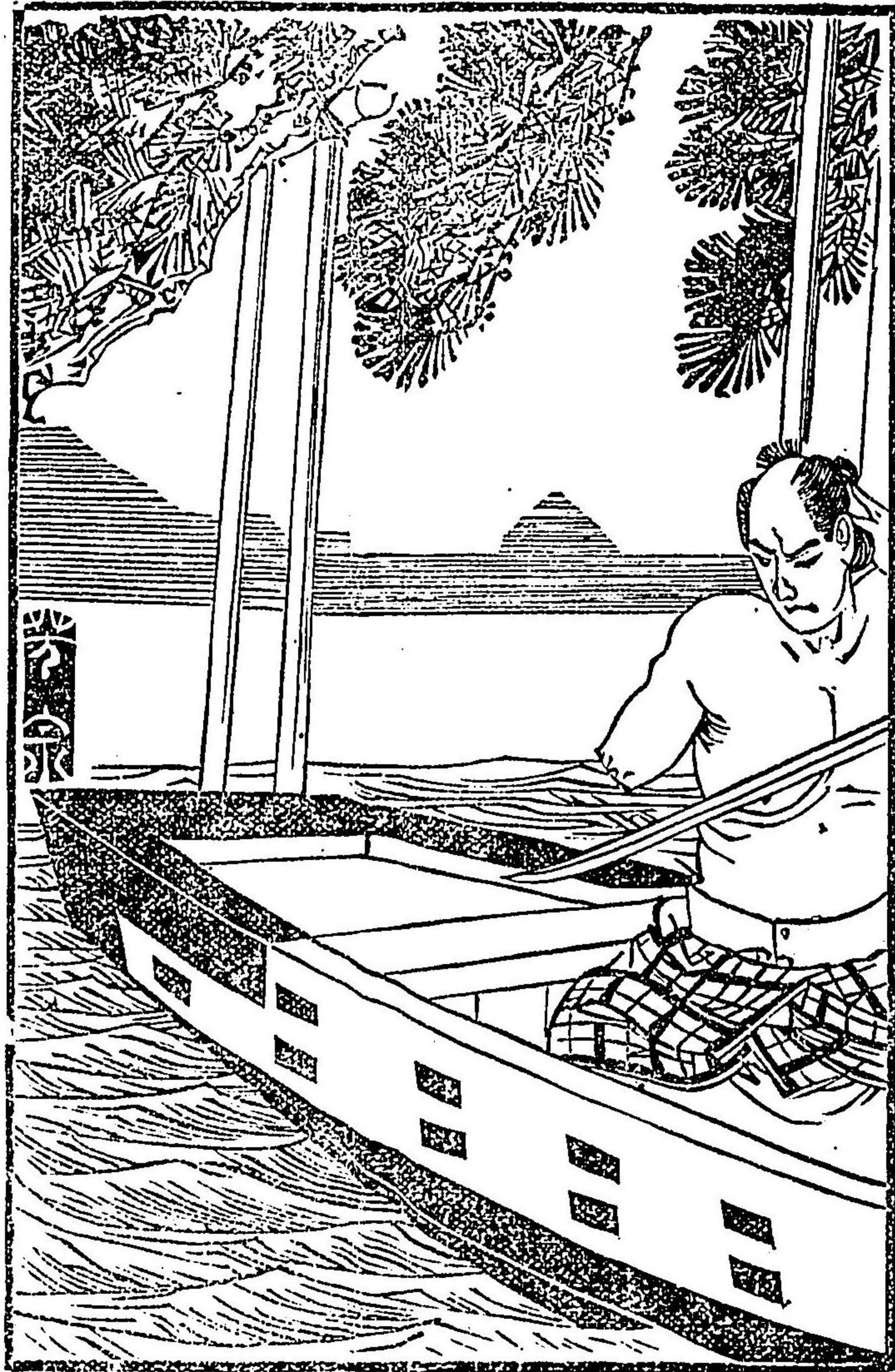
明治 俠客 傳

りて今我落せし金包を拾ひ取り片手は捧げ見せびらかせて佇立み居よど金太再び打驚ろ
き(金)是は何處の旦那様か有がたふひます其金は只今俺が橋の上から落した物です願
お渡し下さい升ト云掛るを彼方は打消(武士)それ元より云々でもなしイザ渡して遣はす
程船まで参れ水は浅いト云れて何やう氣味悪けれ此方も元より然る者なれば氣を屬
して會釋しつ(金)へイ畏まり升た左様ならば御免なせト挨拶をこく一二間水を涉りて
進み寄つ、船へ片手を懸て乗り掛るを件は武士が突然と猿臂を伸し其襟頭を搦み手疾
く船へ引上ながら膝下に組しき動かせず「それ者共船を遣れトの一言の下に遂を跳て現は
れ出たる四五人の荒々しき壯俊も物が物を云を打懸頭船に舳に立別れて突張棹の手練よ
く咄呼と見る間に隅田川へ吐出したる細なし船を棹もわり押もわりて既下流へ航らせつ、
兩國橋へ程ちかき船藏河岸の首尾の松を遁り去んと爲たるとき件人の武士が指揮して松を
松の丁木よ繋がせ此時までも組藉居たりし金太を破と突退て氷に均しき刀刃を引抜き其襟
頭へヒヤリと指つけ(武士)何と下郎驚ろいたか其方今方橋の上より、取落したるアノ金は
盗み物に相違なからふ我は公儀の旗下にて四市平と云ふ者だぞイザ彼金の出所來歴明白に
申し立よ、世の乱を俸はひに近頃悪黨徘徊して御膝下を騒すにより我其筋の内意を察むり
悪徒ばらと捕へんとて一時は船に在り一時は陸に在りて晝夜非常を警しめ居たるが我ある事
を知らずして果して其方橋上より金を落して已から曲事の程を願はしたる冥罰觀面云ひ
あるまいイザ明白に白状しうすし立よト罵しりたる思ひがけなき言語を聞ても敵の氣合と
面色いひと疾く斯よと思ひけん金太は何か心中に黙頭(金)へん甘く言したな化役人の横

明治 俠客 傳

第三十三回

着者がモシか前眞實の、旦那衆で居さつしやるなら、何俺を浴屋へ引揚げ吟味をば爲ねへ
のた俺も飛彈の金太と云て白刀ぐれへに威されるヤワな野郎じや無んだよ生れて此方十年
來抜刀なんざア尻の屑も思つた事のねへ男だ其証據にやア此通り片腕切れた刻印附、先
兎も角も之を見て眞實の話を爲がよ化の皮を脱なせト云つ、スラリと脱肌を見れば奈
にも右の手を腕部かけて切取れし思ひ掛なき妻なるよぞ件人の武士も其餘の者等も是は奈
にと打驚ろき打呆れつ、眞暫時黙然として目成居たりと
扱前回に松中にて飛彈の金太を却かせし彼曲者の履歷を聞に是ぞ元來九州の浪人團市平
(金)と云ふ悪徒にして乃は本傳(三)の中にね民が物語の未演たる土屋徳兵衛を殺せし
者これなりとぞ抑此市平腕力強く心飽まで猛して且奸知に富且武藝あり利さへ亂世に乗じ
近頃手下の悪徒を集て都京遠近の差別なく晝夜徘徊人を殺し財貨を奪ひ亂暴しけるが殊さ
ら去年の伊豆へ渡り下田に於て野武士と共に或渡海船に打乗の松長が薪水を買んと上陸し
たる間に乗じ残れる船子共を切沈めて、其船を奪取り之を江戸へ乗走らせて品川沖に擧ぎ
置二十四五人の手下を養なひ松中を根拠として常に各所へ上陸を豪家を撰んで強盜に押入
り金銀財貨を奪ひ來り恣ひ儘に世と送ること彼歌舞伎物語に顯はしつる筑紫の九衛門と云
る悪徒が如きも斯ありしかと思ふはかり兇暴無殘の舉動して傍若無人忌憚を知らざる殘忍非
道の悪徒なり然れども前々回既度々演たる如く當時幕府の政道亂れて是等の徒を誅す
るよも其手段緩漫なるに予彼等巧みに法網を脱れ跋扈極まりなかりしとぞ是市平が小歴な



り去程に市平は向ふ小船へ打乗つ、屈強の手下と共に本船を離れ、隅田川へ乗入れ、山谷堀より上陸して悪事を働らんと思ひながら、今戸橋の邊にて其船を止め、折から橋の上より切餅包(廿五兩包)の封金を落す者あり、市平疾く之を見て、手下共に指押するに、手下共心得て忽ち船より下つ、河岸を探りて金包を悉く拾ひ取り、船へ歸り上りしと、落し主の金太河岸へ下つて、金を探ぬる有様、市平つらつら透し見れば、尙彼が懐中より、餘金あるべき容子なるに、盗たる金を創としつ彼を、松も乗移らせ、人家離れし、松藏河岸にて白刃を振ひ、強迫し先其人間を試みたるも、彼案外大胆にして之を怖れざるのみならず、其片腕の無を示し、且我を見破て罵り返せし舉動に、市平はどく驚歎し、斯の如き曲者を、手下と成さば、川ひ方にて一廉の用に立べき奴よと、分別して刃を納め、最愉快氣に打笑ひて、(市)驚き入た其方が眼力察しの通り、此方は箇様くの者にして、云々の所業を爲つる水陸の強盗ぞや、頼はくは其方も今日より我手下と成り我を助け共愉快な事を働らき、快樂な月日を送るがよ、思ひの儘に樂みませよと、先は其素性を語り且拾ひたる金を返して、且金太が來歴と金の出所を尋ねしかば、金太は罪を納め入て(金)うれは願つたり、叶つたり、實の處ろ私しも飛彈の高山の生れまして、箇様くな兒狀持且此金は斯々して今夜盗ひ取たるもの、又片腕のない譯は、箇様くな次第なりとて、身の來歴と積る悪事を語り、顔に物語りしかば、市平はすく打喜こび、今日、尙得物はなけれと、千万金にも替がたき、好一個の手下を得たれば、此儘歸りて酒宴を開き、同盟の酒杯を揚んとて、躑躅して、指圖しつ棒を掉せ、楫を押しめて、隅田川を乘離れつ、品川沖の本船へ舟を走らす折しも、あれ東方の天より、明み初て日の出まば、ゆく立昇り、夜は白々と明

たりけり(譯者申す是よりして市平金太を伴ひ、歸りて、手下共を打集て、懇親の酒宴を開き、同盟の酒杯を酌交し、歡樂を盡す件は、尋々しゆべき省きて、記さず、然れば、今日より飛彈の金太は市平が手下となり、専ら悪事を働らさつ、疾むべき所業おふかりしと、云傳へぬ) 第三十四回 爰又由衛門が娘七は、彼月夜日身を賣て、佐野橋の娼妓と成り、源氏名を萬城と呼れたるが、才色ともに尋常ならねば、突出の當日より、評判四方に轟ろきて、其全盛なる比類なけれと、奈なれば、父山衛門、かの夜荷且に別れたるま、只一度の音信もなきゆゑ、其後の始末いかに成しか、夢にさへ知よし、無れと彼日約せし事も、あらば有繋うちつけには、問かねて、或時腹心の新造を遣はし、外ながら土屋一家の安否の程を探らせたるに、其新造かへり來りて、彼家より主従一同、變りたる容子もなく、主人の母、ね國は病死し、悪黨吉は殺されて、一家故なく、暮居るが、只由衛門が親子ながら、彼夜出奔したるま、今に其行方を知らず、是のみ何れも苦心して尋ね、索め居れりと云に、扱は父由衛門は、彼夜ぎり歸らざりしか、モシ老年の夜道と云ひ、殊には大金を所持して居たれば、途中に於て、退剝などに殺されども、爲は爲なんだか、心もどなき事、こそと案じ出ては、罪も隠らず、筆そのこと、半介夫婦へ事の始終を告て、遣り、彼人々の力を借りて、其行方を尋ねんか、イヤ、うれでは、彼夜さり返す、くも約束したる誓を破る譯なれば、其も出来ずと、取つ惜つ思ひかねつ、目を送りしが、世の風説、彼月夜吉原より番場へ掛て、然老人の死體なぞ、い見者たる、無の事に、少しは心を休つ、其日よりして、神に佛と別れし親の無事を祈り、只願はくは、今一度合しめたまへと、所念するのみ、他事なく、日を送りしと、

明治俠客傳

斯りし程に何の歎かて何か當年も過去つ明れば安政五年と成り、三月初旬の二日の夜と
かや葛城の例の通り化粧美事に装飾て菅がきの聲は四下を拂ひ店へ立出んと爲りから
入来りし遊客ありて「葛城をト云ふ名指なるにぞ樓夫かしてまり紹介の座敷へ案内し通例
の挨拶して退ぞき出しが暫時ありて裏草履の音おたやかに右樓夫は先を開かせ進み入る
葛城太夫、大かたらず小からぬ尻を此方へ片膝つきて徐々に遊客と面を合すに何とかがけん
彼も此もハツと驚ろく状況なりしが就中遊客の色を失なひ(遊客)モシ若衆すまねへが云に
云れぬ事有から見立替を爲てへものだト云を打消し葛城が「と云しやるは多無理じやな
ひがモシ金木さん何事も昔しは昔し今は今、時代時節で私しはへ斯云ふ姿も成たものれ厭
でなけりや少さかも多遠慮には及ばぬこと、何にも云す此儘に遊んで行て下さひなト云れ
て此方は何となく仇と情を混交し穩かならぬ胸の内は暫時思案の体なししが忽地思ひ返し
けん身を反せつ、打笑ひ「成はば云は然なるもの何かれ前の心中さへ打和て下さるなら俺ち
やア今さら仔細はねへのさハ珍らしし事有たト云は彼方も笑を含み(葛城)ろんなら作
ぞん(樓夫の名なるべし)宜しくト云すて立て悠々と立出て行く後ろ影を見送る遊客は口を
張き鼻を開きて茫然と意外の事に夢の如く暫時呆れて眺め居たりと

第三十五回

明治俠客傳

りて左野欄樓へ接上り始めて葛城の面を見たるに思ひきや其人は是彼れ七にて在しかば有
繁も昔日の一義もあるゆゑ極りの悪さに若者へ見立替を云出たれと案外至極な葛城が心潤
き言葉を開て辛やく我も打和けつ體て通例の酒宴を設けて樂しむ可笑しく床に入りしが尙葛
城は入来らねば布圍の上は麻べり乍ら髪は熟々考ふるに「彼奴田舎は居た時も随分美人と
思つて居たが況て斯いふ處ろに陥ての装りに粧りぬいて居か今見た處は三一の都にも無類
飛切の美人と成たり、殊更昔日の遺恨を捨て我を一泊せしめた杯とは中々胸の宏ひ事實の
處ろ田舎は居たとき折もあらば強姦してなり、情戀を遂ふと狙つて居たに今夜圖らず斯な
るとは有かたし添ひけなし今にもあれ廻つて来たなら日來の戀情を晴して呉れふシヤが彼
奴も惻愴ものゆゑ遺恨を捨て遊んで行と甘く云たアノ言葉も何いふ手管か萬一ツ己を欺
して斯と云ふ幸段の有ふも圖られずコリヤ横鼻を楚かりて容子を見なけりや險難だト
四下きよる見廻しながらムツクト起て鏡臺の引出を推開つ、花櫛の平打よ「葛城の山
越て来る雁一羽と毛彫にしたる白銀の簪挿を盗み取て其脚を二ツに捻任せ「待てたら宜
く紙入へ密に納めて何氣なく煙草をばく待折から空薫の香馥郁と徐々に入来る葛城が屏
風の中へ進み入て俄然に假装うら馴に知らず顔なる金木を起し(葛城)モシ金木さん一寐
なんしたか、云たい事や聞たい事も多あるのに知らずを切てさ、モシ金木さん灰吹に煙草の
烟が遣つて居よト呼覺されて我ながら陳腐爲方と頭を搔々超上つて歎息つき(金)實は何だ
か極が悪さに特と假睡を爲て居たのサ、遭莫とお七さんマアれ久しひ事でした先刻始めて

過た時は眞に吃驚したせ、何は鬼もあれ何いふ譯で如斯様を知て居なさるか俺も實に此
通りト云つ、右の腕を見せ「アノ時旅の武士に片手をスツパリ切れてしまひ谷庭に墜落た
が尙却が滅しなかつたか危ねへ命を拾つたからモ一〇〇然心を改め今では神山に家を持
て堅氣に暮して爲ました處ろれ前さんの評判が凄らしひ事だから切て然いふ媚妓の顔だけ
でも見て置ふと思つてフテ〜來て見たら思ひ懸ねへ葛城とは昔時馴染のお七さん、己臍
の緒切てから如斯く吃驚ことばねへよ、モシ何いふ因縁で如斯處に居なさるのだ又阿つさ
んは何しなすつたか、同國者だ遠慮なく譯を話して聞かせなせへ及ばずながら、容子に依れ
は力に成てあげやうからト實事偽事打混たる言葉の本末つら〜聞はて葛城か幾度か歎息
しつ、頭を擧し、扱何事を云出るか又何故仇と知りつ、金太を客に取たるか且葛城白
痴も遂に金太へ身を任すか次回に悉しく説續くへし

第三十六回

當下葛城頭を擧て「折角のお言葉でもが私しが身賣の云々ばかりは何方も語されません
し、又屑ならぬ身の上でもが随分身受を爲て遣ふと云て下さるお客も有り強がらぬ前さ
んのね世話も成らずと困りませんから御心配下さい升なト木で花く〜りし扱は有難の金
太も憤然して(金)是れや殿し御挨拶今云た俺の言葉が氣に障つたら勘忍しなせへ、悪
氣で云た事じやアなしト云ふ顔見つめて莞爾笑ひ(葛城)サア然いつたら腹を立ふと特と扱
んで試た譯はコレ金太さん熱思ひな私しも斯いふ勘を爲てから、心も身体も我儘に成腐つ
て仕舞たから地金を出せば右の通りさ、何と呆れましたらう共さからお前さんが命懸で取

溜たお金を出て受出てもト半分云せず此方は目を張り(金)ナニ命懸で取溜たトは嗚呼しな
事を云じやヤねへか憚かり乍ら此金太、不正な金は一文でも躬に着て居た覺えねへサ
ア何故に如斯ことを(葛城)コレサ何だへ大きな聲でれ前さんは其だから水臭くつてイケな
いよ幾等かくして居なすつても私しは疾から聽て居て前さんの今日日の商賣を知ぬいて居ま
す程に匿しても無駄な事さ、ト云のお前の所業を國に居ころ知て居た私しの事ゆゑ無理
もないのさ何でも宜から有つたけお前の心事と此頃の所爲を話して聞かせよ其で然ければ
私しの方でも身賣の事から何から何まで話して聞かせて未始終、れ世話も成ふと思われませ
んは、モシお前は葛城を眞實女房爲る氣なら何も敷も打あけてお話し爲さいよ否ですか
否なら此方も否ですト異に纏んで問かけられ金太も今さら當惑極まりエ、筆をのこす身の
上を語聞せて此女をと思ひかけしが有難は曲者忽地に復思ひ返しイヤ待暫時候なりと容儀
を正して冷笑ひ(金)何を云のか知らないが假令いかは悪意な仲でも、失禮至極な其言葉
モウ、昔日の馴染を捨て通例の遊客と成り疾く遊んで歸ると爲やうサア寝なせへト引袖を
振拂つて後を向き(葛城)私しや寝のは否ですトサ、大層お腹が痛ひホンノ最早みる頃だモ
シお客さまお氣の毒です玉代は只今返し升から、サツ〜と歸つて下さい升ト云すて終す
立起り何ともなく出ゆきたるに曲者金太も詮方なきに齒を切ばかり憤怒れ今既寐も
も寐られず仕度ろこ〜勘定を急ぎ戸外へ立出しが振願つて舌を吐き斯いふ事か有
ふかと思つた故に後日の爲め盗んで來たる此頭捕今見ろ腸冷に倍と思ひ知らせて遣ぞと
獨り諍々唧やき行を格子の間より窺かひ居たる葛城は此体みて平生よりして服づけ置きし

横夫の作藏を小窓に招きて何事か言葉せわしく附るを作藏はやく黙頭て畏まつた云ふ
あへず葛城が新造廿次と共に左右に分れて隠匿れ歸り行ける金太が跡を密びくに限ゆき
つ、廿次は木戸まで止まりしが作藏は尙ほ足疾に何く迄も追行たりける

第三十七回

そも葛城何故あつて昔日の仇と知ながら金太を容れ取たること心得がたき舉動なるが
是は葛城先夜の夢に狼狼の兩獸走り來りて父由衛門を嚙倒したる凶き姿を見たりしかば翌
日文字を知りたる客は夢の情を問し處ろ其客の眉を蹙め、狼と云はふはかみよて其前足極
めて長く狼も亦おほかみよて其前足絶は短かし此故に行ときは狼狼必らず相寄て而る後
よく走るものゆゑ若狼にして狼は寄らず狼にして狼は寄らざれば進退自由を得ることなし因
て兩獸相失なれば周章をること大方ならずと或人より聞たる事あり然れば狼狼兩獸は獸物
の中の不具者なり然れども其方の親父が其狼狼に嚙れたりして吉凶因縁知よしなれば是
は有名卜占者に觀て賞はねば分らずト云ふ、憑み少なき判断に葛城は失望したれを斯て其
儘ありたる處ろ今夜圖らず金太が來りて始めて對面したるとき其右の腕のかかり氣なるを
目疾く見とめて思ひ廻すは彼は先年半介の片手を切れて谷へ落しが扱は其より死も爲で
不具者と成はつて巡りて來りしか疾き奴がと思ひながら此時不圖心づきしは右占形の
判断して若く不具者の此金太が親父を何と云ふ様な夢で有たも知れぬゆゑ暫時此奴を操成
て其器動を見て遣なば萬に一ツも親の上の便宜を得ること有んかと思ひつゝ探りを
入んと思ひたるにぞ扱を去日の仇と知る、向を止めしものなりと云ふ、此事頗る愚に近

第三十八回

強附會の説に似たれを暫時原稿の儘に誌し置ぬ看官笑覽あらまほし、是葛城が金太を
迎へて一旦客の扱かひしたる其情實にて有しと云ふ「又、佐野橋樓の樓夫よてさく藏と
稱る、男は尙年若きのみならず斯る妓樓の被雇人よは珍らしき實直者ゆゑ葛城も平生より
憫を被て憐居たるが此夜金太が爲休の怪しき麻々かかりしかば、葛城は心よ黙頭共歸る
とさ作藏を招き彼が跡を跟ゆきて容子を探り來て吳よと遠たしく頼を聞き作藏心得一議
及ばず彼の番新廿次と共に途を違へて追行つゝ廿次は木戸にて之を見送り作藏は尙ほ隠
隠れに只管跡ト眼行たるが彼途中にて駕に打乗り南方を指て走らせ行よぞ作藏も送れしと
足に任せて追行しが彼は汐溜の橋の邊まで駕を下船に乗り怪しき舟夫と標を把せて御沖へ
と船を向させ暫時の中漕去たるよぞ作藏も詮方なきに此處より急ぎ引返して淺草へ歸り
來り駒形河岸を過んと爲とき際で戀親の仲とみへ彼仕出屋の壯者、三吉が之を見つけ(三)
判イ作をん何へ行のだマア一烟吃て行なト呼止られて振顧り(作)イヤ此間だは久しく來な
いね、兎もあれ大分疲びれた少し休ませて貰ひませうかと云を聞かけ此方はニコニコ(三)
サア、運入て茶でも吃ねへ、何だ大層疲つて居な品川へでも行たのかト打戯ふれて我小
房の座を拂つて誘なひ入れ店の者へ一層添て茶の代りにと差出猪口を作藏は推戴だき先五
六杯飲折から身装よろしき武士の客が深編笠を脱捨ながら奥の一間へ入來りて酒肴を誂へ
つ、獨り手酌に悠々酒杯を揚て居たりしとぞ

駒形の仕出屋魚樂の若者、昔し酒屋の小僧なりし彼三吉は佐野橋の作藏を呼入れて我小房

にて酒を飲せしを勤めて機嫌よく三三尚も寒ひじやねへか、時にお前どこへ行た流石
品川の歸りじや有めへ勘定取か先兎も角、ゆるりと飲て行なせへト大物で献す酒を作藏
は盗く受てグット一息を吹き(作)ナアに品川ところじやなく、又勘定取でもなひ
のサ、今朝はお前不思議な事で附馬でも云やうな變手古な役廻りて沙溜まで行て來たの
さ(三)然ふか其奴ア慘苦勞さまな、シテ何いふ役廻りか面しろろさだ話しなせへなト問れ
て作藏四下を見廻し(作)チト内分な事だけれどお前だから話さうか實は昨夜葛城さんに初
會の遊客が登た處ろ其遊客人は花魁の同國者で其昔しは仇敵同士で在たさふだ、處ろで情
は知らねへが今朝其客が歸るとき花魁が己を呼でアノ客は何へ歸るか跡を跟て見て呉ろと
願まれたで追掛たが客は沙溜の橋の邊で小舟に乗て沖の方へ漕で行て仕舞たから悄然と歸
つて來たのよ、其はさふと奇妙な事よ其客人が國も居たとき或武者修業と喧嘩して右の
手を切られたとかで手が一本の異り物サ随分姿が好なひせ、何しろ己が見た處じや喰へね
へ奴らしひが惜ひ事にや今朝の騒ぎで情を聞てる間がなく粟ア食て出かけたから皆目理
屈が別らねへト云かけて打笑ふを三吉は熱く聞き眉を蹙めて者が居居たるが何か心よ打
無頭(三)然と思ひ出した然なら若や其客は向ふ河岸の土屋の旦那も切れたとか云ふ野
郎であらふ、作どん其奴の國元は飛彈だとは云なかつたか又其野郎も同國生れの、葛城さ
んは何いふ身分だ己も疾から旦那(半介を云)に頼まれ或娘と其親とを探しぬひて居んだが
今の談話の塩梅じやア葛城さんの身分と實名を、事明細に聞たひが前ころは知らひか
ト問れて此方は目を睨張(作)それやア妙不可思議りだ、然よ太夫(葛城を云)の生國は備か飛

彈の高山で名はかき云たつけが何いふ譯だか人が聞ても、必らず私しの國處と實名と
を云なと云て不斷かたく禁られてるが、ト云ふ言葉いまだ了らず三吉はたと横手を拍ち
(三)それくうれし遊へね(其七ツ)さんを探すと是くの騒動したか未だ皆暮れ
ねへので尋ね飽んで居た處ろだヤノ有がてへ辛やく分つた、作どん一緒に來て呉んねへ
向ふの番場河岸に尋ねてゐる旦那が居のだ些ども疾く知らせてへ、サア一緒に來て呉なせ
へト切り急立意外の騒も驚ろさ立て、そんなら何しろ行へしト身装繕ろひ渡た
しく既や走出す三吉の跡を尋ふて走り行たる時しもあれはより先、彼與坐敷酒飲居たり
し武士の客が窓を隔て、右の話しの轉末を臆ろげながら聞取けん是も何やら心に點頭急
がはしく勘定すませて、深網笠に面を匿し右三吉と作藏の跡を跟つ、足疾よ番場の方へと
走ゆきたるが容子ありげに見へたりけり

第三十九回

去程よ三吉は作藏を伴ひて番場河岸へ走來り土屋半介等一家に向ひて作藏が話柄の子細
を云々と物語り(三)俺が思ふ處ろては其葛城と云ふ人こそ豫てお尋なされまをるお七どの
に違ひなく又片腕なしと云ふ其客人は是れまでも度々お談話を聞きました、飛彈の金太に相
違なからう其故の葛城さんか此作藏に頼むとき同國者だぞうしたよし兎もあれ旦那(半介
を云)がお出かけ成されて其葛城を尋ねましたら忽ち分るでんひませうが奈が思ひ成
され升かト息を切て演るを聞き半介も駒吉もお民お大その餘の者等も手の舞ひ足の踏をこ
ろを知らず、娘と母と二人は、は尚ほ作藏に向ひて右葛城が容貌年齢、又身賣の

日の形状などをも悉く問極むるに備へて七に相違なきにぞは彼れ吾爲に身を沈めたるものなる歟殊勝なり氣の毒なりと思はず感涙を振落せしが去りても由衛門が奈なれば七を賣て其儘影を隠しつらん怪しき事の際りなり斯れば万一か七が身賣も我爲には非ずし

と徘徊いたして尋ねたれと探し當らず當りし御邊が家まで尋ね見んと思ひつきて立寄たるのみ毛頭迂参の者にあらす今は既や時刻も後れた急ぎしめされト云捨て半介に把れし袖を振拂ひ廻たし氣に走り去を半介遙かに見送りながら心中も黙頭打笑ひ駒吉に注目して跡に心を注させつ袖うち拂つて悠々と北の方へぞ進み行ける

して此家へ来りし心根こそ昔日の恩を返すと云ふ、其口實は然ことなれど、アノ人の爲なら
ば兎の毛の先も置く露をどの、恩義を受し事なくとも、此身は愚か命さへ惜ふはあらじと
思ひ初し、其心根の底ふかき迷ひの雲は古郷に相見し時、今日までも晴れ間ぞあらぬ女子
の一念、何かは一度夢よなり現よなりと此念の万分の一も彼人よ知られ知らせ斯々と話
して欲ひと朝暮も思ひ戀れし折柄なれば、今半介が来りし姿を障子の藁より掻間みて懐し
さと嬉しさに耻かはし、さも打忘れ周章走出で袂を引とめ(高城)ヲヤ半さん何でござん引
附も馬鹿らしひサア、此方へムんせト云ふ言葉さへハチロ、聲も引立てられて半介も傍の
手前に點頭のみ物をも云はず連られて房の内へ進み入る、新造の廿次が心得て通例の換
撥とて、既や設けある酒肴を器用に列ね饗應せしが、暫時もあらず氣を利せ事に托へて外
し行を高城は見遣りながら堪へ、胸の中に包み難たる血の涙の男の膝に振落し、絶り着
つ、いはしむつ物さへいはで長暫時く堪ぬばかりに泣伏たるに、有繫は猛き半介も感さめ
かねて腕を組み其心腹を推察りつ我にもあらず目を展た、(半)コレハ七や、其歎きは尤
どもが何いふ譯で此苦界に身を沈めたか仔細を話しな大方は斯であらふと察した事もあ
るなれば、只推量にして其意を得たし、詳細に話しを爲よ泣て居ては始まらずト背を掻
られて柔し氣も問かけられては、最と尙胸も張さく悲さよ高城いよ、泣伏したるのみ物を
云んと幾度か顔さし上れを返かねて、情なき血涙溢れ落せぐり上つ、齒を切て復さめ、
と泣伏せしが、辛やく思ひ返しけん振か、りたる鬚の毛を搔揚ながら顔を揚げ目を推拭ひ
て半介の面をシミ、打みやり(後の回(前續))

第四十一回

本傳を讀二人の女中、ナニ、前回の讀續きた、エト前回の讀終は何と云ふ所だッけ、
人、サヤ覺えが不宜ねへ、前回の終はアノ夫なにサ、振か、りたる鬚の毛を搔揚ながら顔
を擧げ目を推拭ひて半介の面をシミ、打みやり、「一人」成程、兩だつた、然では本回
は葛城の、言葉書と成とろだねへ、サア跡を讀で聞せ、「一人」ア、イ、讀から黙つてお
開よ、其か不辨は尤もさ、全体私しが身賣の事は何いふ事が有ましても貴公は勿論
民さんにも、必らず云なよ云とま、いと堅く親父と約束して然から笑へ参つた事ゆゑ自然
と知れたら格別、さもない以上は何あつても私の口から貴公方へ決て知らせやとまい
と存じて居たに作藏が不圖した事から口を止らせ如斯處ろでムサ、とこれ目に懸つたお
かしさ、シタが斯なる上からはお慮しやすも無益な事ゆゑ、殘らずお談話やませんがト云
つ、再び目を拭ひ始めをゆせば、簡様、及ばずながら貴公の御難をお救ひす心にて而
から以來かうかうして、切果も角も昨今まで勤を致して居ました處ろ親父は其ぎり行方が知
れず何ぞた事と朝夕案じ暮して居た故か或晩かう、云やうな不思議な夢を見ましたの
で尙更苦勞に爲て居た矢先へ、アノ飛彈の金太奴が圓らす私を買いに参り顔色變て驚き升た
が其時彼奴の身体を見るに片腕のない不具者ゆゑ右の夢に思ひ占せ然から斯々云かけて釣
て見やうと思つた處ろ先も然る者うつかり乗すト云かけて昨夜の始末の一五一十を委しく
語り其より續て今日と成り事の爰に及び仔細と又先のほど作藏が歸り來つて云々いひし
と金太が歸りし始終の休まで餘さず漏さず語り了り、再び言葉を元に復して「サア此通り

明治俠客傳

な始末でせから親父の何して終ました歎、又私しが身賣の金も少しばかりの役にも立す如
斯悔の事はなく悲しひ事はムいませんよ、トさすしても後の祭、尙さら役に立せせんか
ら、如斯事は何でも宜が只残念なは身賣の金が、貴公のれ身の爲にも成ず、何の用にも
立すして分らなく成て終つたゆゑ、仮令斯いふ情ですとね話してはしめて証據の無きこと
すから、貴公の爲も身を賣たか外の仔細で斯なつたか其處がお分り成さるまひと思へば
に先年より願ぞどうぞと戀ひ追ひ只た一の願ひさへ慥はぬ事かど存じ升と其はつかりが情
なく悲しく辛く悔しふんす、ア、及はぬこと及はぬ事と是までも幾度か自分で心を取直
し諦めては見ましたもの、ト、云さして膝に取つき跡は何やら顔を隠し口籠ながら二言三
言、口説言葉は聞えぬを始めて聞たる長物語と今復痴情の容子とに之を悟り彼を思ひ半介
は思はず知らず大息を吹き手を組つ、或ひは歎き或ひは不審り又困じたる顔色なり去が足
より先き隣座敷に何登りしか先のほど彼半介は馬習られたる深編笠の武士が復紙戸に身
を寄て黙々ながら此方の談話を概略聞たる折しもあれ、その後より窺がひ寄し、配方婦
妓が戯ふれに走り宛つて両目を掩し「何さす性悪が人の密議に耳を立てサ、羨やましひ
かへ此人よト小突立られ此方は吃驚(武士)是さく何を爲のだコレ戯けるな止よト打
罵むる、聲さす半介葛城聞耳立て、目で知らせつ、口を閉、暫時黙して居たりしとぞ

第四十二回

明治俠客傳

閉て暫時容子を窺がひ居うち彼等連りまサ、メキツ、何れへか出行たるにぞ此時半介と
密めて歎息しながら和らかに(半)お民も俺も彼此ぎりれ前等親子が見へなく成つたで
の如斯事か或とも伯父貴(由衛門を云)が歸つて来ぬゆゑ外の仔細で有ふか杯と質以て今日
まで心配しぬりて居た事よ、然ど其何でも宜が只不審なは伯父貴の上だで、ハ、四百兩
を失なひ面目なさに進退谷まり身を匿したに相違ない、然しながら十九や廿の無分別なる
者ど違ひ事に動せぬ老人なれば其究厄の爲め精心狂ひて、枉死を遂る杯と云ふ大人氣なき
舉動は千萬あらじと思ふ程に其等は心配するま及ばず、何か親子再會するやう骨を折て遣
からして何事も目を開て時の來のを俟がよひ、又其方が身の上も折しての爲に了簡、ちか
い中に何とてかして受出て遣はると些しの間辛抱しなせへ返す、己の爲に遙くと
から出来て如斯苦勞を爲せるとは不便も憫れども云ふ限なき煙り合せ、勘忍しなよと感
さぬられて葛城は身も浮ばかり嬉し涙の快を絞り(葛城)うの一言の言葉で云に云はれぬ
胸の苦も消々と晴ました、私しの身体は此ま、居たどて五年七年十年でも更く厭ひは致
しませんが、願ふ此うへお情願親父を尋ねて下さいませト云かけて又顔を背むけ、あつ
かましひ云ひ條で假令今晩一夜之共泊つて行て下さいませんか後生ですよト云もあへ
ず波奈志路美つ、襟元より報らむ目元に涙を含み膝すり寄て引入る、屏風の蔭に半介は幾
度となく歎息し斯まで我を戀慕するか、ハ、浅ましき事かなと思へど有警情後に追られ
ては山を抜く力も麻つ我知らず茲一夜を明したりとぞ、實に怪しき縁しと謂べし」時に

最前次の間にて此方の談話を聞居たりし彼武士は始終の容子を驚くりと窺ひし何か心
中に黙頭つゝ殺氣を含みし兇相にて、手疾く帯をひなほし「イヤ一打に云ながら思はず
刀を把んでして忽ち心に心づき、ドッコイ刀は主客で在たハテ一應では越すまひ然ら一
且立歸り準備を整のへ存分に撃つて呉れんと啣やきく密ひやかま堪忍して既や深そめ
たる夜を込つ、忽地戸外へ出るが否や足に任せて一心不乱、行路人へ突當り突倒せども孫
鹿の山みね獵夫が響へに濡れず回顧もせず一散に何處にもなく走り去た。元來此武士何
者なるか是乃ち別人ならず又彼悪漢團市なるが彼れ先年番場にて土徳を殺したるのち
今は年月を疊ねたれども有案に始終心に懸りて折々は本所最寄を徘徊しつゝ、土屋一家の容
子を窺ひ居たる處ろ昨日圓らず魚樂にて三吉と作造とが談彈の始終を立聞して我手下金
太が事を二言三言耳にせしかば尙彼等が舉動を見とて大胆にも仇せし家の土屋が門邊へ行
立つゝ家内の始末を窺ひ居たるを半介に見答られ思ひの儘に罵しられしにぞ兇暴の本心
遺恨に堪ず遂に半介が跡を付て吉原まで密ひ行き隙を捕つて一撃に之を撃んと狙いたれど
も遂に其隙を得ざるのみか妓樓の悲しさ全刀を預け在れば不便と堪ず因て俄と思案を變じ
一旦此家を立出つゝ急ぎ歸り去たり

第四十三回

去程に團市平は、韋駄天の如く疾風の如く、吉原より走り歸りて例の汐留の小舟に打乗り
本船へ歸るが否や先は飛彈の金太を呼出し「尙手前まは云はなんだが我先年云々にて本所
の番場河岸土屋徳兵衛と云もの存在を、鎗先に掛て殺した事あり然るよ今日圓らずも箇

樓くナ事に依て今の主人半介が姓名、并びに斯々の話しに渡りて手前が昨夜遊びに行た
る吉原の娼妓葛城が身のうへと且談話の盪梅で手前の片手を切た奴も右半介の素かと思
へる、其邊の始終順末さへ悉とく聞て来たが何と手前其野郎に覺わが有か何な奴だ、半
介と云ふ野郎は年の頃は二十三其而格は斯々ト息を切て問かけるを金太聞かけて大いに
驚ろき、其奴ア奇妙奇轉列く俺ちが腕を切れた時の武者修行の武士は前幾の二才で在た
が今の話しは捕梅では其野郎に和違なし、處ろで親方頼みがある願を俺ちに加勢して其野
郎を撃せて下せへ一生涯の不具者に、爲れた遺恨を晴すのは今此時ト云せも果す市平忽
地両眼を見はり假令手前の頼みはねへでも、實は先刻ア野郎が己を捕へて盗人だと散々
に云したから其返報を爲すまは置れぬ幸はハナ事ア野郎、今夜は廊内泊つて居ゆゑ何
ども云はず今つから出かけて行て撃て殺やう、ソレ野郎ども準備をしる急げと急立た
る、用意束の間と整のひしかば市平更に指圖して兩三人を船に遣し其餘の手下金太を始め
十四五人の人数を卒ひて残らず小舟に取乗つ、忽地に陸上して番場を指て走り行くと、
斯る事は夢にも知らぬ民駒吉れ大等は宵の談しの容子を聞んと泊りに來りし三吉諸と
も葛城が噂に夜を深して、半介が歸り來るを今かくと待てころへ家の後ら俄然に騒立、
衆多の人の足音して火事だ火事だと云ふ聲するにぞ駒吉三吉おどろき立て裏口の戸を推開
けば火を放られたる物と見ゆ物も庇も一面に猛火炎々と凄まじく折から北風烈しければ
瞬たく陣陣驚きあがりし、事の騒ぎは是のみならず誰とは知らず衆多の者ども火烟の中より

明治俠客傳

現はれ出づ。咄と叫んで前後の雨戸を打破り、勢はひ烈しく乱入して紙戸障子の嫌ひな
く打毀しつゝ、荒れ廻り果は無黨三人が逃て驚ろされ民を捕へて輕々と引摺ぎ何處ともな
く進行たるにぞ、駒吉大ひは驚ろき怒りて承塵に掛たる鴛口を搔取あへず前後より撃て驚
りし敵に當り一生懸命滅多うち、大童と成て闘かへとも衆寡の勢はひ敵に難さに一旦この
場を脱んと思ひ敵の胸骨打碎きて二人三人打殺し「奈も爲て姉のれ民を、取返さんと戸
外へ出るとき埋伏けたる市平が邪見の刃より後より襲來がけに切倒されて慄れむべし駒吉は
伏たる儘に驚を振へど大事の深手は働らき得ずして遂に止命を刺貫され遺恨を合で息絶た
りぞぞ最惜むべき事なりけり

第四十四回

葛城が最迫て、口説たて泣立たる痴情の緯はらひ難てや有聲強氣の半介も今更脱る、途な
きばかりか、斯幕はれては却く愛情といひ可あらで屏風の内へ進み入つ、春の狭霧
の濃やかに轉一睡の夢を結びて今既や熟睡前後を忘れし、折しもあれ表の引戸を割るはか
りに打叩きて彼魚菜の三吉が遠たいしく入來りしかば、半介ガバと跳起つ、急がはしく之
を迎ひ其爲体くを打みやるは彼喧嘩でも爲たりと見へて、髪は奈し衣服を破られ手足は血
液の熱たるよぞ心もどなく胸うち騒ぎ其仔細を尋ねる程に三吉は葛城が心利せて汲で出す
水は咽喉を濕ほしつゝ、息呼あへず後を見顧り「親方なんも知りませんアレ」シャシボ
ン打つける、彼の半鐘も盤木の音もお前さんの家の火事、イアなか、其はかりか其火を
放た亂暴者が斯々いふ騒ぎを演出し駒吉さんは殺されてお妻さんも連れてかれた、イヤモ

明治俠客傳

實に大騒動、何でも對手は浪士者です、俺ちやアせよか此事を疾く知らせやうとて宙
を飛で、半分開す半介忽ち狂氣の如く立ち起りさ連子窓をハツと開いて打見やるに果し
て番場の方に當り火炎光々として天を燒ける意外の事の爲体くは信と眺めて兩眼を釣あげ
「お民が敵に捕へられたり復取返すべき手段も有ふが駒吉を撃せたり返すんも残念だつ
た奴令く敵は鬼でも蛇でも引捕へて殺し彼が遺恨を晴させくれんト云かけて既後談を
開す齒を切み髪を逆立つ、手疾く準備を盤のへながら「三公まこと御苦勞だつた徐々休
んで後から來なせへ葛城さらばト云捨つ、樓室に預けし宗近の一刀把て捕より疾く翻うち
端折跳足の儘にて閃りと戸外へ飛出つ、十歩を百歩の勢ひ烈しく既大門を後より爲て日本城
を射矢の如く驚然と走來るを是より先功を食ばり吾一個して撃止んと番場の群を脱出て堤
の下に埋伏したる彼惡漢飛彈の金太が進み來りし半介を自疾く認め我物得たりと二歩三歩
やり進はせて左手ながら腰刀を抜飲めつ、半介の肩先めかけて後より聲をも掛すハツと
切る刃の光に先立て半介疾く身を聞き遠退はせて殘月の隈なき影に信と見やり「ハツ珍ら
しや飛彈の金太、汝れは就ては種々の尋ねたき事もあり細を受よト呼はるを耳にも掛ぬ不
敵の本性冷笑つて身を掃へ（金太）我でも食へ何の爲に汝らが細に掛らふか忘れぬ爲め三年
も此片腕を切れた代り今日は汝が首を切る、無宿野郎奴覺悟しろト云ふ一言を聞かぬ
し此方は疾く氣を配り扱は此奴等我留守宅へ焼打爲たる同類なるへし然らば彌く死し難
しと思ひよければ復打刃を引外し道邊はせ閉つ開きつ眞暫明く充分敵を疲らせて陰謀
ハツと蹴に金太は堪らず二三間、ツンノメリと倒る、處ろを半介得たりと飛蒐つて番

中を焚かど隠みながら敵のめたる三尺帯を手疾ひきと片腕を後へ廻して頼真輝の三へき
りく縛しめつ、引起さんと爲る折から遙か衆多の人聲して團市平が手下の者ども砂煙
りを蹴立ながら此方を指て一散に宙を飛び團をわけ半介めかけて向ひ来りし後の物語いか
にぞや尙次回にて説續はたさん

第四十五回

半介は團らすも日本堤の邊に於て味方の多勢を憑にして胆太くも打向ひし飛弾の金太を生
捕つ引立んとせし折しもあれ團市平が手下の者ども番場の家を焼打して勢ひに乗じ半介を
打殺さんと寄来れる砂煙りと團の聲とを聞つ、見つ、ハッとは爲され是畢竟われも仇を
る彼三言り話の奴等が打寄来りし者なるべしト疾く心は點頭しかバ縛しめられても言々ど
又罵しり狂ひ廻れる、金太を小脇に横込つ、土手を下りて裏茶屋の階次へ入り手拭握り
て生捕の口に狼嚙を合せ、寄来し奴等へ打向はんと手疾く準備を整へたるが、時は喧嘩
の聲俄然に起りて堤のうへ騒がしく踏ならす足響うち合ふ鏗響、手に把る如く開のしかば
半介信と耳を立て扱は彼奴等同士打しつるか容子を見んと傍はらの井戸の柱へ生捕を隠し
く縛しめ廻を越て土手の此方打登り其爲体くを透し見るよ右喧嘩の聲と云は是乃はち他
の事なら衆多の奥力同心等が事の騒ぎに手當ありしか八方より推取團の行向來りし曲者
を此處追つめ彼處に追つめ之を生捕んとして動揺め立たる事の騒ぎ有りしか半介は
打笑ひ然らば己も手傳て曲者を手取に爲し圓言して土手際には隠かけて跳り出で大手を開
き大音あげ「番場の土徳、旦那衆へ（番時忠て奥力等を旦那衆と通稱す）ふ手傳ひ致さん

と云も終らず驚愕して逸んと騒ぐ曲者共を腕力に任せて撲倒し打立て蹴倒し踏躐りて
く間よ五人七人七人球の如く生捕たるよぞ殘る奴等は事慣たる同心もが十手くらひて
と縛しめられ争闘やうやく平らぎしかば同心等は半介が比類なき働らきを賞し且此奴等は
今が先き其方の宅を焼打したる曲者にて有ならば其方の疾く立歸つて宅の始末を
町草を挨拶し果て尋餘事は後日に到り宜しく沙汰を致すべしと云傳え賊を率立て一先土
地の番屋を指て皆徐々と引揚ゆくを半介は唯々どばかり敬禮して之を見送り然にても今
奴等が巨魁とも覺しき者は一個として見へざりしが其奴等逃亡たるか兎もわれ金太を
糾さは萬事分明なるべしと腹の中と思ひ決めて、復行立て何事か暫時思案の体なりしが然
だくと心中は點頭、元の路次口へ入来りて縛しめ置たる金太が傍りへツカ／＼と通み寄
よぞ金太は今こそ殺さるべしと思ひ決して両眼を見はり身を標はせつ恨し氣は疾視面を半
介は熱く打見やりしが兩眼は涙を浮めて歎息しつ、後へ廻り先其轡を取除き又縛しめ
たる三尺とて不具を胸はり衣服の前を合せやり帯をひかせ手拭把て身の中の塵ほこり
を拂つて道なと思ひも寄らぬ介抱に是は何だぞ驚ろき呆れし金太は未だ其意を得ざれば潮
氣味わるさに悪戯子が、衣を汚して何とも云はれず衣更させらる、母の心中る潮り難て憶
面つくりし如くなる手持無沙汰な顔色しつ、只茫然として居たりけるを半介は左もこそあ
らんと苦笑ひしに先立立ち「金太なにを標へるのだ其邊で一抔やらかさふサア來なせへと
手把つ、無理ひき立て田町の方へと、進み行たる時しもあれ春の夜すでに朝はなれてサ
ボロくと立昇る日影はばゆき頃とぞ成ける

鼠究まれば猫を噛み、鳥究まれば獵夫を啄く、藁なき匹夫匹婦と雖も確く決心したる時は容易に動かさず況んや飛弾の金太が如き兇暴無類の悪漢が死を決して悪強せば容易く我意に随かして事實を吐せしと思惟したるが半介は忽然と其扱ひを一變して之を顧はるること一方ならず彼が衣服の世話までやきて聽て之を誘なひつゝ一料理店へ打登り同辭するを強つけて先十二分飲食させ昨夜の事い何とも云すに心よく響應せしかば金太は始終夢の如く針の筵席に座せる如く飲ども酔す食へども味なく、只ムザムザとして居たりしが其あつて堪えかねけん四下を見廻し聲を密め何だか口を開すにも面目ねへ事ですがアレは悪事を働らひたに何だつて親方は俺ちを如斯く遇て下さる實は取れる一命なら少しも疾く殺して下せへ斯して待たされるだけ却つて辛うムへやせと思ひ入て云出るを半介聞つ、歎息し「馬鹿な事を云まひぞ元よりれ主を殺す氣なら何で斯して勵はらふ、然しながら疑がひ時すば之を見ろよト云かけて刀を引よせ小柄を抜どり丁々ハッハッ金打しつ、「己も男だ此通り刀は腰つてお主を殺さす、就てはお主己の爲め昨夜の騒ぎの起因は勿論アノ曲者等が發頭人の姓名來歸始終の事まで包ます己は話してくれぬか己も懲じひ時今では親方とか馬方とか些とは人に俠客と立られ何よか面を買て居ながら亂暴者に家を焼かれ女房を盜まれ阿弟まで殺されて阿容くど斯しては居られぬわけ、因て昨夜お主に聞はず直さま家へ飛で歸り其曲者を殺やうと思ふ處ろへ役人共が、遣て來て彼等を召捕り引立て行たかには既や地獄踏だ處ろが喧嘩過ての棒干木切、後の祭と思つたから斯様々ど爲て居る譯

よ、處ろで今も云ふ通り俠客と稱れる此己が散々な目よ遇ながら自分では復讐されを、役人共の手を籍て辛やく彼奴等を殺たなんぞと世間の奴に云はれては此上の心外ゆゑ愛で主に頼むのだが何ぞれ主己が爲に右の話を爲て呉ねへか然すれば己一個で幾百人の曲者でも片々端から踏殺し遺恨を晴し世間へも面塗られた泥を拭き留飲を治める心だ尤も先刻の役人共に事の仔細を糺して貰へば、分るめへ事でも無が然れでは事が面倒で且永びくに違へねへから夫でお主は頼むのだ、ト云の夕夜云た、お主が言葉入己を指し無宿と云れたからはお主も己の家を焼き無宿に爲た同類どり此時疾く悟つたゆゑ乃はお主に尋ねるのだ何でも己の思ふには其曲者の發頭人はお主の前だがお主より最とメソと沖を越た、兇漢に違へねへと大概見込を附て居から尋更お主にや遺恨はなし又ソノ時の機にもしる己を一生不具よ爲た、其仇に廻り逢ば誰しも厭つちや居られぬ譯ゆみ先刻お主が己に向ひ刀物三味した事も己や尤もだと思つて居から其邊は此方で氣の毒など、思ひこそすれ中を以て己の方で露いさか遺恨と思ふ道理もないから何も敷も今までの云々はさらりと捨て昨夜の始末の一五一十を疾く話して貰ひてへ金太頼ト懇切に斯の如く事を分て且宥恕且頼みし始終を聞て有樂の金太も身の毛たつまで感じたるが不覺に涙を拭ひながら大息呼て暫良時く黙然として考へ居たりと

虎狼に均しき金太が如きも半介が事を分ての願の始終を聞取りつ又懇切なる扱かひには有難改心したりけん且感且恥入り且此時熱くと思ひ廻せば空飾ろしき、身の罪咎の今更

は海で復らぬ... 親方何とも面目ねへ何ぞ勘忍して下せへ... かり働ひて善根の善の字も知らねへ程の俺らだが...

所詮生存居た處が晩かれ早かれ召捕れて三尺高木の上へ登らよやならぬ... 半介つら... 呉たぞ其で萬端明瞭した然らばお主へ已も亦た話聞せる仔細か有がお民の事が案じられ...

第四十八

安危存亡いかにと思ひし妻のお民が...

明治俠客傳

ギマギ急で歸つて參つたので、す然して家は、何しよしたか、駒やお大も無事です、かト問れて、半介當惑したれ、何事も退き、ひて後、徐々歸らんものを、「ナニさ皆な無事だから、兎もあれ早く歸らふト云かけて、不圖心つき金太は奈に、見かへるに、四下より影もなし、ハア何れへ行たるか、或は彼方此方を見廻せども、絶て其行方を知らず、扱は彼爰に至つて、再び變心逃亡したるか、或は民面を合せ、面目なき事と思ひ、特と影を匿したるか、何れにもせよ、俟よ及ばず、イザ行べしと決心して、懸てお民を辻籠に打乗せ、我は是より引をいつ、心のこれを止がたさど番場を指して、歸り行しを、最前より物の蔭に身を匿して、窺がひ居たるか、金太は、惘然あらはれ出で、ア、此處まで、ハ來もの、今アノ人が、遇つた女は、昨夜正しく同類の者等が引摺つて連て行た半介殿の女房の、民をの、進ひなしと早く考ふ、就て見れば、又今更面目なき居て、懸れずして、影を匿して二人を見送つたが、ト云つ、思はず、大息つき、爰に再び手を組る生得の心の月に、越方を一々考ふれば、我は、呆る、既往の悪業指屈か、み盡されぬ悪事は、何れ輕からぬと探中て、淺まきは、何ぞや、淺草馬通にて、或老人の大金を、擄取し、事と昨夜の事なり、右老人は何處の誰か、元より認めらぬ者ながら、其時刻と云ひ、處ろと云ひ、且は彼が衣服を、思ふに、相應からぬ大金を所持して居たりし事と云ひ、萬に一ツも吉原などへ、娘か骨肉の女子を賣り、其身の代の金を以て、歸り來りしものなりしか、斯見當を、着て見れば、一昨日の、曉葛城が異よからんで、謎々トアノ女が、アノ云ふ處ろに身を沈めて居た事と云ひ、今更驚くど考がへる、萬一や彼四百兩は、其邊の金で、無つたか、何ちよしても、遠からず取れる一命の、ある中

明治俠客傳

よアノ女が、身賣の仔細を、聞かして、みて、然らば、切て、其邊の罪を、償なひ、詫見も、爲すば、ならず、其次は、昨夜、ぎり、別れて、仕舞、市平を、尋ね、出して、撃て、殺め、半介殿夫婦へ、對し、今度の、悪事を、償なひ、置其、ラへ、公儀へ、自首、出て、刑場の、露と、消る、身の、罪業の、勘定、立ん、然だ、と、腹の中、に、忍地、思案を、定め、つ、手、疾く、腰の、手拭の、両端、把て、パツたり、と、打、開きたる、布音も、世に、謂首を、切る音と、思へば、更急がる、善し、歸心は、矢よりも、堪らず、煩被りして、高細の、河岸の、小舟を、雇ひ、ながら、本船へ、乗つて、留守居の、者へ、は、即造の、辭柄を、以て、賦ひ、さつ、市平の、蓄財金を、思ふ儘、揺摺り、待せ、置たる、舟に、乗り、元の、岸より、上るが、否や、是も、亦、籠を、飛せて、吉原へ、と、走らせつ、處ろの、者に、金を、握らせ、葛城が、身賣の、始末を、詳細に、聞取、玄に、果して、思ふ、處ろに、違はず、前回、より、の、一、五、一、十、を、悉く、と、く、知り、得しかば、金太も、今さら、堪り、かね、けん、慚愧、分よ、し、な、さ、ば、かり、只管、後悔、脛を、踏みて、懸て、響の、響に、別れ、つ、何か、心中、思案、たら、く、田町の方へ、と、歸り、行し、と

第四十九回
甲話、休憩、葛城の、彼、夜俄かの、騒動、よて、遽た、しく、半介に、別れ、居たり、立たり、氣を、苦たるが、斯て、有べきに、あらざれば、彼、若者、作藏に、頼みて、半介一家の、存亡、安危を、探らせん、と、て、出し、遣し、に、懸て、作藏、歸り、來りて、前々、回の、事の、始末を、悉く、語り、たるの、ち、更な、言葉、を、更た、ため、て、一、然い、ふ、譯で、番場、の、最寄、は、太ひ、願き、で、親方、半介を、云、も、お、妻さん、も、行方、知れ、ず、實にか、氣の、毒な、事、で、有、ま、す、就て、又、聞、ま、した、は、今、朝、白々、明の、ころ、日本、堤で、兎、漢、共が、役人、衆、よ、追、詰、られ、十、人、許り、捕、られ、た、と、の、事、ば、ら、噂、を、致し、升、ゆ、え、若、や、右の、兎、漢、は、親方、の家、を、燒、ま、した、其、兎、徒、で、有

ふかう漸々開て見ました處ろ果して斯やいふ事親方も役人達に手傳て悪党共を生捕に爲すつたさふで、而から何へれ出に成たか其場を立去なされたよし、シテ見れば親方は其後

四市平を撃取んと、存じ居れ處る私の悪事其筋の耳と成り隨ふ八方へお手當あつて最早寸暇これなきよつと只今此用を果すと其ま、直さま役所へ自首て出んど、覺悟致し間だ右

最後の事を云々なりと告たりしかば、民は之を聞もあはれず、駒吉の桶を開き見て、潜然と打泣けるを半介切りに叱り止めて、我も血涙を置しつ、繼て三吉お大に頼みて先駒吉の亡骸を香花院へ埋葬させ、其他萬端取扱ひて、惣て辛やく事はしてしかば、打集ひし人々は私かに彼時相談を整のへ夫婦が爲に家を買んど其相談を語りたれども、半介は受引ず、折角の厚意なれど拙者は別に所存あるゆへ其義は及ばずとて固く之を辭退しつ、繼てお大にも眼を與へて人々に別れを告げられ、民を伴ひ住別たる番場の河岸を後よして其日夕暮のころ南の方へど、足を疾めて立去たるを人々本意なき事に思ひて、甚く別を惜みけるに、況てお大は哀別の悲しき袖も包かねん泣沈みつ、見送りたりとぞ、去程半介はお民を伴ひ番場を立去り、其夜つ但ある旅籠へ泊り、此時夫婦相對して前々回の事の仔細の互ひよ知らざる處ろを云いで語りつ、聞つ夜を深せしが、半介は言葉を取らぬ、右の通りの譯なるゆゑ、以後専ら心を配りて、剛市平を撃て取り先代の遺恨を晴さん事は、ひ彼折市平が容貌年齢骨格まで大抵見認て覺ぬあるゆゑ、後日これを尋ぬるにも、大いよ便宜を得たるなり、又葛城が身の上も何とてか、一ツ工風して受出す等、有なれど我夫婦斯の如く、固らず零落したるからは、當分何とも詮方なきゆゑ、暫時々節を待んど云よぞお民も別に手段なければ、只管歎息するばかり、其夜は空しく、朝の翌日の朝は、早く夫婦此家を立出て八丁堀まで迎り來り、爰に甲斐なき裏家あるを借宅して膝を入しが、一資半給なき身よは朝夕を送りかねて夫婦ども、日雇を取り或ひは雪ぎ洗濯などして辛ふして日を送るうち、當年(安政五年)も何か過ゆきつ、復二年のまわりを経て、万延元年の春を迎へ、民は二月廿日の夜、玉の如き男兒を産たり、朝夕の炊烟さへ思

第五十一回

ふ半も立かぬる貧究うちよて半介は殊のほか之を悦び、其兒を半葉と名附つ、寵愛するも大方ならず、斯て母子とも肥立よろしく、二七夜と成たるころ夕暮告る豆腐屋の賣聲聞ゆる點燈前後の旅仕度せし一人の男が小腰を屈めて入來り、先頃飛脚の言傳より爰の住所を承知いたし、參上したりと云ふ言葉、半介は何事か心得ありなん立迎て、四下より眼を配りながら先此方へと、腰際の塵打拂つて、件の男に、腰を掛させ、關に跨がり、門の戸ハツと締切つ、戸締りかく用心したりと、此段容子ある事なるべし

八丁堀の裏家住居あるに、甲斐なき上總戸の締を固めし半介は、彼族仕度せし男を請じて、火鉢の邊に座を占させ、其姓名と來意を聞に、男は暫時四下を見廻し、繼て纏ひし脚絆の内より一通の書翰を取出し、之を半介へ手渡しするを、半介は受取て、眩近にある行燈へ火を照しつ、書翰を開き始めより、終まで熟々と讀了りて、手を組み頭を低たるま、何事か熟考しつ、件んの男に打向ひて、額を合せ、聲を密め、「此返書をと存すれども、書翰は兎角秘密の事の露顯及ぶ媒酌なれば、只口上よて返事を申さん耳を貸たせ、ト云かけて、其口を指させつ、何事なるか、良しばらく耳語告る云々を、使の男は一々點頭、「惣て心得まして、る然らば左様傳言すべし、重要な事ゆゑ、少しも疾くお眼いたすと云も、あへず手疾準備を整のへつ、戸外へ立出會折の屏風の中に、スッ／＼睡りし母兒を見やりて、思はず落す一甲に遺方もなき無量の苦心を袖に包みて、退ぞきつ、一切りに歎息したりしとぞ」去程に半介は、是より後ちお民も半葉

も殊のほか肥立よくして既や手も掛らず成しかば、或人の世話に依て尾張町三丁目、屋と云ふ異服問屋へ奉公に住込つ、己が口を糊しながら其給金を取り宿所へ送りて妻子を養ふに居たりけるが或時久しく打絶居たる吉原の若者の作藏が尋ね來しに半介は身の零落に在らずもがなと思へども有難に顔を見られては知らずとも云かねけん立出て挨拶しつ、先は葛城が安否を問ふ作藏は腰を屈めて別後の口證を演も丁らす葛城より届けたりとて一ツの小包を指しながら「實は先日用事があつて此處ろを通りかゝり圖らず旦那が店頭よれた出に成たを見受ましたで、葛城さんへ其事を話すました處ろチイ、泣ての大脱走此日今日日邪へ此包を届けてくれとの頼ゆへ待参いたしましたトの口上に半介は不審時ねを其包を受取みるに重量なるにぞ心ひろかに不訝たれを傍の見る目を厭けん其包の事は何とも云はず只管に作藏が長途の使を勞らひて、返事は何れ此方より遣はずと致すへし兎もあれ一烟吸て行ト云を聞かけ此方は手を振り外に急ぎの要事もあるゆゑ今日はお別れ申しませト云すて、急がはしく歸り掛るを半介よびとめ葛城へ言傳の言葉短かに頼つ、其處へと歸入しが其日の暮、を待かねて鉄小燈を携さへつ、物置庫の内へ入り人目を密び葛城が届け越たる包物を打開きみれば這は奈よ四百兩の封金と多一本出たるよを半介ます、怪しみて其多を推測し讀下し見れば思ひきや彼金太が改心に回て最初由衛門が奈はれたる大金が復りしゆゑ折から彼方の貧苦を幸はひ差贈るゆゑ此金とて再たび世に出で花々しく俠氣を磨き候へど云ふ最殊勝なる文言よして且是まで尋ねたれと其行方不明に依て云々なりなど書ろぬあるにぞ半介の身の毛の立ほと驚ろき感して多売を顔に推當て金を仰ぶ

さ、感涙拭ひあへず暫時吉原の方に向ひて合掌しつ、心中に其厚意を謝したるま、頭を低て居たりしとぞ
第五十二回
絶て久しき葛城が珍らしからぬ事ながら常盤心の色かぬぬ實情を包み大金と思ひを演じ文の面よ、剛氣不屈の半介も不覺の血涙よ零れ果て暫時の儘ありたりけるが其あつて心氣を屬まし此年來思ひを碎き工鳳を凝して心底の秘密の事を彼方此方と、人は勿論神はさへ知らざしと思ひ壯士が、一旦怪ひし言の端に花を咲せ置らすへしと千辛萬苦の中を在て彼中將が御首級を申し受んと幾度か或ひは虎穴に入たる事あり、或ひは龍潭に潜し事あり、火を踐み刃の刃を渡りしも數回及びたれを運拙なくして事を遂す本意なき事の限りなりし、然るに先夜の書翰に依れば日ならずして人々が事を起すと覺わたり就ては我も應分の志念を致さんと思ひよけれと食苦の中よ妻兒を捨置死せんこと有難し心ぐるしかりしが今圖らずも葛城より多分の金を贈くれしは勿怪の僥倖此事なり卒さらば立歸り密び密びよ準備せん忝しけなれど心中よ且思ひ且はかりて手疾く文と封金を内懐中へ納めあへず物置庫を走り出て俄かに病氣なりと云たて強て身の暇を取り夜を込て八町堀の宿所へ歸り來りしとぞ、然れば民は夜に入て良人が俄か歸宅したるは故ある事と心配して其仔細を尋ねれど半介すこしも頓着せず只止がたき所存あつて急歸り來りしのみ心配するま及ばずとて是より十日餘りを経つ、三月二日の夜となりぬ、今夜は宵より北風烈しく冬にもあらで降田せし雪も肌も凍るばかり質も片ろぎの軒間より吹入る吹雪たぬ難さよ半介は走

明治俠客傳

り出て酒肴を買來り夫婦合膳愉快氣に世の中の雑譚をどしどし小夜ふくるまで飲過せしが時
刻來り半介は先妻兒を打臥せて我も伴衆の枕を就し暫時してお民が寐息を爲と窺がひ
起田て豫て準備の裝飾を笠のへ一刀たばさみ短銃の玉込したるを携さへつ、我家ながら
させじと出足入足裏口より戸外へ立出で草鞋を穿しめ笠を脱して一散愛宕の方を心指し
彼若鷹が小鳥を追ひ脱兎の山を走るが如く何方ともなく走去たり、去程に、明れ三月三
日と成て上巳の佳節式禮めでたく在江の諸侯等陸續連綿何れも登城の行列立て見附く、一
線込たるが尙降くさる雪を凌ぎて此時水戸の脱藩浪士等、十有七名櫻田見附に井伊中將を
狙撃しまいらせ遂に其おん首級を得て、企望を遂たる騒動あり是は既に世の人の周知く知
れる事なれば説す、然れば浪士の中に於ても彼有村治左衛門は振群非凡の働らさを顯はし、
群がり蒐れる中將方の太刀を開きつ打拂ひつ時移るまで聞かひたるが其身も既に此後と既
や數ヶ所の深手を負て今はや雪も閉り最も危うき後の方に鐵砲の響一發して當の敵手を
撃倒せしかば有村不思議に危急を脱れて味方の壯士の後殿しつ、懸て其場を去たりしかば
騒動やうやく治まりたりとぞ當時實に萬延元年三月三日の早朝なりしと

第五十三回

明治俠客傳

の軒端に來なく群雀、求食かねてや驚すしき聲聞つけては民は起田て見れば良人は空蟬の
裝束の売の臥床のみ冷たる儘に儲けありて其人は未だ影なし、最初こそ荷且の事と思ひて
扱止たれ今は密か驚ろさつ又不審つ眉を認め「モシお前さん」と二聲三聲來立れど荒
神松の點頭のみ誰とて應答を爲ものなきまぞ「ハア今時分何したとん買物にでも行たか知
らん兎もあれ不審な爲休くト口の内に啣やきながら半葉を密に叩きつけ起出で彼方此方ど
家内の容子を案するに裏口の戸を引寄たるま、輪鎖をを外して在り殊さら常に秘置ける宗
近の一刀短銃も紛失して其邊總て狼藉たるにぞお民は今さら仰天してハッと驚ろさ胸を
打てば既や握り來る血の涙を拭もあらず聲を慄せ「ア、知らず居た、有聲剛氣な
半介どのも斯必追して世過さへ爲かねる今の貧しさに私と半葉を置去りして逐電されたか
エ、ア何と、ア、情なき爲されか恨めしきこと悔しいこと聞ぬぬ人かト吾を忘れて道
と倒れつ泣伏は物の戀も目を覺共音も泣ぬ幼兒を抱き取り抱しめて身も浮ばかりいは、
しる瀧なす涙すでも受け袂も受て眞暫時、堪ぬばかり泣入たるが斯ては果ほど氣を取直
し先兎も角も準備して心當りを尋ぬへし、尋ねて逢すば此兒と共に生るも死ぬるも似
子が一命の天に任せ奈にとも成ゆくより外に爲方は無ものをと分別しても復更禁めかね
たる涙の間より見れば半葉が地獄顔、なんにも知らず歸嫌よく胞も壓されニコニコと笑ふ
目元も口元も良人は瓜を二ツと思へば是も涙の種となり果しもあらぬ悲しさを辛やく思ひ
止まりつ、蓋處へ立出て土籠の下に折くべる、鹿菜も連理の睦ましく枝ぶり悪き身の慕な
き是も又た涙の種よと立たる儘に打泣しがア、我ながら愚痴なりしと思ひ返して甲斐々々

明 治 俠 客 傳

第五十四回

しく水を入んと蓋の蓋を取除け内を差覗き、但見れば奈に良人が手跡の、遺書を一通と封じたる金二百兩とを釜底に納めるまぞれ民はいよく打驚ろきて懐へる手先に取揚つ、打返し見れば良人より我ま當たる文なるにぞ封推切て讀下す、何事も省略しけん文而すこしの淡白に「只我等こと仔細あつて今夜よぎなく逐電したり就ては殊に依り一命なし若我等師らずは此金を以て兎も角半葉を養ひ世を渡れ、命あらは遠からず再會いたす了簡なり但し我等逐電一義は夢よく人に備すべからず此手紙は一覽のうへ火に投じて焼捨よ又明日中いづれへなりとも速やかに轉毛せよ尤も人は知られぬやう家主其他近所の者へは引越先の方角を違へ、宜しくすし繕ひ置べし尙々引越先の義は小さき紙に相認ため竹筒の内にて麻布一本松の根方へ堀埋めて置申をべし只願はくは半葉か養育偏に頼む云々の文言にて有しかばお民は恰から夢情に分よしもなき意外の始末を再三再四思ひ測れど是り難つ、茫然と暫時く頭を傾ふけたるま、尙打察じて居たりしとぞ

生來き實義あり且削發なるお民なれと半介が遺書の文の情實を判じ難て暫時思ひ煩らひしが「兎も角も一命あらば程なく遇んと認ためある、筆の跡こそ力なれ逐電したるとの本は奈なる情か知る由なけれを願はくば一命めでたく疾く歸つて参られた、又不思議な此大金、今の身分で何を何、才覚された物なるか良人に限り飢死に爲とも汚ない心は持ぬ等ゆゑ他人の物を何と云ふ辻參な事は有まじしが何とて調達されたか心得がたき事かなと思案の胸を痛むれども思ひ難つ、小首を傾ふけ「右さへ思ひ分かつたに今日の中に移轉せよ



移轉先を云々せよなを彌々増々怪しき事なり、兎もあれ昨夜の爲体くは一通りの事にはあ
らじ所詮何方を尋ねたりとて容易は遇がたからん遮莫く文の文面は随がひ何れへなりと
も轉宅して再會の時節を待たハテ異な事に成しものよト再たび思ひ直しつ、先は金と遺書
とを佛壇の内に納めて手疾煮炊の準備を整へ幼兒の小褌なども残る方なく用意して件
の金の封を切り店貸其他少しづ、の買借の拂ひを濟せ多くもあらぬ物ながら世帯道具を賣
尽して家主はしめ近所の者へは淺草最寄へ移住せると加減よく云ひ置つ、母は蓋覆を纏へ
ども兒には裝飾す麻の葉の新らしき生衣を着せて半纏背負十文字、いと甲斐なく急ぎ行
を整へ其日眞意の過るころ深雪ふみ分け迎々と八丁堀を立去つ、何方ともなく急ぎ行
と、是は之れ誠すども半介が約を履で非伊中將粗聲の一議に加はりたる處より妻子に難
議を講させしと思ひ圓りし遺書の文面に依り其意を得れどもお民は云はれし儘に隨がひ事
の爰に及びしものなり然れば櫻田異變の最中、土手の上の並松蔭より鉄砲を放ち有村が危
急を救ひし曲者は是吉田半介なりしと一切此話柄は暫時止めて爰又、彼葛城の父由衛門
が後譚の始終を尋ぬるに由衛門は彼月彼夜、淺草の馬道まで金を奪ひし曲者を追捕へん
て狂氣の如く其跡を慕ひながら彼方此方と走廻りしが奈にして捕へ得べき徒らよ身体疲れ
て今は一歩も進み難きに淺草寺の寺内へ入り但ある石段は腰打かけつ、爰に燕々以ひみれ
ども緊要の金を失なひては番場へも歸り難く我子ながら葛城へも面を向へさ山なさに彼是
心を苦しめつ、其工風を凝らしたれと奈んども詮方なきま當惑せしま、良暫時茫然として
居たりしが「兎もあれ空しく勘考せしとて世に益なき事なれば此儘一旦古郷へ歸り假令無理

ある手段を爲とも右の金を調のへ來り一時も疾く我娘を救ひ出より外は詮なき、番場へは
氣の毒がから今夜の急を救ひ難しト有聲考効分別疾く馳て其場を立去つ、然ども氣懸か
ればと土屋の邊を徘徊して密か其容を窺がひしに半介の母は亡かり悪漢吉は殺されて難
題辛やく治りたりとの好便を得たりまかば由衛門大ひま安堵ま僅ばかりの端錢を路用と途
に古郷高山へ歸り扱八方に周旋して金を得んぞ尽力したれと四五兩は調達すれと四百兩
の大金は迎も得がたく覺をしかば先年の負債の爲に永く逗留すべきまあらねば懸江戶へ
歸らんと思ふとき、圓らずも疾病又罹り或方へ止宿して爰に久しき月日を送り當年万延元
三月の初旬、再び江戶へ出來りつ所用あつて麻布へ廻り夜に入て一本松の邊り近く來り
しとき但みれば一人の女子ありて松の根方を掘起し何か埋居る状況あるにぞ、由衛門不
審はれず何事あるかと小隠れて息を疑しつ良暫時其爲体くを窺ひ居たるが暗ま紛れて心得
かねまど

第五十五回

重説外木由衛門は古郷高山より江戶へ來り所用あつて麻布へ廻りて一本松の邊を過るに但
みれば一人の女子ありて松の根方を掘起し何物あるか埋居るにぞ由衛門不思議と思ひて小
隠れつつ良暫時其爲体くを窺がひ居たるに彼に斯とも心附すや馳て之を埋居果て袷袂の塵
打拂ひ、四下を見廻し坪を立出で足を疾走して一散に芝浦の方へ走去まかば由衛門いた
怪まみ彼れ何を埋めたるか兎も見へざるま要こそあら見えて遣べしと思ひ起しつ
是も亦た四下に心を配りつ、坪の中へ進み入て埋めま物を掘起し見れば小さき竹筒あるゆ

明治俠客傳

る筒の中へ指を入れて其中を探り見たるに半切の端は書たる書附様の物いでたり、時、暗の空くらけれ星の光に透し見るに「芝濱松町一丁目、家主源兵衛店、土屋たみ」と記しあるよど山衛門大ひに驚き「然れもへば今の人は舉動骨格ごとくお民に恰く似た女なりと腹の中に思ひ居たるが扱は果してお民でありしかハテ然よし心得がたきは彼何故此書附を、此處へは埋めたる仔細あるべき事なるべし且は彼れ濱松町、云々と書たる下へ土屋たみと記せしは番場より濱松町へと轉宅したるものなるか免もあれ思ひ設けぬ事よて其居所を知り得たれば是より尋ね行たるうへ遇て萬事の話を聞べし又此筒を埋めしは何か要ある事なるべし元の如くに爲て置んと且疑がひ且思ひ懸て伴んの竹筒を元の根方より埋め置つ、南の方へと急ぎ行しは最不思議なる奇遇なりけり、去程に由衛門は只管途を急ぎしかば程なく芝浦通りへ出たり因て濱松町へ行き家主源兵衛の許に就てお民が事を尋ねたるよ立地ろよ知れたりしかば糸立を脱ぎ笠を除きて其家の門邊より徐々よ呼門進み入をお民は今方歸りし儘にて隣家に預けし半葉を受とり行燈へ火を點し居たるが、火影に信じ此方を見て驚ろくこと大方ならずア、何とお珍らしひ伯父さんでムひ升カサアお上なさひ升ト云ふ聲さへも口障しは此項の愛難と良人が家よ在らぬとの打續きたる歎きの聲を語る人なき昨日今日の親に均しき伯父に遇て既や胸の中の迫りしなるべし、由衛門も老眼にお民の面を透し見て打悦ぶこと限りなく「やれ、お民無事で居たか扱めでたい事であつた、半介殿は奈が成された用違よでも行れたかト問れて此方は堪りかね目を推拭つて涙を隠らせ「サア其良人の事に就ては云に云れぬ仔細があつて只今家よは居ませぬが其仔細

明治俠客傳

細とすずれる鳥渡とはお話申されませぬ、先アあがつて下さひ升ト云れて此方も何となく胸は騒げ身は狂はす徐々よ抱へ願うちかけ草鞋を解すて塵打拂ふを傍よ寄つ、彼是と世話をすお民が片手薬に、抱か、ぬたる半葉を見て(由)ヤ、お民手持よ成つたか、ナ、とれ、ヤレ真子だ、男か女かウ、笑うは主や出来したなト我子のこと、恐られて足る親情、れ民は思はず莞爾わらひ「ナニと真子やムひませんよ先達て生れたばかり漸々此頃赤色が脱て子供らしく成ましたト云つ、虎子引よせて小用を爲する脱間を差覗き見て由衛門「ナ、ちん、だナ得來、親父に似て選ましひ良容親だ名は何と(お民)アイは半葉とすし升よ、ろれ半坊ね伯父よ少し抱こト渡されて由衛門は長道の疲れも忘る、はかり嬉しがり抱き取たる幼児を徐々抱えて復更に思ひ廻せば我子のお七も、時代時節と云ながら並々よして世にあらば斯いふ子供も儲くる頃よ、アラ儘ならぬものなるかな可愛きものは此幼児、不便なものはおア、ね七ト思へば知らずハッ、と流る、涙いだかる、半葉が顔よ降注ぐを知らぬ赤兒は機嫌よくスヤ、と睡る無煩惱、大人はづかしさばかりなる此間にお民は齟齬、立働らきて有合の酒肴を調のへつ、膳推据る折しもわれ増上寺の鐘間近く聞えて夜は亥の刻とぞ成たりける

第五十六回

其わつて由衛門はスヤ、と熟眠りし幼児をお民へ渡し(由)エーと別れて尙やうやく、一年か半年だのに何たか悉皆容子が變つた兎もわれ其方か顔色と云ひ、家内の塩梅すべての内情とふやら念に懸つてならぬ、サ、一通り話してくれよ開してくれよト問かけられお民は

明治俠客傳

思はず大息つき(民)サアお話しすすも一通りや二通りの云々で...

明治俠客傳

第五十七回

と待て居て過て始終の容子を聞き其上で何事も相談するより...

明治俠客傳

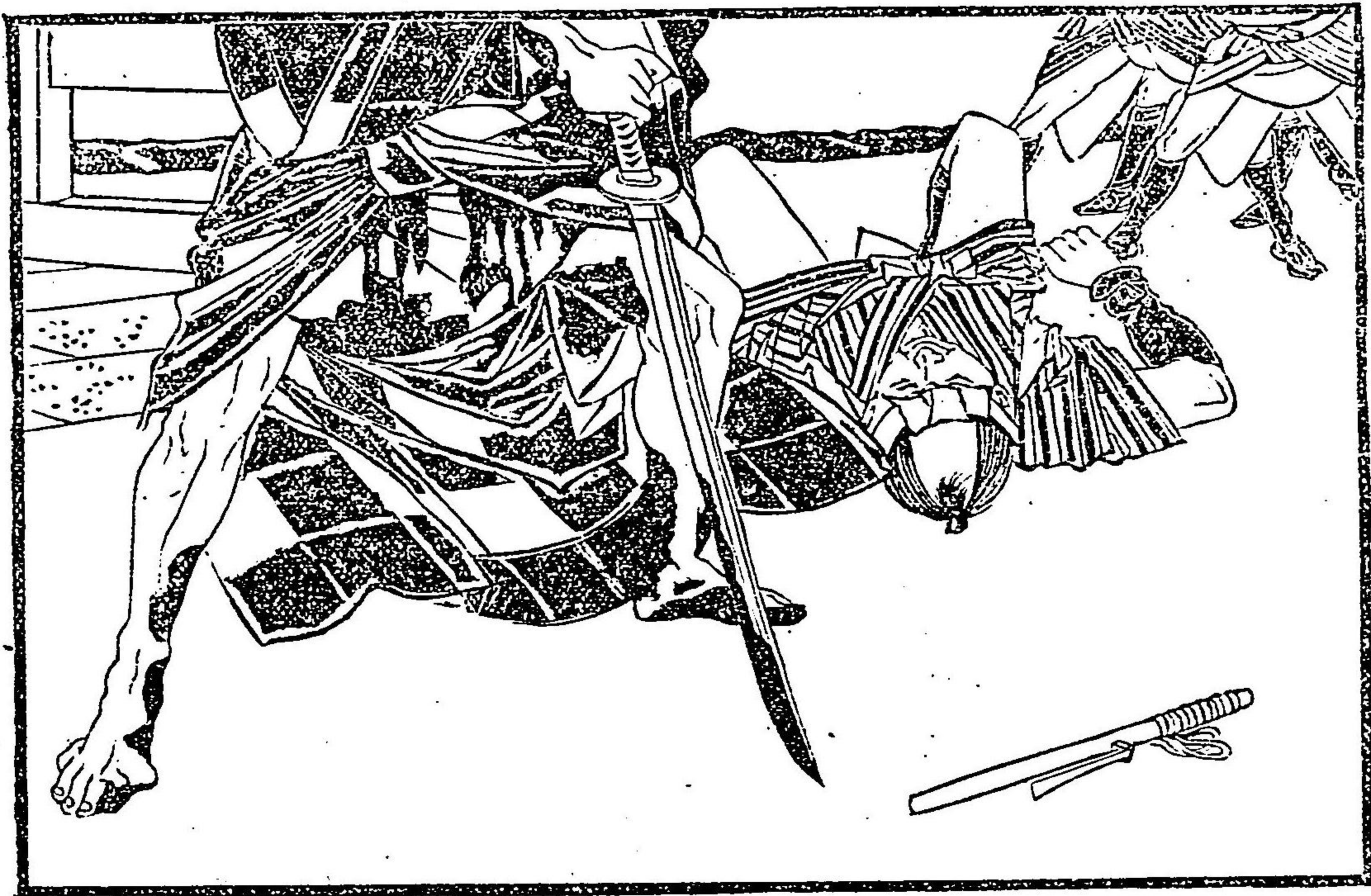
既や術計盡て此事は思ひ止まりつ斯て或時麻布へ到り例の松の根方を掘て謀し合せし女房
お民が濱松町の宿所を尋ね夫婦親子叔姪一度に再會の企望を遂しかば、お民由衛門大ひよ
悦こび積る前後の話は沙りて凡そ十日餘りを経たるが半介は件の二人は胸中の秘事櫻田一
義と、内密に物語り且先をろ或湯屋にて衣類を盗み取れし事も話の序に語り聞せ、右様
の譯なるゆゑ所詮在宅かなひ難し因て此身は云々の隠れ家に潜み居り時節を待て歸るべけ
れば伯父御はそれまで爰に止まりお民母見の後見たのひと懇切に相談せしかば二人は之を
聞ひあへず放しどもなき情を爲れと強止をして禍害あらば却々に悪かりなんと思悟を極め
て承知せしよぞ半介深く安堵して是より隠れ家に潜匿しつ、世の風聞に耳を立るも果して
吉田半介なるもの、櫻田一義の餘類なりとて探偵嚴しき趣むきなるよぞ半介は扱こそ急
ぎ江戸を立去りつ、お民へは飛脚に托し特と離縁状を送り置つ、我は足よ打任せて北陸
地方を漫遊し或ひは人の食客と成り或ひは劍道を教授して一年二年と月日を送り旅に貳年
の年を経て、今年文久二年七月某の日、久方より江へ歸り外ながらお民一家の安危
を探りたる處る別に異變なかりしかば安心して我身の上の風聞を聞たるに興味として不定
なれど尙お民が宿所へ致らず或夕風姿を變て例の佐野橋へ打登り葛城へ再會せしかば、葛
城は夢の如く現の如く縋り着て幾年か相見ざりし恨み辛みの數がぎり泣つ口説つ果しなき
まで思ふ程を語り尽し、又先月頃よりして片岡兵馬と云ふ武士が槍却をもく通ひ來りて
還からも身受せんと云こみの辛さ悲しさ其武士は日外ぬしが始めて爰に遊びしとどき其晩
登つた人にして先頃より見立替の有がた迷惑昨日今日日は悪くぞく寅はられ困り切て居ます

明治俠客傳

トの話の容子に開耳したる、半介は良時うち案じて居たりしが忽地小膝を打鳴し、其
武士ころ殊に依たら飛脚の金太が話に聞る我年來尋ね暮せし曲者なる哉も圓り難し若此大
參つたら備探しくな處ろまで密かに知らせてくれられよ努々それと知られぬやう心つけよ
ト頼み置き扱これより酒宴を設けて別後の始終と由衛門が變りなく暮す事など夜と共に語
り盡しつ後朝の別れ惜みもあへず嬉笑ある身の半介は急がしく帯引しめ聴く佐野橋を歸
り去しが斯りし後は事に紛れて復當年の冬をも送り文久四年と成たる程に吉原の仲の町へ
正月初旬より梅を植附例の甘露梅(梅實漬の名)の準備をなす殊のほか照はひしかば去年
より打絶居たりし彼片岡と名告る武士より明夕は梅見を兼ねて身受に來よとの文を持せ葛城が
許へ使夫來りぬ、葛城は期したる事ゆゑ之を受けて半介が隠れ家へ使夫を走らせ其事を知ら
せしかば半介はやく心を得て十二分の準備を整のへ例の宗近の一刀を横佩、翌日の夕暮頃
より吉原へ行き彼方此方と徘徊しつ、在どころへ件の武士は斯とも知らず悠々として入
來りしを枝生繁りし梅の影より右か左かと窺がひ居たるが今來りし武士を見るに是ぞ年來
遺恨ある彼國市平にて在しかば、半介は斯と見るより胸騒ぐまで打悦こびつ、暫時も措す
ツカノと進み寄さず市平が刀の鎧を右手に把り左手に蹴揚し袋帯を引あげ尻高くと端
折ながら二歩三歩チチと引戻しさま入り代り磯たど疾視で身構したりと畢竟半介此場
に於て首尾よく本意を遂るや否や尙次回に附續べし

第五十八回

然なきだよ、物見だかきは都會の常どか况んや此は吉原の花の遊廓に俠客が鬼をも挫かん



明治俠客傳

顔色しひの、武士を遮り止めつ、事ある可と見へたる程に、往來のもの近所の者どもス
ハ喧嘩よト云より早く八方より走集まりて件んの二人を腹圍み遠巻にして見物しつ已が種
々なる評を立て一群頗る驚々たれども、半介これを物とも爲すして市平を疾視つめ
(半)今さら兎角を云はずとも惚て汝れに覺れが有ふ、今日を番場の土徳が遺恨を晴す覺悟
しる所いふ我は土徳に由縁を結びし半介なり市平準備せよハア好處ろで出遇たなト云は
れて彼方は胸頭へ打る、釘か録よべわげられたる絶体絶命、今は逃さじと思ひにけ
れば肚胸を決め(四)夢も知らぬ云が、り聞く耳は持ないが其方は世に聞えし理非を辨せ
ぬ亂暴者ゆゑ、今奈ほどに辨解も指を合へて引退まひ然らば無益の殺生なれと企望とあ
らば是非に及ばず首を落して此方が刀の利味試して遣ふか(半)扱々卑怯な其一言、事の遺
恨は右のみならず我家を焼打され義弟駒吉を殺されたる、積る遺恨の覺あり論は無益
キリくうて(四)ナニを下郎が武士へ對し返すくも不禮の云かけ覺悟を爲るト云もあへ
ず引ちぎつて脱捨る彼袍と共に身を閉きて振放したる大刀を頭の上へ振舞し眞顔臨んで
打て来るを、物々しやと半介も飛退ながら宗近の鞘を拂つて受流し受流しつ、切結びしが、
市平は最初より際もあらば脱れんものをと、思ふ心や有たりけん連りに太刀を打込ながら
七八合よ及びしと刀を引て脱兎の如く大門口より一散す宙を飛で逃去りしかば、半介か
くと見るが吾や我も飛鳥の勢はひ烈しく豁然と追かけゆきつ右に走り左りに走り裏田前へ
と跳り出て、太郎稻荷の森蔭まで追迫りつ、及び腰に刀先さがり破と切る拳の互市市平は
脊筋を尻まで切さかれて暫時も堪らず仰むけさまに墮と倒れて悶絶どころを半介は得たり

明治俠客傳

とばかり飛越りさま打下す鋭き太刀風ふしながら受損したる市平は首をハッシと打落さ
れて叫びも果す息絶たるよぞ、半介辛く一息つき間近き清水は咽喉を潤はし四方を信と見
渡せども此邊は晝さへ淋しきに況て今は全たく暮はて人足は無ししかば儘かに心を安んじ
て刃を納め死骸を蹴返し思ふ限りに罵り責つ、手足に點たる血液を拭ひ塵うち拂つて悠
々と影を暗まし行んと爲たるが忽地に心附けん立戻りつ、市平が懐中を掻探りて取出した
る胸巻の金高を計算るに彼れ城を身受の爲か五百餘金所持してあるよぞ半介の胸の中に
「ナト不快なる所業なれど此金の要用の爲か我家と諸財産とを此奴と焼れた賠償と奪ひ
取て行べきなり最早明日も知れざる一命、息ある中に恩義に報ゆる、準備して置べきぞ
今さら些細な小蔵を守り居べき時にあらずト、思ひ決めて件んの金を懐中へ確かと納め足
を疾めて東の方へと顔被りしつ糸遊の消るが如く走り去しと

第五十九回

扱前回の談話は暫時く措、爰に又、先年市平に殺されたる彼早稻田の吉が餘類に蛇の目の
千太と云ふ者あり此奴も元來惡徒として盜賊賭博を業として惡事と掛ては然る者なりしが
斯て此蛇の目の千太は日外賭博にて大ひま失敗、甚はだしく困迫せしが其後は爲こ作こ
と一々に亂離ひ兩三年水處々方々と徘徊して乞食と成り果、幸く一命を繋ぎ居たるが千太
當年(文久四年)或日のこと兩國橋の橋間に座して身の中の虱虫を潰し衣服の襟を彼方此方
と打迎して居たりしが不圖心つき襟を揉み何やら中に物あるにぞ不審ながら襟の縫目よ指
頭を挿入れて引綻さつ、更たむれば誰か之を縫込置けん短衣の背翰が出たり、之は鱗なト

打開きて讀んど爲れど一字も讀ねば舌打して書翰を引伸へ鼻を吐んと爲る處ろを豫々かれ
を犯ひ居たりし捕手の壯俊雨三人、バラ／＼と走り廻りて驚ろき逃つる千太が背中を渡り
の十手よりわけ五ツ六ツ打きめ蹴倒しあへず萬手小手も舞々ど縛しめて件んの書翰も把
揚つ、既や立ませひノ聲諸ども土地の番屋へ引揚たるに予聽て巡廻の與力來りて一應千太
の身元結し又捕手が差出たる書簡を受とり讀下せしが讀も了らず大いに驚ろき、是は之れ
先年三月櫻田見附の傍に於て井伊中將を襲奪まつりし惡徒より、惡徒へ宛て通牒したる書
翰なること隠語なれども疑がひ無し扱は此乞食ころ容易ならぬ曲者なりソレ引打ひて物て
の事ども白狀させよト焦燥にぞ捕手ども心得たりと右より立か、りて縛しめられたる
千太を引据、紙糾棒を振翳して背尻の肉の痺くるばかりハッ／＼と打懲せしかば千太
こらへず息も絶々(千)ア、少々お待ちください何も歎もすし上／＼と泣叫べば與力は點頭
棒を止させ(與)ヨシ、然らば先尋ねるが其方向いふ次第が有て此手紙を所持して居たぞ(千)
ハイ其手紙は實の處ろ、襟の中に這入て居たのを俺ちも今日まで知らずに居ました(與)ナ
ニ此手紙が襟の中よ、這入て居たとい何いふ譯だ(千)何いふ譯だか存じませんが先刻兩國
の橋の下で虱虫を驅ながら氣が附まして、襟を縫ひて見せましたら此手紙が出ました譯で(與)
ム、然らば其衣服は其方新らしく拵らへたのか古着物でも買て来たのか(千)ハイ此の衣服
は或る古着屋で(與)買て来たぞ申すのか倍と然に違ひなひかヤシ偽はりを申すと最後、直
さま尻が割るが宜か、其時は何くらひ痛い目も爲せなやならず又其罪も重くなるが然と
覺悟で偽はるなら偽はつて申しあげよ、サ、何じや其古着屋は何町の何邊で濃麻には何屋と

有たか突合せやうサツサと申せト灸所を問れて此方はギツくり屋暫時勘考居たるが思へば
我身の罪科こそ敷へ盡せぬ程あるに此邊の事で白狀えたら、塗匿さるゝものならは却々
僥倖あるゆゑ先云立て試みんと狡猾の思案に胸を決め(千)實に恐れ入りましたが此綿入は盜
た物で、拵らへた物ではムいせん(與)然れば何で盗んで来た又持主は何者だつた其邊が
大事だ明瞭せ(千)ハイ此綿入は妙善譯で實の處ろ一昨年中、本郷の湯屋へ參つたとき、
俺ちが同類早稻田の吉が、仇敵の半介とか云ふ、悪い野郎に出遇せたから、打つて遣ふと
思つたが其半介とか云ふ奴は旦那衆も御存じだらふ、先頃番場で土徳と云ひ俠客を舊た野
郎だから惣じつか俺等風情が手出を爲たら反對に打られ様と思ひ直して其腹冷よと其奴
の衣類を板間かせぎ盗んで来たは此綿入、それから以來二年ばかり襟の中其手紙が這入
て居たとも知らぬへで、昨今まで着て居た譯です是より外は座はども匿した事はムへや
せん願をお悲慈に板間たけの御處分で濟ますやうお願ひ申し升トの思ひ懸き白狀を與力つ
で置まえたか其邊は一向存せせんから宜しくお願ひ申し升トの思ひ懸き白狀を與力つ
ら／＼開果て暫時勘考の体ありまが何か心も點頭けん、今日は右よて宜とて捕手共に指圖
まつ、先は千太を引立させて傳馬町の半舎へ送り我は件んの書翰を納めて時を移さず準備
を整へ町奉行の屋敷を指て只管急ぎ行まよ云

蟻穴元來小やかぢれども、一座堤坊を洞ぬく時は遂に千尋の水を濁かし針は小ある物と雖
ども過つて之を呑ときは忽地人を驚すべし然れば人間世に處するのみち百般の事に注意せ

明治俠客傳

歩んば... 地にて... 公馬に... 心與力等... 思ひ競ひつ... 可ものなり... 口を脱れ... 露と消べ... 況て累代... 多き限り... へ歸參し... 神なれば... て斯る遊...

明治俠客傳

此金を以て... 昨日今日... 物たらし... 紙物語り... ば受出し... さたる我... はす皆心... 半介は金... の袋の被... 人これを... て蓋を除... より得た... りかねて... 其日は事... 度々通ひ... か心に不... を跟て何...

後、又葛城は圓らすも半介より五百兩の金を得て悦ぶこと大方ならず遂に樓主佐野へ掛合ひ身脱の事を相談したる。葛城が此年來、眞情を以て勤めたるゆゑ佐野も是が爲に証文を返し其金端々見苦しからぬ様はからひしかば、葛城も感心して双方實情の感涙を溢し一夕ゆたかに酒宴を設け別れの酒杯を廻らし樓婆若者惣ての者へも附添り宜しく有て其翌日葛城は辛や苦界を脱出つ、例の壯傑作藏に吩咐かねて買入置しと云ふ、永代向の河岸通り相川町の家に移りて先取あへず此事を半介へ知らせしかば半介も胸を撫で、レて年來氣懸なりし一事を漸やく果したりとて悦ぶこと限りなく兎角するうち春も過て靈祭る七月の星合の天と成し頃をひ半介は久方より葛城に會ふと思ひ例の早桶に打乗つ、腹心の子分に與れて今永代の林まで來か、りたる折しもあれ、何れよりして集まり來にけん雲霞の如き衆多の捕吏等、橋の東西市街の口々、到らぬ隈もなきばかり鮮々と駆けつ、吉田半介御用なるを神妙に纏受ると云かけバラ、走り寄や桶を與たる子分二人を矢庭に打据縛りあげ又早桶に群がり驚りて其儘捕んと辨めく處ろを半介は桶の内より事の始終を窺がい知りつ、絶て騒ぎたる氣色もなく例の金剛力を以て桶をバラりと破命、覺悟を極めし顔色なるにぞ捕吏共アツと叫びて風木葉の散る如く皆七方へ逃開き手を下す者なかりしかば半介れもはす隙を得て裾を踏折り袖を卷あげ手疾く準備を整の

ながら足場を濡つて大音あげ「捕吏の頭は何人なるや又いかなる罪あつて此方を召捕たぞ、御用の筋を聞くと云せも果す捕吏の頭人進み出て擬勢の聲を振り「黙れ半介御用なるぞと云せもあ、す冷笑ひ（半）日本古來の賢智もて人を捕へんと爲るとは其事柄も演聞せす只管に壓制して理非も辨せず拘引ひ腐れ番衆も拘留して勿体なくも時の君の民安かれど布れたる宏愛仁慈の法律を破り、濫りよ人を鞭撻して枉て冤罪に陥入しむるは是其方等が恒の事なりア、半介不肖なれども年來有志の禁彼志念を相合せ厭制奸佞上を暗さし下を虐たげ世に立て虎の威を借り己を肥せる、狐狸狗盗にも優りたる大奸物を誅戮して以て公廳を清めんと思ひ、千萬力を盡したれども運拙なくして遂に果さず今此場合は陥たること遣恨何事か之過ん然れども阿容、今日ぞ日頃の手術を顯はし大刀折れ力盡るまで帶する刀は宗近なり斯いふ我は吉田半介、今日ぞ日頃の手術を顯はし大刀折れ力盡るまで思ふ存分働きくれんイザ奸物ども撃て獲れ、實我今の一言こそ二世を貫ぬく未來記にて我死して是より以後、幾百年の年を重ね幾十回の變更ありて世は今日と變るども物惣て奸徒等上よあらば愚民の之に壓仰され壯士は之が爲に鎧れて國家の元氣衰退し敵國外寇これに乗じ上下安堵の時なからんこと、鏡に懸て見るが如し其方共は斗臂の小人、其邊の大機は知るまじけれを熟耳底に覺ゆる居て要路の奴等へ傳言せよ、傳言せよト思ふ限り罵詈雑言を聞も丁らす捕吏の頭人足踏ならし（頭人）小瘡な宏言上へ對し恐れ多き次第なり其方過分の罪を犯し身の措處ろに切迫して早桶の中に匿れ、密かよ市中を徘徊したれど明奉行は之を

脱さず其早桶の昇ひ棒に充分手澤の染たるは曲者やらんと見破られ、極密探偵残る方なく
遂に愛に到りしかり、論は無益だソレ者ども召捕めされト聲を振はせ烈しく下知を専ふり
程に捕吏ども今とあり、心憶せと詮方ささ多勢を恐み八方より御用の聲の力として手
く十手ふり翳ま蔵ひ蒐れを擬勢のみ近づき難てぞ見たりける

第六十一回

豪邁不屈雲霞に齊しき、捕吏共を物ども爲すして思ふ存分罵去つたる半介が大胆不敵に物
慣し捕吏共も容易には進みかねて避易猶豫の体あるにぞ捕吏の頭人何某等は斯甲斐さ事
に思ひ名々部下の捕卒を勵まし怒り罵詈下知せしがば捕卒も今は黙止がたさ多勢の恐み
擬勢を張て御用くと呼かけあから八方一時に半介へペラくぞ撃て掛るを待設けたる半
介は足場を定めて宗近の太刀を眞額に振舞し遠てす騒がず呼吸を測り進退よろしく度を外
さそ右を撃ち左を拂ひ前後に當りて良暫時く切まくり斬まくるよ刀は宗近擊手は劍客、太
刀風鋭く空撃さきまぞ僅か二時三時にして撃る者數を知らず事不容易に見へたりしか
ば頭人共胆を冷し下知を傳へ人數を集め此上は只遠巻よして其勢はひの盡るを俟んと稍麻
の如く竹葦の如く四方嚴重に推取巻、衆目を注ぎ疾視つゝ處さじものぞ打目成たり、
半介は一息ついて此爲体くを見廻しあがら太刀を拭つて冷笑し「鼠に均しき者共を幾百人
撃たりとて無益の教生無厭骨あり、最早此等で大概は年貢を納めて往生せんと決心しつゝ
永代橋の中央に進み行て復大音を振しほり「先刻捕者が演述したる言葉の趣むき逐一は熟
要路の人と傳は治國の道の大基とせよト云も了らす欄干へ足踏かけて宗近の及ぶ袖を巻添

つ、左の肚へグザと刺し徐々に右へ引廻して懸て咽喉を振切むへす俯伏し臥て息たわたり
とぞ實に維時文久四年六月某の日の事なりと云ふ一斯る處ろへ東西より警護の捕吏の支
るをも、怖れず法まそ素足の儘よて狂氣の如く走來りしはお民七の兩人よて双方一時よ
半介が血液に塗れし亡骸へ折重なり抱きつゝ物をも云はず泣伏たる折から外木由衛門も半
葉を背負て走來り此爲体くを見るが否や共音にアツと泣を見て幼稚けれど半葉へ父の
手を把り足を撫で只「ア、と御細つ、泣叫びて賣はる始末は捕吏共目注せして件人の四
人よ打向ひ其方共は半介が由縁の者か他人なるか當夫由縁の者ならバ斯る處ろへ踏込
自から繩を受んとて此舉動は致そまじ他人ならは疾く立去れグツとして居て連累くふな
ト聲高し叱り退るは是れ其筋の内命に據り半介が遺族の者へは別段の沙汰も爲すして其
類の激動を密かに押さへ置の心なるか特と言葉を腰味にし之を去しめんと爲たれどもお民
は更なり葛城も共言葉を打捕へ「イエ、私しは半介の妻、民と申す者でふひ、私しも
主が由縁の者よ何れも他人じやムりませぬ、願を半介が死骸諸ども、お連なされて下
りませト思ひ入て云ひ放すを由衛門遠て、推止め、彼等二人は半介が遺縁の者で御座りま
すか昨今少々狂氣の氣味ゆゑ何事を申すやら取止もなき申し條、何卒れ聞免し下され此儘
お死し下されたくと云に捕吏等黙頭て、然らば其方右兩人を召連て歸るべく又格別の議を
以て上思し免あるに依り半介が首を死し死骸は此儘其方どもね下し賜はりはどのに
んで引取申せ但し葬式一切の相成らすと心得べく實に今日の御計らひは右無例の次第な
れば其方ども有がたく思ひ尙心得違ひなきやう精々神妙緊要なりト幾度か指示しつ懸て衆

第六十三回
多の捕手共は懸々と爲て引揚ゆきしと

當下外木由衛門は永代の橋上にて立腹切て終を遂たる半介が亡骸よ、取着しま、泣入る
民どお七の葛城を叱り罵まじ辛やく泣を止めさせて我は四下を走廻り一挺の釣盤と兩
人の人夫とを雇ひ來り、半介が死骸を昇せて濱松町の家に歸るに民お七も駕に乘て半葉
を抱き之に附從ひ諸共に歸り來りつ是よりして復た二時三時も、返らぬ愚痴を云もしつ云
れも爲つ、果しなきまで泣ては口説き口説ては更打泣こと限りなきまで、由衛門も此爲
休くに道理なりとは思へども特と聲を振立て種々に叱り懲り遂に半介が亡骸を菩提所へ葬
むり丁り尋で跡々の事を圖るに民も七も是限り尼に成んど云けるを之も由衛門推止め
て心さへ尼も成れば強がら姿を變るに及ばずと説諭し、先はか七へも我家を盡ませぬ民の
家に同居させて只管半介が追善の爲め念佛に日を暮せたりしと、斯て後は別段に記すへさ
程の事もなく復幾干の日月を送りて世の中明治の御代と成しが是より先き由衛門は疾病よ
因て死亡なり尙月を積み年を累ねて半葉も既成人せしかは種々の事故に遭遇せしものち遂
に東京へ移りもみ神田連雀町の邊に於て一の番紙屋を開きし處ろ思ひの外繁昌して母
どお七とを養ふに不自由の字も知らず半葉はますく商賣を勵み後神田を去り芝へ
移り呉服店を開き去が明治十五年の秋、相州頼須賀へ引移り爰に熟々亡父の事を回顧して
所感ありしが算盤を捨て農歸し姓名惣てを一變して未も妻を要る事なく三人今に暮し居
とぞ半介が墓は或人の説に本所の法恩寺に存よし又三吉と作強とは其終りを詳ひらかに爲

す、次に本編の物語は最初より半介が虚無黨手段を運用しけるを眼目として記すべき善な
りし處ろ差支々の廉出來せしゆゑ不本意ながら右を省きて爰に本傳を説納む但し其事と其
遺族は明治代に渉るを以て之を明治俠客傳とぞ題したるなり焉

明治二十九年九月十日印刷
明治二十九年九月十五日發行

翻刻者發行

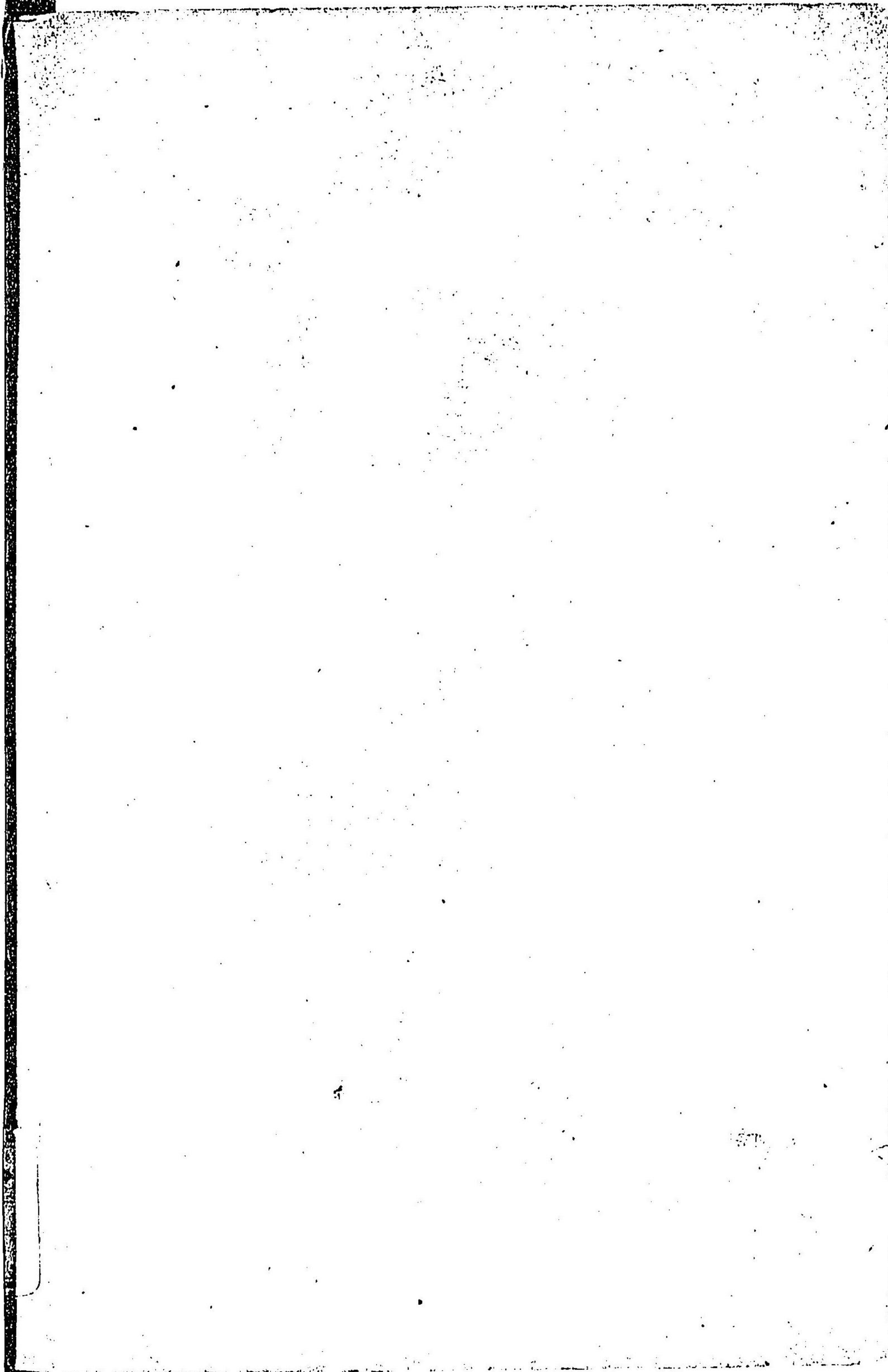
神田區佐久間町三丁目三十八番地
市川路周

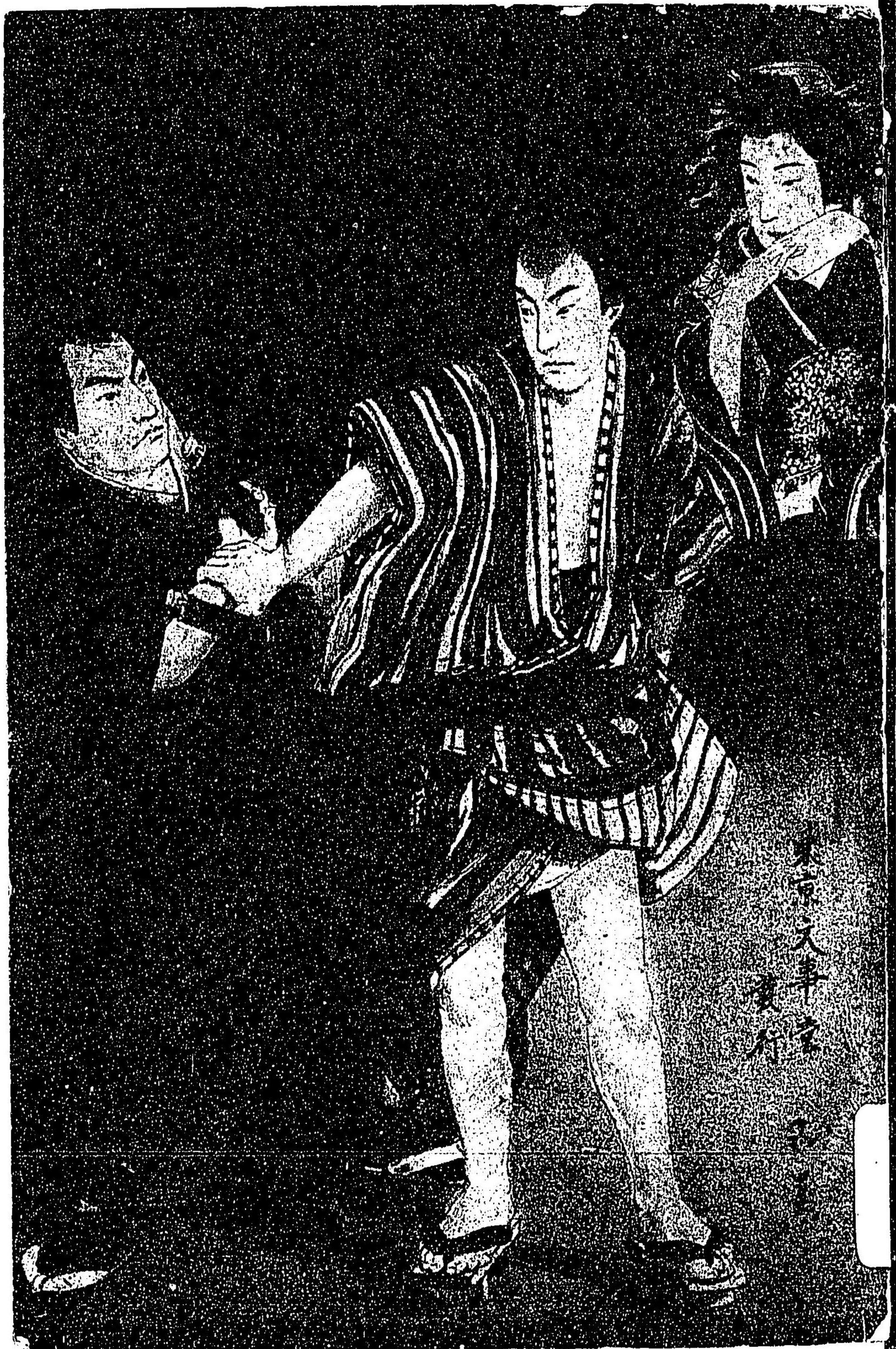
印刷者 龍雲堂 大場 沃美

神田區柳原河岸第十四號地

發行所

神田區佐久間町三丁目三十八番地
文事堂





091462-000-0

特9-111

明治侠客伝

文事堂

M29

DBN-2382

